
クロスウェポン

氷冷 飛鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロスウェポン

【Nコード】

N7437M

【作者名】

氷冷 飛鳥

【あらすじ】

この世界との平行世界となっている世界クロスワールド。

そこでは冒険者が魔物を退治し、世界の中心にある最強の武器：聖^ク武器^{ロス}を目指す。

しかし、あまりにも冒険者が弱いということで王は冒険者育成学校を設立。

そこで剣士、戦士、召喚士、魔術師、弓使い、武闘家のどれかの職業になるためのコースが設置されている。

飛鳥はあることが理由で剣士科から魔術科に転入した。

これは飛鳥の成長をみるストーリーである(？)

新たな始まり

「うっ…緊張するよお。」

ぼくは魔術科四年の教室の前に立っていた。

ぼくはグランズ冒険者学校の剣士科から魔術科に転入しようとしていた。

「え、では入りなさい。」

その言葉でぼくは扉を開ける。

そこに広がる光景は…

「……みんながぼくを見ている…。」

みんながこちらを見て、恥ずかしかった。

そんな中から

「やつほ、飛鳥っち〜！」

という声が聞こえてきたので辺りを見回すと、案の定そこにくれた。

「鈴さん！」

ぼくが二年の時の野外実習で一緒の班になった鈴さんだった。

誤解しないと思うが、鈴さんは一応ぼくと同じ年である。

ただ、その実習の時に無能なぼくをサポートしてくれたからその呼び方が定着してしまったのだ。

しかしその前からも「鈴さん」と呼んでいたのだが……。

「剣士科はどうしたの?」

「あ、剣士科をやめてこちらに来たんです。」

「ふーん、どうして?」

「剣士科は…あまりぼくには向いていなかったようですから…。」
「そうなんだ。まあそんなこと気にせず楽しくやりましたよ。うでは
ないか!」

「はい!」

「そういえば……」

「おい!」

鈴さんが話を進めようとすると、先生が制止してきた。

「まだ自己紹介をしてないだろ……。」

……すっかり忘れてました。

新たな始まり（後書き）

何かいい職業があったら、提案しても結構です。
登場人物紹介は次回します。

キャラ紹介（+他）

飛鳥 魔術科四年

僕ツ子。以前剣士科に所属していたが、剣士スキルを全て覚えてしまい（普通卒業までで最大七割程度）、覚えることが無くなったため魔術科に転入した。このことは内緒にしているつもりだが、ほとんどの生徒が知っている。

鈴

のんきな人。飛鳥とは二年の実習で一緒の班だったことから知り合う。飛鳥の転入の理由は知っていたが、彼女が話したくないためどうでもいいと考えている。因みに「飛鳥っちは私の嫁！」と言っている。

グランズ冒険者学校

冒険者育成学校。コースは剣士、戦士、魔術師、弓使い、召喚士、武闘家がある。

間違いやすそうなので説明するが、この世界では剣士は剣を武器に使い、戦士は槍や斧を使って戦うものである。

11歳から入ることができて、一年から八年まである。

私

自己紹介の時、ぼくを見る目が完全に「こいつが噂の…」と言って
いるようだった。

鈴さんだけはすごいキラキラした目でこっちを見ている…。
なぜか悪寒がした。

「飛鳥つち。」

休み時間になった途端、鈴さんが抱きついてきた。
しきりに頬をすりあわせてくる。

「飛鳥つちはこの科に入ったばかりだけど何か呪文の一つは覚えた
？」

「あ、意外に普通の質問…。」

「ん？何か言った？」

「あ…、いえ、何でもないです。呪文は下級魔術なら全ての詠唱は
覚えましたが、実際に使えるのは5個程度で、しかも下級魔術の
中の下級の魔術なんですけど…。中級魔術などは下級魔術を完全に
覚えてから覚えようかと…。」

「ほ、飛鳥つちすごい！さすがは剣士スキルを全部覚えた超人。

…あ

鈴さんはしまったと言うような顔をした。

「…？知っていたんですね？」

「ま、まあみんなが噂していたしね。」

「なんでそんなに慌てたんですか？ぼくそんなに気にしていないで
すけど…。」

「えっ、そうなの？さっき聞いたとき嫌そうだったから。」

鈴さんは焦って謝罪をしてきたがやっぱりぼくにはなぜそうするかわからなかった。

「あれはただ説明が面倒になるからあとで話そうかと思ったんです。気を使わせたのならすみません、謝ります。」

「うん、わかった。飛鳥っちは優しいね。」

鈴さんはこちらに笑いかけてきた。

こう見ると鈴さんもかわいいな…。
なんて思っている…

「席につけと言っているのがわからんか！！」

先生の声が聞こえた。

ぼく達は結構な時間話していたみたいだ。

「今日は武闘家科との合同実習にする。」

武闘家科…、あの人がぼくと同じで剣士科から転入したところか…。
あの人にとっては目障りなだけだと思っけど元気にしているかな？

「あ、そうだ。飛鳥っち、しゃべり方と一人称変えてみない？なんかそれじゃあ堅苦しくて少し嫌なんだ。」

実習のための準備をしていると鈴さんが提案してきた。
僕ッ子も少しは需要があると思っただけだな…。

「別に鈴さんがそういうならやってみますけど……。」
「『鈴さん』って呼び方もやめてほしいな。私たち友達でしょ？」
「確かにそうですけど……。」
「ならいいじゃん！過去のことなんか忘れてさ」
「なんか今語尾に星があったような。」

「で、どんなしゃべり方でどんな一人称にすれば？」
「ん〜、友達としゃべっているみたいにしていけばいいよ。一人称は私くらいが普通だね。」

そんなことを言われても簡単にできるはずがない。
一応鈴さんの頼みだから仕方ないよね。

「ま、まあやってみます。」「だ〜か〜ら〜、変えてって言うてるじゃん！」

鈴さんがすごい怒ってる。
ゲーム（！？）はもう始まっていたらしい。

「すみ〜、ごめん。難しいです、じゃなくて難しいよ……。」
「いいよ、だんだん慣れさせていけばいいんだから」
「けど、間違えたら鈴さん怒るし……。」
「……………」

鈴さんが無言に……………しまった！まずい！

「あははは、少し注意するだけだよ。やっぱり飛鳥っちはかわいいな〜。」

鈴さんが笑っているが、ぼく、、、、私は全く意味がわからなかった。

私（後書き）

新キャラは出てきたら詳細説明します。

国語力がない作者ですが、応援お願いします！（遅っ！）

武闘家科の少年

実習は先生の立ち会いの下本当のダンジョンで行われる。
ぼ…わ、私にはそれが一番苦になる時間だと思います…。
父さん、母さん、今…逝くよ…。

「何遠くを見ながらロープを持っているの。死んじやだめだよ。」

ハッ!!

鈴さ…鈴の声で正気に戻る。

というよりナレーションでも一人称と呼び方を変えなければならぬ
いのですか？

「なにブツブツ言ってるの？遅れるよ？」

鈴さん、一応あなたが原因ですよ。

時間内になんとか目的地に着き、全員集合となった。
どうやら私と…私たちが最後だったみたいだ。

「今回の実習は一班三人になってもらう。…それでは班を作ってくれ。」

その言葉で多くの人が動き出す。
早くメンバーを見つけないといい人がいなくなってしまう。

「飛鳥つち、一緒にやるよね?」

「もちろんです!!あ、もちろん!」

「ふふつ、あと一人どうする?」

「あと一人はあてがあるから まってて。」

「ほーい。」

「0!!」

私は0と呼ばれた少年に声をかける。

この0という人は本名で呼ばれたくないらしく、呼ばれ方を聞いたとき「なら0と呼べ」と言われたからそう呼んでいる。

「飛鳥か…。」

「な、なに?私じゃ不満でした、じゃなくて不満だった?」

「なんだよ、そのしゃべり方。」

呆れている。そう言われるとこちらも恥ずかしい。

「ま、魔術科の鈴という人が『話し方変えて』と言ったから今頑張っているんです。」

「フン、お前にはそういうじゃれあいがお似合いだな。」

「なんかそう言われるとムカつくな。なら、ぜ…0は私の前のしゃべりの方が良かった?」

…ぼく何言ってるの?

「正直、あのしゃべり方は聞いててイライラしていた。」

無表情で言われて少しムカつく。

「まあよかつたんじゃないか？普通の女子みたいだし、お前なんか気を使っているみたいだったし。」

「な……何に気を使っているっていうの？」

「さあな、そんなのお前が気にしなくていい。というよりお前、俺に用があつたんじゃないのか？」

あ、0に話をそらされたから忘れてた。

「そうだ！私と鈴さんと同じ班になってほしいの！」

「お前と？ふん、いいだろう。せいぜい足を引っ張るなよ。」

こうして、0が仲間になった。けど上から目線がすごいムカつく！

「へえ、飛鳥っち剣士科の元一位と友達だったんだ。」

「た、ただ席がずっと隣だっただけで……。」

「飛鳥、お前はいろんなところの首席と仲良くなるようだな。」

急に0が話に割り込んできた。

しかし一応は事実で鈴は魔術科の首席であり、毎回剣士科首席の0と闘っていたということだった。

私はその二人とは真逆で剣士科最下位だった。

「鈴！お前は少し間違っている！こいつは俺の友達ではない！ただの知り合いだ！」

なぜそこにキレる……。

私は友達ではなく知り合いと言われてショックだった。

「なに泣いてるんだ飛鳥。」

「な 泣いてないですよ!」

目元を触ると涙が出ていることに気がついた。

「では、開始!」

そんなこんなで実習スタート。

実習の内容はダンジョンを通り抜け、グランズの隣街のヒラブルまで行き、その役所で文をもらいグランズに帰ってくるというものだった。

「およ? 飛鳥うちと0は剣ですか。」

「剣は使い慣れているし、魔術はこれでもできるから。」

「そういうことだ。だから俺と飛鳥は前衛だな。」

「鈴は回復魔術が使えますか?」

「まあ、下級魔術の『ホーリー』くらいかな? だから道具を大量に買ったほうがいいかな。」

「そうですね。」

「フン、使いすぎるなよ。」

0はそう言うつとすぐに道具屋に向かっていた。

「わ、私は剣士科の時の私とは違うんですから!」

それについて行く私と鈴。

武闘家科の少年（後書き）

0

元剣士科の首席。

飛鳥とは一年の時から席が隣だった。

本名は話したくないらしいためわたくしも個人情報のため教えませ
ん。

一応「私」が一話でこれが二話だと考えてください。

友達に言ったら「『新たな始まり』が一話かと……」（内容は事実と
少し異なります）と言われたので書きました。

実習スタート

「道具がもうほとんどないだと!?!」

珍しく0が驚いている。

無理もない、現在この道具屋に売れる道具が実習生が買い占めていきほとんどないらしいからだ。

「次の入荷はいつなの?」

鈴も参加している。

私は…ウィンドウショッピングを…。

「は、早くても明日じゃよ。ルスピカまで向かわなければいけぬからなの。」

道具屋の店主であるおじいさんが気圧されている。

ちなみにルスピカはヒラブルから北に向かった街である。

「…回復道具を有るだけくれないか?」

「あるのはヒールカプセルが2個にチャージカプセルが1個じゃ。」

「これだけで乗り切るのか…。難しいかもね。」

いつになく鈴が真剣な表情をしている。

「それだけを貰おう。あとそのウィンドウショッピングしている奴にその剣を買ってやってくれ。」

0が突然こちらを指差して言った。

「ちょっと待って下さい！私買えるだけのお金持ってないよ！」
「安心しろ、俺の奢りだ。貸し一つだからな。」

いつもは厳しく冷たい0が優しい。
やっぱり同じ班だからかな…。

今は危機的状況だからなるべくダメージを少なくしたいからかな？

「なにポケットとしている。早く来い。」
「わかった。」

…後者だろうな、きつと。

街の外へと続く門にたどり着いた。
そこには先生がいた。

「お前ら遅かったな。お前らの班以外の班は全て出発したぞ。」
「くっ、まずいな。」

0が悔しがっている。
なぜだろう。

「明日の夕方までに戻ってくるんだぞ。」
出発した。

0が早足で進んでいく。

「〇〇、どうしてそんなに早く歩くのさ。」

あまりにも先に行きすぎているため私が止めようと思って声をかけた。

「お前ら遅いぞ。早く行かないと最初に戻ってこれないだろうが。これもお前らが鈍くさいせいだ。」

〇の目的が「一番最初にゴールする」ということはわかったが、遅いのを私たちだけのせいにするのは納得いかない。少しくらいは自分にも責任があるだろう。

「わかったから、こっちも少しはペースを上げるからさ、そっちも少しペースを落としてくれない？」

「ああ、いいだろう。」

「ありがとっ、ぜろ。」

仕返しに少し呼び方を変えてやるうかと思っただ。するとぜろは顔を真っ赤にして顔をそらした。

「は、早く行くぞー！」

やっぱりどこかおかしい…。

ダンジョン・そこは魔物（人によってはモンスターともいう）が生息する場所。

しかし、その魔物もE級危険地区の魔物に比べたらかわいいものだ。それに苦戦する私たちもまだ半人前以下ということだろうか？

「飛鳥、そっちのウルフお願い!!」

いつもは「飛鳥っち」と呼んでいる鈴も真剣だ。

「わかりました! 『焼ける! フレア!!』」

魔法陣が私の周りに現れ、そこから火の玉が発射される。やっぱりまだ威力が小さいらしく、あまり利いていないようだ。

「魔法に頼るな。『閃風刃』」

ぜろが剣を風のように振り下ろす。

「みんな、どいていて。『我に仇なす者、天雷によって裁かれん
ヘヴンズライトニング!!』」

空から白い雷が落ちる。

そして周りの魔物が一瞬によって消滅する。

「ふっ、その魂、天に捧げよ」

あとは決め台詞で締める。

「どう? 魔術を覚えていけばこんな呪文書にない呪文を考えれるし、
こんな複合魔術を身につくよ」

「すごいですね！私もそんなやつをやりたいです！」
「ならまずは剣士スキルからやってみるよ。」

私があこがれにふけついると、ぜろが口を挟んできた。
口を挟むのは彼の趣味なのだろうか？

「わかってますよ。そういうばさっきの閃風刃もオリジナルだよ
？」

「ああ、そうだ。あと敬語とタメ語が混じって変だぞ。」
「うるさいな。けど、今回ぜろがここに魔物の群れがいるのを知っ
ていながら『最短ルートだから仕方ないだろ』とか言っていないけれ
ばこんなことには…。」
「だまれ！」

その威圧感で何も言えなくなってしまった。

「とにかくくさ、あんな魔物邪魔だから倒していけばいいんだよ。簡
単なことじゃん。」
「だな。」
「…倒していたら逆に時間くいません？」

実習スタート（後書き）

あれ、なんで飛鳥が魔術を？

剣士スキルでカツコよくキメさせるはずだったのに…。

（ > < ; ）

魔術

森を歩いている私たちは暇なので鈴さ あ、鈴の複合魔術の話聞いていた。

「それでね、魔術と魔術を組み合わせるってすごい難しいんだよ。魔術一つ一つにある術式をうまく合わせないと暴発したりするんだから。詠唱もちゃんとそれに合ったやつじゃないといけないし。」
「詠唱も魔術の発動に関係があるのか？」

ぜろが質問する。やはり魔術を組み合わせることに少しは興味あるのだろうか。

「一応ね。けどだいたい合っていれば適当な詠唱でいいんだよ。」
「鈴さん、オリジナルな魔術は？」

「うーん、それは術式を一から作ってやるからね。私はそんな面倒なことはしないから。」

「そうなんだ。」

「やはり魔術の複合は剣士スキルや武闘家スキルとは違うようだな。」

「だね。鈴、私も複合魔術をやれるようにしたいです。」

「簡単だよ。別に下級魔術を組み合わせるだけでも出来るから。」

そういうことで私は「フレア」と「アクア」を組み合わせることにした。

その間にもちゃんと歩いている。

ぜろが

「止まっているのは時間の無駄だ。それに術式を組み合わせるくら

いなら歩いていてもできるだろうからな。」

と言っていたからである。

術式を考え始めてから二十分弱、ようやく術式の組み合わせが完成した。

完成したといってもまだ発動するかわからない。

「いきます！『水よ、火に温められよ。火よ、水に冷まされよ。水よ、周りを焼き尽くせ。火よ、周りを飲み込め。火と水、これらを交わらせん。』」

二つの自然その1（ダブルアース・ワン）！！！！」

その呪文から放たれた魔術は私たちの周りの草木を吹き飛ばした。

「」

「……？」

「……！！」

三人で啞然としていた。

「す………すごいよ飛鳥っち！下級魔術の組み合わせだけでこんな上級魔術以上の威力が出せるなんて！！やっぱり飛鳥っちは天才だよ。」

鈴が抱きついてきた。

「おい、一つ質問なんだが……」

「はい、何でしょう?」

「なぜ元が下級魔術だと知っていながらあんな長い詠唱を言った? 完全の上級魔術並みの詠唱時間じゃないか。」

「え〜と…、さあ?」

わからなかった。

半分適当に、半分真剣に詠唱をしていたらこうなっただけなのだ。

「飛鳥つち〜。」

突如、鈴の声が聞こえてきた。

「あ、はい。なんででしょう?」

「元の術式二つとも間違ってたよ?」

「え…本当ですか?」

「ホントホント。どちらも上級魔術の術式だったよ。」

びっくりした。

まだ上級魔術自体に手をつけていなかったし、そもそも中級魔術も発動できていない人が上級魔術の術式を組み合わせる複合魔術を発動していたなんて…。

「私……」

あれ?

目の前が真っ白にな…っ……………て……………。

「おゝ、飛鳥つちお目覚めかい？」
「あれ？私…」

気がつくとも私たちは目的地の前くらいにいた。
しかも私がだれかに…って

「ええええ！？な、なんでぜろが私を！？」

「ぎゃあぎゃあ喚くな。耳が痛くなる…。」

「0は気絶した飛鳥つちをここまで運んでくれたんだよ。それにしてもまの魔術で気絶するなんて、もつと魔力を多く持たないと。」

まずそこを注意するのですか。

「あ、飛鳥つち。0には気をつけた方がいいよ。0ってば飛鳥つちが気絶した時私が運ぼうとしたら、『俺がやる』って言ってたから。」

「すまん、こいつ斬っていいか？」

ぜろが剣を構える。

「ダメです。それよりも下ろしてください。」

ハッとしたか、ぜろは慌てて私を下ろしてくれた。

そしてぜろは鈴に斬りかかる。

「『我を剣から守れ ブレイクシールド！』」

鈴は防御呪文で剣の攻撃をよける。

しかも移動しながら詠唱という難しい技術をこなしている。

「って、そんなことしている場合じゃないでしょ？早く先行こうよ
！」

ヒラブルの役所に入ったはいいが、中は意外に広くてどこに行けば
好いかわからない。

周りを見ると他のグランズの生徒がちらほらいる。

「しかし広いな。外から見ると狭く見えるからか？」

「ふふふ、ここは魔法で広くしているのです。」

そこにいたのは女性の係員だった。

「さあ、グランズへの文を渡しますからこちらへ。」

私たちはそれに従った。

しかし、他のグランズ生徒は誰もついて来なかったことが気になる
…。

魔術（後書き）

はい、今頑張つて一話の文字数を増やしている飛鳥（作者）です。
自分が国語力が無いために読者に迷惑かけていないか心配です。

地下へと続く階段を歩いていた私はふとある疑問が浮かんだ。

「あの〜、魔法って何ですか？魔術の間違いでは…」

「飛鳥！！もしかして魔法のことも知らないの！？」

珍しく鈴が「飛鳥」と呼んだ。

これは重大なことなのだろうか？

「え？知らないといけないことですか？」

「子供でも知っている常識だよ！あなたいままでどうやって生きてきたの！？」

「そ、そんなにひどい！？ねえぜろ、あなたは知らないよね？知らないって言うて！」

私はこの話し合い（？）の中、発言をしていない唯一の人物に顔を向けた。

「知らない。」

「だよね！？常識じゃないよね？」

「…というのは嘘だ。」

目すら合わせていなかった。

完全にバカにされている…。

落ち込んでいると鈴がしゃべり始めた。

「いい飛鳥っち、魔法とは家庭で使うものことで、魔術は戦闘で使うものことなの。使ったことないの？」

「大抵は魔法石でそういうことを補っていますから魔法なんてある

ということを知らなかったの。」

私さっき「魔法石」とちゃっかり魔法の存在を肯定していませんでした？

「はいはい、飛鳥つちはかわいいということと解決といきましょうじゃありませんか。」

なんか納得がいかないがこれ以上話していると時間の無駄だと考えたので先に進むことにした。

地下の最下層にきた私たちは少しの不信感を覚えた。

部屋は一つですごくいさびれている。

「ここです。」

「「「完璧嘘だ!」「」」

三人で同時に叫んだ。

嘘丸見えだろ。

「嘘じゃないですよ。町長はこういうさびれたところが大好きで、ここを町長室にしたのです。騙されたと思って、さあ。」

にこやかな笑顔で語られるとなんか反論しづらい……。

「一つ、聞いていいか。」

ぜろが私たち二人が言えないことを切り出した。

「はい、何でしょう?」

「ここが町長室ならなぜ他のグラન્ズの生徒がここにこないんだ?」

「あ、いえ。あの方々はもう用事を済ませて…」

「ならなぜ早々に出発しない?早く戻らないと成績に影響するだろう。」

「……」

黙ってしまった。

話し合った結果、元の場所に戻ろうと言うこととなり、戻ろうとしたとき

「ちっ」

舌打ちする声が聞こえ、そして

「万物の精霊よ、ここに大きな壁を作り上げ侵入者を閉じ込めよ!」

何かの呪文が聞こえたと思ったら、目の前に大きな壁が現れた。

「くそ!」

ぜろが壁に攻撃を加えても全くびくともしない。

「お前らが悪いんだ!正直に言うことを聞かなかったからこうなったんだ!」

「なんで…なんでこんなことをするんですか!」

豹変した係員に怒鳴る。

しかしこの壁は何だろうか…。

普通の壁ならぜろの攻撃が壊れるのだが…。

全く壊れない。

それよりも傷一つついていない。

「ツヴァイ坊ちやまの命令だ。坊ちやまがお前らを実習終了時間までこの部屋に閉じこめておけとおっしゃったからだ。その壁は魔法でできている！魔術で壊すことはもちろんのこと、何かで傷つけることなどできはしない！おとなしくそこにいろ！」

さっぱり意味がわからなかった。

なぜ家庭用である魔法が戦闘用である魔術を通さないのか…。

「魔法は家庭用だけど以前は精霊の魔術だったの。今は精霊が人に協力するようになって詠唱により精霊の力が宿るようになったの。さつきあいつが詠唱で『万物の精霊よ』って言っていたでしょ？それは全ての精霊の加護をこの壁がうけているということなの。」

「さっぱりわからない」という顔をしている私を見て鈴が説明してくれた。

だがそれで理解した。

しかもこいつ、ツヴァイの部下（？）なのか。

…あれ？ツヴァイって誰？

「ねえぜろ、ツヴァイって誰？」

全くわからないし、ぜろは鈴みたいに勝手に教えてくれる人ではないと思ったので聞いた。

「武闘家科の元トップだ。金持ちで自慢したがりやのクズだ。まさ

かヒラブルの町長の息子とは…。」「

壁の向こうから声がしない。

多分あいつはすぐにその場から立ち去ったのだろう。

それにしてもツヴァイというやつは…とんでもないカスのようだな。

「鈴、ぜろ。」「

私の呼びかけで二人がこちらを向く。

「この壁をぶち壊したいからさ、少し目と耳を塞いでもらっていないかな?」「

「飛鳥つち、なんか人が変わってない?」「

「あれがあいつだ。あいつは怒ると口が悪くなるし性格が暴力的になる。あいつは自覚していないようだがな。」「

後ろで二人がなにかわけのわからないことを話しているようだけど何だろう?」

まあ私には関係ない話だろうけど。

「鈴、私が『ブラックカーテン』発動するからそしたら防御魔術かけといて。」「

「え?飛鳥つちその魔術つか…?」「

「うるさいな!。詠唱と術式は覚えているから発動できるの!!移動中私が術を覚えていたの知っているでしょ?」

もうやかましくて仕方ない。

こっちは早くツヴァイの関係者を潰しにいかないといけないのに。

「『闇の幕、敵を包み、光と音を遮断せよ！』
ブラックカーテン！』」

黒い布みたいなのが鈴とぜろを包む。

「『光の壁、我らを包み、あらゆる物から身を守れ。』
サークルシールド
結界！』」

鈴とぜろの周りに結界ができる。

これで壊した壁の破片が彼女らに当たることはない。

「さて…、『契約者飛鳥^{マスター}が命ずる。この壁にある精霊の加護を解き、この壁を破壊せよ。』
召喚^{サモン}！いでよ、黒！白！』」

私の周りがある魔法陣から二人の男女が出てくる。
男の方は髪が真っ黒で、全身も黒い服を着ている。
逆に女性用の方は髪が真っ白で全身白い服を着ている。

「飛鳥よ。お前もうガキじゃねえんだからさ、『黒』つつ〜呼び方やめないか？」

「はいはい、ルナ・サン、急ぎたいからその壁、早くぶっ壊してほしいんだけど。」

「飛鳥ちゃん、怒っていらっしやいますね。」

白もといサンと黒もといルナはまず壁を調べ始めた。

「ほお、魔法か。これは土の精霊グランのやつを基盤に全ての精霊の加護を与えているな…。俺らの加護は消せるが他の精霊の加護はどうする？」

「そんなの、精霊の中でトップクラスの能力を持っているあなたた

ちがどうかしなさい。元が精霊グランの魔法ならグランがその魔法を解除してみるのはどうなの？」

サンは考えている様子をみせ、すぐにこちらを向いた。

「できるとは思いますが、グランの他の魔法も解除しなければいけないと思いますよ。それでも？」

「そんなのどうだっていいよ。私たち以外がどうなったって構わない。」

「わお、飛鳥ちゃん完全に怒ってる……。」

サンが引いた目でこちらを見ているが、私なにか言ったかな？

「もう一つ方法があるぞ。」

ルナが口を挟む。

何だろう、もう一つの方法は。

「精霊全員にこれの加護を解除してもらえば俺達が破壊できる。」

「なら早くしてきなさい。」

二人ともやっぱり何か変な目で見てくる。

「ルナ、本当にやりずらくない？」

「あゝ。いつもは優しくして俺達にこんなことを言うやつじゃないんだけどな。」

「全くね。飛鳥ちゃんをこんなに怒らせたツヴァイって誰なの？私達もそいつに殺意を覚えるわ。」

そしてこんな会話をして消えた。

なぜ怒っているんだろう？
私には本当に理解できなかった。

「『アノウチノスズメ解除』」

ずっと目と耳が聞こえない状態ではかわいそうなので魔術を解除した。

「もういいの？」

「……まだか。」

「いえ、もうすぐ解除されると思います。そしたらこの壁、ぶち壊してやりますよ。ふふふ……。」

私の発言に二人が頭にハテナマークを浮かべていた。

「何をするきだ？」

「もうやってもらっています。終わったら連絡をくれるように言っています。」

二人がさらにハテナマークを浮かべる。

今考えるとここを脱出しても現在の時間から制限時間以内にグランズに戻るかどうか……。

「飛鳥、聞こえるか？」

頭に直接声が聞こえる。

『黒？聞こえるよ。』

『その呼び方昔から気に入らないのだが…。急いでいるから早めに話すぞ。その壁の魔法の精霊の加護を解除した。破壊可能だ。』

「鈴、ぜろ。今からこの壁を破壊する。また結界でも張っておいて」

二人が何も言わずにその指示に従ってくれる。

「『世界を支える自然の力、火・水・風・地・雷・氷・光・闇、万物の力宿りしこの魔術、仇なす者全てに制裁を加えて、聖なる加護を我らに与え導け!!』」

「あ…飛鳥、そんな魔術どこで？」

「完全なるオリジナルです。詠唱も術式もただ八属性を組み合わせただけだから失敗するかもしれません。」

「ならやめればいいんじゃない？一人ずつ倒せば…。」

「そんなことしていたら時間がなくなっちゃう。『エレメントエイト!!』」

八色の光が私の周りから出現する。

そしてその光が壁を破壊し、さらに建物にも降り注いだ。

「おい飛鳥！このままじゃ俺達が瓦礫の下敷きになるぞ！」

ぜろが叫ぶが私は聞かない。

他のことに気をそらすと魔術が途切れてしまいそうだったからだ。今でも限界に近い状態となっている。

「飛鳥うち！私も手伝えない？」

鈴が呼びかける。

返事したいが、そうすると集中が途切れてしまいそうで怖い。

怖いが返事しないとだめそうだったから

「お願い！今でも集中が途切れそうで危ないの。」

早口で言ったが、そのせいで魔術が途切れそうになった。

鈴が慌てて手伝いに入ってくる。

しかし手伝いといっても魔力の補助くらいのものだ。

「飛鳥つちのやろうとしている魔術、わかったよ。これほど膨大な効果なら一人じゃ足りないよ。まったく、飛鳥つちは自分を犠牲にする気？」

魔力の補助をしてきている鈴が耳元で囁いた。

確かにこれほど強力な効果なら一人では足りないし、二人でも足りないかもしれない。

実際まだ半分も建物を破壊していないのに私の魔力があと少しだと感じる。

しかも鈴は結界を維持する魔力もある。

結界を解くと確実に私達は潰される。

「飛鳥つち、心配しないで。私の魔力は飛鳥つちの倍かそれ以上あるから。生まれつき魔力が多いから魔術での魔力切れは今までないから大丈夫だよ。」

この状況でふざけてくれる。

しかし彼女も苦しい顔をしている。

やはり強がっているが、結局現在の彼女の魔力も残り少ないようだ。

「もう飛んでもいいんじゃない？まだこれぐらいだけど十分じゃ…。」

「全壊させなきゃスツキリしない。」

「自分のためだけを考えて自分や他の人に迷惑をかけていいの!？」

鈴が私を叱る。

けどそれは正当だ。

私はさっきまで自分がスツキリするまでここから離れたくないと思っていた。

しかしそれは自分が魔力切れになるだけだし、何よりその前に鈴やぜろに迷惑をかけることとなる。

「…そうですね。わかりました、戻りましょう。グランズに。」

「エレメントエイト」は八つの属性の光で相手を攻撃し、そのあと自分を指定した場所に転送するという魔術である。

その転送を利用し、私達はグランズに戻る。

しかし転送魔術は距離があればあるほど魔力がいる。

私達が帰れるかはギリギリだろう。

「ではいきます。…『ポイント転送』!」

周りが歪み、私達はヒラブル役所から離れる。

「そついえば文は？」

転送中の状態で私は二人に問いかける。

「それなら心配ない。あのさびれた部屋に一つあった。」

ぜろが手にある文を見せる。

周りのはつきりしてきて私達はグランズ冒険者学校の校門の前に立っていた。

しかし私と鈴さんは魔力を使い果たし、意識を失った。

罫（後書き）

書けなかったので説明

魔法は家庭用で元は精霊が使う魔術。ここまでは説明済みですが、魔法は普通の人間は使えない。使うようになるには精霊の力が宿った魔法石をつかうことである。

飛鳥は魔法石で代用と言っていましたけど、実際は知らずに魔法を使っていたということです。

精霊の加護は一つの魔法石に一つなので全部使うのは全種類の魔法石を集めるということになります。精霊の加護は精霊達が自分の加護を解除できます。

さらにルナとサンの説明

サン 光の精霊

飛鳥の精霊。他の精霊とは契約をしていない。飛鳥とは飛鳥が生まれたときに契約し、初めて召喚されたときに見た目から「白」と呼ばれ、ずっと呼ばれ続けていた。飛鳥に憑依でき、憑依された飛鳥は性格が穏やかになり、光の魔法を魔法石なしで発動でき、魔術も魔力なし、詠唱なしで発動できる。

ルナ 闇の精霊

飛鳥の精霊。他の精霊とは契約をしていない。飛鳥とは飛鳥が生まれたときに契約し、初めて召喚されたときに見た目から「黒」と呼ばれ、ずっと呼ばれ続けていた。本人はその呼ばれ方が気に入らない。飛鳥に憑依でき、憑依された飛鳥は性格が荒くなり、闇の魔法を魔法石なしで発動でき、魔術も魔力なし、詠唱なしで発動できる。

逮捕！？

目覚めるとそこは学校の保健室だった。

しかし雰囲気が少し（？）違う。

私はベッドに縛りつけられ、横を見るとぜろが手錠をかけられて座っている。

だが私はこの状況にも関わらず眠たくて二度寝をしてしまった。

次に目が覚めると、私は別なところにいた。

ここはどこだろうと思っていると、壁の向こうから声が聞こえた。

『あいつ、いつまで寝ているんだ？』

男の声みただが、ぜろではない別な人のようだ。

この人の言う「あいつ」とは私のことだろうか？

『大罪人のくせに呑気だよな。』

『ああ、ヒラブル役所を破壊したということが知られていないと思っただのか。』

……もう一人いるみたいだ。

なぜバレているのだろう。

地下は私達以外誰もいなかった。

破壊して消えた私達は現場にいなかったということとなるはずだ。

『また見てくるよ。』

ガチャリと音がして扉が開いた。
男は私と同じ年齢くらいの人間だ。

「お、起きたのか。」

「あなたは誰ですか？私の友達は？」

男の顔を見ると不気味に笑っていた。

「あいつらか？あいつらはお前と違って起きたから違う独房にいる。」

「

「友達のところに行かせてください。私の大切な仲間なんです。」

「ダメに決まっているだろう。貴様も独房送りだ。」

そう言うと男は私の腕をつかんだ。

「最後に…あなたの名前は？私達が何をしたと言っんですか？」

男は少し考えてしゃべり始めた。

「俺はツヴァイ、武闘家科で『ジャッジメント裁きの者』の人間だ。お前たちはヒラブル役所破壊の疑いで拘束をする。」

目の前にいるのが私達がヒラブル役所を破壊しようと思った張本人だと知ったとき、驚いた。

「あなた、私達をヒラブル役所に閉じ込めたでしょ？どうしてそんなことしたの？」

「決まっているだろ。俺がまた一位に返り咲くためにだ！」

……ブチッという音が私の頭の中で鳴ったような気がした。

「……お前ふざけているのか？私達はそんなことのせいで捕まったというのか？」

ツヴァイはいまだに不気味な笑みを浮かべていた。

「一位になりてえんならそんなセコい手を使わず実力で頑張ったらどうだ！！」

「実力でこれなんだ。これ以上努力しても無駄だからだよ！」

ツヴァイも私と同じ位の大きさを怒鳴る。

私は小さな声で詠唱を唱える。

「『邪悪な闇よ、仇なすものを闇に飲み込め！！
ーン』消え去り二度と姿を見せるな！！」

ダークゾ

漆黒の闇がツヴァイに向かってはしる。

……ハズだった。

しかし魔術が発動しない。

「俺達がお前らを縛りつけるだけでなんの用意をしないと思ったのか？首に魔術を封じる首輪をつけた。」

そう言われて初めて自分に首輪がついていることに気がついた。

「さらにこいつはこんなこともできる。」

ツヴァイが指を鳴らす。

そうすると全ての感覚がなくなり体が動かなくなった。

「~~~~~!」

喋ることもできない。

ツヴァイが私を縛りつけていたものをはずす。

「立て。」

体が勝手に動き私は立った。

さらにツヴァイが続ける。

「奴らのいるところまで歩いていけ。」

「了解しました、我が主^{マイマスター}。」

次に自分が話そうと思っていないのに口が動き声が出た。

しかしそこから出た言葉は自分が絶対本気で言わない言葉だった。

「^{マスター}主人…か。さつきまで反発していたやつとは大違いだな。」

「言いたくて言ったわけじゃない!」[!]と言おうとしても声が出なかった。

私は歩き始めた。

歩いている途中、私はどうにかしてこの状態を解除しようと奮闘したが全く意味なかった。

牢屋まで歩かされ、そこには鈴とぜろがいた。

「入れ。」

牢屋に入る。

よく見ると鈴とぜろも私と同じような首輪をつけている。

「飛鳥っち!!」

鈴が叫んで私に近寄る。

しかしツヴァイが

「斬れ。」

と言い、私は剣を抜いて鈴を斬ろうとする。

しかしぜろが素早く私の剣をはじいてくれる。

「ハハハハハ！仲間同士で戦いあつ、こんなに面白いことはない。」

ツヴァイが去り、私は体を自由に動かすことができるようになった。

「…すいませんでした。」

「気にしないで。飛鳥っちは悪くない。私達も同じようなことをさせられたんだ。」

鈴が私に微笑みかける。

「だけどあれの対処方法は？」

「（バキッ）壊せばいいだろ。」

ぜろが首輪を外しながら言う。

…それができるのはこの中であなただけでしょ？

私と鈴の表情を見てできないと理解したぜろは私達の首輪を破壊しようとし鈴の首輪は外れたが私はぜろの手が首輪に触れる前に私が

剣をぜろに向けた。

「自己防衛機能に切り替えます。私に仇なす者は排除いたします。」
体が思い通りに動かない。

「どうやら戦闘で首輪を破壊する以外は方法が無いようだな。」

「私は事件の首謀者なのであなた方より高度な首輪を我が主からい
ただいているのです。ぜろ・鈴、残念ですがあなた方は我が主のた
めここで私の手で始末します。」

「あなたは首謀者じゃない！！私がやったの！」

「残念ですが私の記憶を調べたあとの結果なのであなたの言葉は嘘
だとまる見えです。」

剣を使い鈴に突撃する私。

「『我を打撃から守れ　ブレイクシールド！！』」

しかし鈴は私の攻撃を防御魔術で守ろうとする。
だが魔術が弱かったため魔術の盾は破壊される。

「『風迅雷閃牙！！』」

私は剣を振り、斬撃を飛ばし、そこから雷をまとった剣で相手をつ
くという剣士スキルを使う。

鈴が今度は

「『聖なる光の盾よ、我を相手の攻撃から身を守らせよ　ガード

！！』」

光の盾が出てくる。
ブレイクシールドは一枚で薄い盾だが、ガードは何枚もあり、厚い盾である。

「『閃光脚！』」

ゼロが急に私の前に現れ腹に蹴りをいれる。
幸い全てが思い通りに動かない私は痛みも感じないらしい。

「やりますね…。ならこれではどうですか？『世界を支える自然の力、火・水・風・地・雷・氷・光・闇、万物の力宿りしこの魔術、仇なす者全てに制』うっ…！」

攻撃をかわしながら詠唱をしていたが、ゼロの「爪円舞」（突き三発に蹴り四発を舞うように交互に繰り出す技）が腹に当たりそしてその隙に首についている首輪に突きを当てて首輪を壊した。

「すみませんでした…。私がこんなにも迷惑をかけてしまうなんて

「飛鳥つち、だからあなたは悪くないって。いくら私でも怒るよ？」

鈴が怒っている。

こうなったら…

「やっぱり我が主^{マスター}のために消えてもらいます。」

鈴がいきなり笑い始めた。

何気にぜろも笑っている。

「飛鳥つち…笑える。」

「????? なぜ?」

さっぱりわからなかった。

「あ、で、これをどう破壊する?」

私が鉄格子を指差した。しかし私はそこでさっきの戦闘でのダメージが体に襲いかかってきてその場にうずくまった。

「…二人とも本気で攻撃したね?」

「そうしないと私たちがやられそうだったから…。」

二人とも私から目をそらしている。

「と…とにかく、これを壊してツヴァイを殺しましょう。」

「そうだね。」

「なら飛鳥、剣を貸せ。」

ぜろに剣を貸す。

ぜろは私の剣での剣術と自分の武術で鉄格子を破壊する。

「何事だ!?!」

破壊した音で近くにいた人が走ってくるのが聞こえる。
多分「ジャッジメント裁きの者」の人間だろう。

「早くアイツのところに行こ。」

「誰のところだ？」

私は先ほど聞いたあの忌々しい声を聞き驚いて声が出た方向に顔を向ける。

そこにはツヴァイがいた。

「まったく…、あれは悪いと思ったから弁護の余地があったけどこれも重なって罪になると弁護できるかな…。」

ツヴァイが何かつぶやいている。

よく聞き取れないがどうせ悪いことでも考えているのだろう。

「自己防衛機能を倒して首輪を破壊するとはな。だが倒すのが一足遅かったな。これから裁判の時間だ。俺は弁護人の位置に立つ。」

「ふん、お前が弁護人なら罪が軽くなるよりも重くなりそうだ。…と、言いたいところだが俺達はお前をここで倒す。こいつ達とこんなことになるとは思ってなかったな…。」

ぜろがツヴァイに殴りかかる。

しかしさすが武闘家科のトップの二人、お互いダメージが少ない。

鈴が魔術で援護しようとするがぜろに阻まれる。

「俺がいなかったらこんなことはなかった。だから俺に任せてくれ。」

結果、すぐに他の「ジャッジメント裁きの者」が現れて私達は裁判所へ連行された

…。

「え、では今からヒラブル役所破壊事件の裁判を始める。」

裁判長みたいな人が開始の宣言をする。

始まるやいなや私達と反対側に座っている人が立ち上がった。

「被告人の三名は実習ということを利用してヒラブル役所に侵入して破壊したという行為をしました。なので私は有罪を主張します！」

「異議あり！！」

ツヴァイが叫んだ。

「それは偽りである。確かにヒラブル役所を破壊したのは事実だが、それは私が彼らを騙して役所の一室に閉じこめてしまったことが原因である。よって私は彼らは無罪だと主張します！」

「しかし役所を破壊したのは事実なら罪を償わなければならない。いくらあなたがその原因を作ったとしても破壊したのは彼らだ。彼らは有罪だ！」

「……」

言い返す言葉が無いようだ。

ツヴァイは何か考えているようだ。

そして決心してこう言った。

「役所は私の父が管理しておりちょうど立て直しをしようとしていました。なので破壊されたことにヒラブルの人間はなんとも言いません。さらにあれだけの魔術の威力で誰も怪我人がいないのはこの飛鳥が魔術を発動させたときに役所にいる仲間以外の人間をすべて

「転移魔術で移動させていたのです。」

私達はツヴァイの努力のおかげか無罪となった。
ツヴァイにお礼を言おうとすると

「俺は弁護人として人を弁護しただけだ。」

と言われた。

しかし何故ツヴァイは私達を弁護したのだろうか。

ここはある場所の小さな部屋である。

そこに少女が一人座っている。

年齢は飛鳥達と同じ位である。

少女は誰かを待っているようだ。

するとどこからか声が聞こえてきた。

「私はあの判決には納得しない。貴様はどう思う？」

「私はただ依頼された人間を殺すだけ…。誰がどうなるうと構わな
い…。」

声の主はニヤリと笑い、続けた。

「貴様も『ジャッジメント裁きの者』の人間だろ？同じ『ジャッジメント裁きの者』しかもトップ

を殺したというケースがあったようだな。」

「殺す『相手』^{ターゲット}が誰だろうと関係ない。どんな強者でも私はどんな手を使つても殺す。」

「頼もしい。今回の『標的』^{ターゲット}は三名。飛鳥、鈴、Oというヤツらだ。」

そう言うつと少女の前に三人の絵が現れる。

「さっきの裁判で無罪になった人達…。」

「そうだ。ヤツらを始末しろ。今回の任務はそれだ。」

少女は何も言わなかった。

迷っていたのかもしれない。

しかし誰にもそんなことはわからない。

わかるのは彼女だけである。

「…了解した。」

「期待しているぞ、符養。」

声が聞こえなくなる。

符養と呼ばれた少女はまだ三人の絵を眺めていた。

小さな部屋にただ一人符養は立っていた。

「私はなぜ人を殺さなければいけないの…?」

符養は今心の内に押さええていた不安をつぶやいた。

「私は…あのときからどうしてこうなってしまったの?」

最後に符養はそうつぶやき、そして部屋から消えた。

逮捕！？（後書き）

今回で第一部は終了です。

しかし話はまだまだ序章ですかね？

自分も投稿を怠らないように頑張ります！

今回は「ジャッジメント裁きの者」について説明しておきます

ジャッジメント
裁きの者

政府に仕えて町の悪を取り締まる機関。

主に警察のような仕事や裁判をする。

しかし符養のように上から暗殺を依頼される者も存在する。

一ヶ月後の私（前書き）

飛鳥つちが大変な変化をしています
ご注意くださいな

b y 飛鳥つちの親友

一ヶ月後の私

あの実習から一ヶ月後。

私は魔術科にも慣れてきて、鈴から口調の改善をしつこく言われて変えてみたが変わったのは私の口調だけではなく性格も少し変わってしまった気がする。

「鈴、おはよっ!」

朝、私は鈴に挨拶する。

この一ヶ月何も事件がなかった。

「おゝ、飛鳥つちおは〜。」

鈴が返してくれる。

私は鈴の隣の席に座っていつものような会話を始める。

「飛鳥つち知ってる? 昨日久しぶりにウラルからの物が見つかったんだ〜。」

「え!?! そんなニュースやってた?」

ウラルというのはこの世界に平行する世界でその世界に行った人は誰もいない。

しかし時々ウラルの物がクロスワールドにくることがある。

昨日のニュースを思い返すがそんなニュースはやっていないことに気がつく。

「ま…さか…。」

「そのまさかだよ飛鳥つち」

鈴がニヤツと笑う。

「昨日見つけたんだ。だから今日うちになよ。」

「うーん、興味あるけど見るだけ？」

「違うよ。使うの。」

私は鈴の発言に驚いた。

ウラルの物を使った人はいない。

なぜなら使い方がわからないからだ。

「え、使っちゃって…。使えるの？」

「正確には使い方を考えようと言った方が良かった？」

その言葉で私はホツとする。

「もう、まぎらわしいな。」

「ごめんごめん。……あ、もうすぐ授業だ。飛鳥っち、また授業の後だね。」

私は自分の席に戻った。

授業の後、鈴は私を連れて自分の家に向かった。

鈴の家はまだ一度も行ったことなかった。

理由は簡単で鈴が行かせなかったからである。

しかしどうして今になって家に入れてくれるのだろう。

「ここだよ。……ごめんね、家が汚くて。」

私は鈴の家の中を見て驚いた。

汚いほどではない。

完全にゴミの山だった。

だがよく見るとゴミではなく何かの資料のようだ。

その証拠になにやら文字が書いてある。

「それまだ使うから捨てないでね。」

鈴が奥の部屋から叫ぶ。

「これ何の資料？」

「ああ、これら全部私のオリジナル魔術や複合魔術の研究資料。私こうやって魔術の研究しているんだ。」

知らなかった。

やっぱり複合魔術やオリジナル魔術の発動はここまで研究しなければいけないようで、すぐに出せた私かなぜか恥ずかしい。

「ごめんね。私が簡単に魔術だせて。」

「なんで飛鳥つちが謝るのさ。…あ、本題に戻らなきゃ。」

私も魔術の研究資料ですっかり忘れていた。

「ほい、これなんだけど。」

鈴が取り出したのは箱のようなものでそこに札が刺さっている。札には赤い帽子をかぶったおじさんが描かれている。

「…これの使い方を考えるの？」

「うん、そだよ。」

たしかウラルの機械はすべて雷のエネルギーで動いていると聞く。
つまりこれに雷の魔法をあてれば動くのかな？

「『天にある雷、裁きを』…』」

「あああ飛鳥つち！なんで呪文唱えてるの！？」

鈴が止めにくる。

私は何か変なことをしただろうか？

「え？だってウラルの機械は雷のエネルギーで動いているって聞いたことあったから試してみようかなと。」

「あ、そうなの。じゃあこれに雷の魔術を撃てば動くかもしれないということだね。」

「うん、どうせなら最大の魔術を二人で撃てば活発に動くかもしれないよ。」

私の提案で二人で雷魔術の高級魔術を撃つことになった。

「『雷よ、我らの敵に裁きの雷で破滅に陥り、破滅の雷で敵を裁け』
ジャツジメントボルテック！！！！」

巨大な雲が私達の目の前に現れる。

そして雷が機械に降り注ぐ。

しかし機械の様子がおかしい。

起動してもいいのに、全く起動せずなにやら電気を帯びている。

「どうしたのかな？…いてっ！！」

鈴が機械に触れるが鈴はすぐに手を引っ込める。

「いつて〜。ホントどうしたんだろ。」

「魔術が強かったのかな？…つて、ちよつと！これ危ないつて！」

私は機械が異常な状態になっていることに気がついた。

そして機械が爆発した。

私達はどうにか避難していたため怪我も何もなかった。

しかし鈴が大切にしていた研究書が燃えていく。

このままでは家全体が燃えてしまう。

「飛鳥つち。ちよつと水系魔術で消火を手伝ってくれない？今度は弱い魔術を使ってさ。」

「わかった。」

二人で別の場所で燃えている火を消しにはいる。

「『飲まれる！ アクア！』」

魔法陣から水が噴き出す。

水は火を消していく。

下級魔術の多くはコツをつかめば長時間発動させることができる。なので連続で術を発動するより魔力の消費を抑えることができる。

火はすぐに消えた。

しかし鈴は少し悲しそうな顔をしている。

「鈴、ごめんね。私があんなこと言わなければ鈴が大切にしていた研究書が燃えなかったのに……。」

「そんなことまったく気にしてないよ。」
「うえ？」

驚きすぎてマヌケな声が出てしまう。

「だってさつき悲しそうな顔をしていたからってつきり……。」「
「ああ、さつき『今日のご飯どうしようかな』って思ってた……。」「
ここにあったのは研究済みのだからいい……。って飛鳥っち？なんでそんな怖い顔を？」

「うるさい！私の謝罪の言葉を返せー！」

私は鈴を二時間近く説教した。

そして次の日、鈴は昨日何もなかったかのように私に話しかけてきた。

「飛鳥っちおはよう！」

「あのね、昨日のこと何も思っていないの？」

「過去のことには気にしない」「

この人は過去のことでもウジウジしたくないからこんなことを言っているだけで本当は心の底から反省している。

……と思いたい。

「飛鳥つちさ、私だけには普通に喋るよね。」

昼休みに鈴が話しかけてくる。

「……鈴が敬語やめてって言ったんだよね？」

「言ったけど私だけじゃなくて他の友達にも敬語じゃなくて普通に喋ればいいじゃん。〇にもあの実習以来敬語でしょ？」

ぜろと会話している時は鈴はいないはずなのにどうしてこういう情報が入ってくるのだろう。

私はこの人に監視されているのではないのだろうかという感情が生まれた。

「あなた私を監視しているのですか？」

「監視じゃないよ。ほら、親が子供の成長を見守るようなものだよ。」

「私、あなたの子じゃないんだけど……。」

鈴は戸惑っている。

私は怒っている。

私は鈴のストーカー行為をどうにかしなければいけないと思った。

「鈴、あなたは私の……私を監視するのをやめてほしいのだけど。これ以上やるといくら私の大切な親友でも私の最大級の魔術と剣技でお仕置きをしなければいけないよ？」

「わかったから、剣をおろそ。」

頭を冷やした私とストーカー行為を反省した鈴は話の本題に戻る。

なぜ私が鈴以外の人には敬語で話すのかということである。

「で、なんでなの？」

鈴が聞いてくる。

「え、えっと…まだ鈴以外の人には話しかけにくいからかな？鈴とは冗談を言い合える…相棒的存在だと思えるからだと思うよ。」

「飛鳥つち…私のこと、そんなにも大切に…。」

鈴が泣き始める。

嬉し泣きだろうか、私はそっとしてあげると授業の鐘がなる。

鈴は授業中も泣いていた。

放課後、鈴は私に昼のことについて話しかけてくる。

「今日のごめんね。急に泣きだしてさ。私一度泣きだしたら止まりにくいからさ。」

「うん。私も言って良かったと思ってる。」

「けどさ、」

鈴は声を真剣にして話をきりだす。

「他の人にも敬語で喋らないように心がけようね。」

やっぱり諦めていないようだった。

帰りの道中、私は誰かの気配を感じながら鈴と話して帰っていた。

「飛鳥つちく、なんかにおわない？」

鈴が話しかけてくる。

何もにおわない。

ということは鈴なりの「誰かの気配がする」ということなのだろう。

「うん、におうね。気をつけたほうがいいかもね。」

「右からする？」

「そうだね。右だね。」

鈴や私が言ったように右から誰かの気配：殺気がする。

もしこの殺気の正体が殺し屋だとしたら殺し屋失格だろう。

「あれ？においが小さくなった？」

鈴が「殺気が消えた」と言う。

私にも殺気が感じられない。

その瞬間、鈴が倒れこんだ。

私は周りを見渡すがどこにも人はいない。

人の気配がしてその方向…つまり後ろを見ると一人の少女が立っていた。

一ヶ月後の私（後書き）

飛鳥の変わりようがすごくて驚きました。

しかしこれは鈴だけなので安心してください。

ウラル

クロスワールドに平行する世界。つまり私達が住む世界のことである。

時々ウラルの物体がクロスワールドに流れることがあるが逆は無い。さらに言つとウラルの人がクロスワールドにくることは無いし逆も無い。

忍者符養

「この人は死んではない…。」

少女は呟く。

耳を傾けないとうまく聞き取れない。

「あなた誰？」

「今ここで…死ぬ人間に名乗る名は無い…。」

少女が襲ってきた。

手には短剣…忍者刀がある。

私は身を守ろうとしたが相手の動きが素速くて刀の弾道をそらすくらいしかできずに左肩に刺さる。

「うっ……っ！」

痛くて声が出ない。

少女は容赦なく次の攻撃体勢にはいる。

「『^{マスター}契約者…飛鳥が命ずる、我らを守れえ！！
いでよ、サン、ルナ！』」

「召喚術…。」

少女は召喚が完了する前に手裏剣を投げってくる。

私のはかるうじてそれをよけて召喚された二人の精霊に顔を向ける。

精霊達は状況を大方理解し私と気絶している鈴を安全なところに運んでそこで話を聞くことにした。

運ばれたところはどこかの倉庫のようだった。

「今回の…敵は、……つ、強いよ。あの動きは…殺し屋アサシンの中でも…
トップ…トップクラスの實力だと思うよ。」

「飛鳥さん、大丈夫ですか？今私の回復魔法をかけますから。」

「飛鳥、お前がそんな状態なんて情けねえな。お前の精霊として恥ずかしいぜ。」

ルナが私をバカにしてくるがこれでも彼は私を心配してくれている。

サンが私に回復魔法をかけてくれたおかげで痛みは無くなった。

「あなた達を喚んだのは久しぶりに私の本気を解除リミットするため。」

ルナとサンは驚いて言葉が出てこないようだ。

「本気を出すだけじゃダメなのか？」

「それじゃダメ。さっきも動きが追いつかなかった。速くてどうしようもないよ…。」

私は弱音を吐く。

白と黒が心配そうに私を見つめる。

そして二人が決心したように同時にしゃべりだす。

「「わかった。」」

二人が同時にしゃべったことに気がつき、サンが先に言う。

「飛鳥さんがそう言うなら私は手を貸します。」

「時間がねえし、飛鳥が死ねば弄り相手がいなくなるからな。」

黒も承諾してくれる。

私は二人に手を伸ばして叫ぶ。

「『マスター契約者飛鳥が命ずる、我に力を貸し我に秘められた能力を引き出せ！』」

サンとルナが私の周りを飛び始める。

床に魔法陣が浮かび上がり私がその中心にいる。

まずサンが私の中に入ってくるのを感じる。

サンが入り終わると私に聖なる力のような力が感じられる。

次にルナが私の中に入ってくるのを感じる。

ルナが入り終わると私に暗黒の力のような力が感じられる。

二人が私の中に入り終わると私は強烈な痛みに襲われる。

次に私とサンとルナが融合していく。

もう私は体を動かすことができない。

この融合の光で場所を気づかれ殺し屋アサシンの少女が現れる。

到着した途端少女は融合中の私達に手裏剣を投げってくる。

しかし魔法陣の結界によりそれは弾かれる。

私の意識がサンとルナシンクロと同調する。

魔法陣が無くなり融合が完成する。

「…精霊との融合…あなたがそれを使えるというデータがなかったため驚く…」

「これは俺が昔試しに家で使った以来使ったことがないんです。」

「どの精霊と融合したかは知らないがそれだけで私に勝てるとは思えない。」

少女は鈴に刃を向ける。

彼女も任務があるのだらう、目が本気だ…。

「…『ヘルフレイム』」

漆黒の炎が少女を包む。

少女はすぐに炎から逃げて鈴から離れるが

「『ヘヴンズライトニング』」

光の雷が少女に命中する。

少女は不意に上級魔術を食らったはずなのに顔色一つ変えないで立っている。

しかし息が切れている。

「…なぜ？魔術は…詠唱がないと発動できないはずだけど…？」

「俺は精霊サンと精霊ルナと融合しています。精霊と融合しているなら詠唱破棄は当たり前だと思っのですが？」

「…理解した…。」

少女は無数の手裏剣やクナイを私に投げってくる。

「『サークルシールド結果』」

結果を発動させて多くの手裏剣等を弾くが全部は防げずクナイが一本結果を壊して飛んでくる。

「…っ！『ガード！』」

ギリギリ魔術が間に合って防ぐことができた。

しかし防いで魔術を解いた時には少女が私の目の前に忍者刀を構えて突進していた。

「さっきみたいに行くと思っているのか？」

私は剣で忍者刀を弾くが、少女は隠し刀をすぐに出して私の腹を刺す。

「これで…」

「……………」

「これでテメエを殺れる。『ダークゾーン！』」
闇の穴が開き少女が吸い込まれていく。

「闇の中は怖いから目隠ししてあげる。『ブラックカーテン』」

黒い布のようなものが彼女を包む。

彼女はその布を取り払おうとするが離れない。
布が消えたが彼女は今日と耳が聞こえない。

「……………」

無言でいたが彼女の目から涙が出ていた。

「私はどうして人を殺さなければいけないの？」

彼女の心の声が聞こえる。

ルナの能力で人の心の奥の声を聞くことができる。

「なぜ私が人に殺しを依頼されるの？」

「私は殺しなんてしたくない！」

「どうして私がこんなことをやらないといけないの！-！」

彼女の心の声が聞こえる。

彼女はもうダークゾーンに沈んでいた。

「……『融合解除』」

融合を解除する。

本当は戦いたくない彼女と戦うのは嫌だ。

「『マジックアウト
解除』……」

闇の穴が消え、そこに少女が現れる、目も耳も聞こえるようになってたようだ。

「……なぜ助けたの？あのままにしておけば私を倒せたはずなのに……。」

「本当は戦いたくない人と戦いたくない。私はできるなら話し合いでつきたいから。」

「……！」

自分の心の内を知られて驚いている。

私はルナとサンを元の場所に帰り彼女の隣に行つて話し出す。

「私もあなたなら戦いたくないと思う。けどそれをやらないと始末スエー屋バに始末されるかもしれない。だから戦うんだよね？」

彼女は小さく頷く。

予想が当たってほっとする。

もし違っていたらどうしようと不安だった。

「私は親を小さい頃に亡くしている……。そして裁きの者ジャッジメントに拾われて……殺し屋アサシンとして育てられた。その時に感情は無くした。」

「けど今あなたは泣いている！感情はあなたにもまだあるの！」

大きな声で鈴が起きる。

鈴にもここまでの話をした。

「それはね……。」「

鈴は黙ってしまふ。

「私は今になってどうして人を殺すのかわからなくなってきた。」「
もういいよ……。これ以上話さなくてもいいよ。」「

これ以上は彼女もつらいだろうと思った。

「けど……。」「

少女が呟く。

「けど私はあなた達やもう一人の少年を殺さなければ……。そうしない……。」「

「そんなやつら……。私が倒す！……。あなたをそいつらから守る！だからもうそんなことしないで……。」「

少女と鈴は驚く。

少女は少し考えたがサンヤルナと同じで決心する。

「わかった……。あなたと約束する……。」「

「そういえばさ、飛鳥っちこの子の名前知ってる？」「

「あ、忘れてた。」「

戦闘に集中していたし一度教えないと言われたから聞くことを忘れていた。

「……符養。」

符養は自分の名前を呟く。

私達は自分達の名前も言ったほうがいいのか相談した後と言つていう答えを出した。

「私は飛鳥。この人が鈴ね。」

「知ってる……。私の標的ターゲットだったのだから……。」

あ、知ってたの……。

しかしなぜだかほっとする。

これは私もわからない。

「これから私達は友達だよ、符養。」

「……はい、わかりました。」

「む、1カ月前の飛鳥つちと同じで符養も固いな。」

鈴が文句を言っているが私には関係ない。

だが一つ言つたらこの人はなぜこんなにも人が敬語を使うのを嫌うのだろうか？

「別に悪いことではないから……。」

「固い！固いんだよフーは！」

なんか変なあだ名を付けはじめている！

「鈴、しゃべり方を変えるのはもう少ししてからでもいいんじゃない……」

符養が私をジッと見てくる。

「ふ、符養、…なに？」

「フーちゃん…。」

ニツクネームが気に入り私にも呼んでほしいということだった。符養が目をキラキラして言うてくれるのを待っている。

「と・に・か・く！」

符養が寂しそうにしていた。

今度こっそりさりげなく言ってあげよう。

「鈴は何で人が敬語を使うのを嫌うの？」

「だって…敬語って堅苦しいイメージあるし、敬語で話されると体中がかゆくなってくるから。」

理解した、この人は自分勝手だ。

私も前と同じしゃべり方でいいと思えてきた。

「鈴さん、そんな理由で私のしゃべり方を変えたなら元に戻しますよ。」

「飛鳥つちとの距離が離れた気がするよ!？」

「私は本気だからね。今まで敬語のしゃべり方だったから鈴と話す時も敬語でいけるから。」

さっきまで重かった空気がもうなくなっている。

鈴はやっぱりそういう空気が嫌いなのだろうか？

「ん？」

何やら変な匂いがするのに気がついた。

見ると「ヘルフレイム」の炎と「ヘヴンズライトニング」でできた炎が燃えていた。

近くに「危険」と書かれた箱があった。

「あれって火薬の箱じゃ…。」

「そう…。」

符養が顔色一つ変えずに頷く。

「逃げなきゃ！『ヘルフレイム』の炎は水の魔術を使っても消えない！」

「……つかまって。」

符養が手を差し出す。

私と鈴は符養の手につかまる。

遠くで「ドーン」という音が聞こえた。

「フー、力持ちだね。」

「腕…痛い。」

大丈夫ではないようだった。

「じゃあ、帰ろつか。」

「…私、帰れる家ない…。」

そういえば符養は裁きジャッジメントの者を裏切ったのだから帰れる家がないのは当然だ。

「じゃあ私の家においでよ。私も家族がないから。」

家族は私が小さいころに死んでいる。

だから私には家族がどういいうものかわからない。

「飛鳥の家、行く。」

無表情だったが符養は嬉しそうだ。

「む、飛鳥うちフリーを独占してずるいよ！私も飛鳥うちの家に行きたい！」

「鈴には帰れる家があるでしょ。あと私の家狭いし…。」

鈴がすねている。

私達はそれをスルーして家に帰った。

「飛鳥うち！なんで私を見捨てるの！？」

忍者符養（後書き）

符養編短いなと思うわたくしでございます。

符養 忍者・殺し屋^{アサシン}

元裁き^{ジャッジメント}の者の忍者。

幼い頃に両親を殺され、殺した張本人である裁き^{ジャッジメント}の者に拾われる。

本人はそのことを知らない。

若干メンタルが弱い。

実は飛鳥に…あれ？符養どうしたの？

「それはダメ…。」

な…ならなんで忍者刀をこちらに向けて…ギャー…！！！！！！

新たな武器

符養が現れた次の日、私はとある鍛冶屋に訪れていた。

「いらつし…って飛鳥の嬢ちゃんか。どうした？」

「こんにちは鉄のおじさん。今回はちよつと依頼に…。」

「どうした？うちは鍛冶以外は請け負わねえぜ。」

私は天井を見る。

鉄のおじさんも私の視線に気づき、そちらの方向を見る。

天井の上から覗き込む顔が一つ

…その顔は自分の存在を気づかれたことに気づき、素早く天井から降りた。

「この子の忍者刀と私の剣のことなんだけど…。」

「…誰だい？この嬢ちゃんは…。」

「符養…。」

符養はいつもどおりの無表情で自分の名前を呟く。

「で、この剣とこの忍者刀を直すのか？」

「うん。昨日この子と戦って剣にヒビが入っちゃって…。」

鉄のおじさんが私と符養の剣を眺めて悩んでいる。

「安物だからなあ…。」と呟いている。

決心したように鉄のおじさんは私達に話します。

「この二つの剣は安物だから壊れるんだ。もっと強い剣が欲しいと思わねえか？」

「そうなるなら私は欲しいけど…。」

「私も同意見。」

珍しく符養が「…」を付けなかった。

彼女も強くなりたいのだろうか？

「そうか。なら新しい剣を作るために又リント鉱山に行って鉱石をいっぱい採ってきてくれ。」

「え、なんで…。」

「強くしたいんだろ？なら行くしか道はねえと思うんだが？」

符養はこちらを見て私に任せている。

私は行こうか迷う。

又リント鉱山は実習で行った森より遠く、モンスターも強い。

森はただの魔物の住みかだが鉱山は巢窟であるため危険度が増す。

「行ってみるよ。…そういえば行くとしたら私達剣が無いのだけけど…。」

「他で補え！…と言いたいところだが、又リント鉱山は巢窟だからな。この剣を使え。だがこれはウチの宝みたいな物だから絶対に壊すなよ。」

貰ったのはとても立派な剣だった。

符養にも同じように立派な忍者刀を渡す。

私はこの剣に触れて剣の力を感じとった。

それは凄まじいものだったため、私は思わず

「い、これください！」

と言ってしまった。

「ダメだ!!」

しかしすぐにおじさんに却下された。
そして私と符養は店をあとにする。

「飛鳥の嬢ちゃん、変わったな……。」

私と符養は誰か手伝ってくれる人を探そうということにした。

「やっぱり最適なのは鈴かな？」

「ダメ……。」

符養が拒むように言う。

「ど、どうして?」

「彼女は昨日の私との戦闘で今日は普通に生活するだけで手いっぱいの状態……。」

「そうなの……。」

「それ以前に飛鳥を彼女に取られるから嫌だ。」

「……この子は……。」

どこか符養は昨日よりテンションが少し高いように思える。

私はそれが今日は鈴がないからだと思わないでおこう。
理由は鈴と符養の中が悪くならないようにとするためだ。

「なら、ぜろは？」

「0…。私の三人目のターゲットだった人…。」

「そうそう。その人を…」

「やだ。」

「ダメ」ではなく「やだ」だった…、この子は意外とわがままなの
だろうか？

もしくは…、…考えるのはよそう…。

「じゃあ誰ならいいの？」

「誰でも…。」

「じゃあぜろね。」

「やだ。」

結局、符養のわがまままで誰も同行せずに二人だけで行くことにした。

「符養、こういつわがままを言い続けていると団体行動ができなくな
るよ?。」

「うん、わかった…。これから言わない…。」

よかった。

これが続いていると本当にこの子と鈴の関係が険悪になりそうだった
から。

「行く…。」

私達はヌリント鉾山に向かう。

しかしグラランスの外に出る門に来たとき、一人の少女が門番の人と口論していた。

「どうして行かせてくれないのですか!？」

「だから外出許可証かグラランス冒険学校の生徒手帳が無いと出すことはできないんだよ!」

「さつきからグラランスの生徒だって言っているじゃない! 忘れただけだからいいじゃない。」

「ダメだ。」

この会話を聞いているとどうやら彼女はグラランスの生徒だが、生徒手帳を家に忘れていて取りに行くのは面倒だということなのだろうか…。

「飛鳥、あの人助けてあげよう。」

「うん、いいけど…。」

ということと私と符養は門で困っている少女を助けることにする。

「すみません、彼女どうしたのですか?」

「この子は許可証を持っていないのです。」

「なら私のこの同行許可証を使わせてください。これで彼女は外に行けるといことです。」

「あ、ああ。わかったが、その子はどうするんだ?」

門番は符養を指差す。

「もちろんこの子もこの許可証で通してもらいますよ。」

「しかし、普通同行許可証で同行できる人数は一人までのはずだが……。」

「普通は……です。」

私は自分の持つている同行許可証をちゃんと見せる。

それを見せられた門番の人は驚いた表情をする。

「こ……これは！」

「そうです。その許可証は『ゴールデン許可証』です。これなら何人でも同行させることができます。」

「……私にはこれが金色に光っているようにはみえない……。」

「……………」

符養によってこのおふざげが終了される。

もちろんゴールデン許可証など無い。

結局符養は私の持っていたスピアの許可証を使って門をくぐることに成功した。

少女が私に話しかけてくる。

「ありがとう。あなたもグラランスの生徒だったのね？」

「はい、私は魔法科四年の飛鳥。そしてこの子が……。」

「あなたが噂のアスカ！？噂は聞いてるよ。剣士スキルを全部マスターしたんだって？」

突然少女が私に詰め寄ってきた。

「そ、そうですけど……。」

少女から微かに鈴みたいな匂いがしてくる。

「あなたは誰なんですか？」

「あ、ごめんごめん。私は召喚科四年の琴葉。…この子は？」

琴葉は符養の方に顔を向ける。

「……忍者、符養…。」

「忍者…ということはあなたはグラنزの生徒ではないの？」

「そう…。」

符養は自分が殺し屋だアサシンということはずいと思っただよう。

「あなたはどこへ行くつもりなんですか？」

「私は又リント鉱山に行くつもりなんだ。あそこに今精霊がいるらしいの。」

「ちょうどこちら又リント鉱山に行くつもりだったんです。一緒に行きませんか？」

「いいよ。」

符養が私と一緒に「一緒に行こう」と聞いたとき少し不機嫌になった。

しかも琴葉がOKしたときにさらに不機嫌になった。

「……。」

喋らなくなり、樹の上に昇ってしまった。

「さすが忍者だね。音一つなして樹に昇れるんだね。」

「あの子はちょっと機嫌が悪いみたいで… ……符養ー！降りてき

てよ!」

符養は上から降りてきてくれない。

この子も鈴みたいに怒ってあげたほうがいいのかな?

けどあの子メンタルが弱いから…、扱いが難しいから…。

「……………フリーちゃん。」

「何?」

符養が降りてきた。

昨日呼んでほしいと言っていたが、その次の日に使ってしまうなんて…………。

「符養つかまえた!」

私が符養を捕まえる。

符養が恨みの目で私を睨む。

「飛鳥…私を騙した…私……………」

「そんなこと言つと私フリーを嫌いになるよ?」

「ごめんなさい……………」

案外符養を手懐けるのも簡単みたいだ。

「あ、飛鳥に抱かれてる……………」

「ちよつ…、誤解をまねくような言い方やめてよ。」

「…二人とも、イチヤイチヤするなら私のいないところでやって行くわよ。」

琴葉のおかげでなんとかこの場は符養から逃れることができるみた

いだ。

「ねえねえ、忍者ってどういう職業なの!？」

歩きはじめてすぐに琴葉が符養に質問する。

符養は私の横にいて琴葉から距離をおいている。

「私は依頼されたことをするだけ…。それが殺しても…。」

琴葉の顔から笑顔が消え失せる。

私は符養に小声で囁く。

「符養、それは過去の話でしょ?もう殺しはしないって約束したよね?」

「…ごめん。」

「琴葉さん、この子は殺しはしないって約束したから殺しはしてませんよ。」

私は誤魔化すためだとはいえ、自分が嫌いである嘘を言ってしまうなんて…。

「なーんだ。それを聞いて安心したよ。…符養ちゃんは依頼されたことをするなら、今飛鳥といることは依頼されたことなの?」

「いえ、この子がさっき言ったのは全て過去のことなんです。今は符養と私は友達ですから。」

そして私は符養を守る。

殺し屋をやめて始末屋アサシンに命を狙われる符養を…。

この子には私しかないのだから。

「……飛鳥。」

符養には私の思っていることが伝わったようだった。そして符養は私だけに聞こえるようにこう囁いた。

「飛鳥は私を守らなくていいよ…。飛鳥は私が守るから…」

符養の言葉が私の体を貫いた。

恋…とかではない。

私は知らない間に符養にそこまで無理をさせていたのだ。

彼女は私のためになんでもしようとする。

そのせいで符養は私が守るといふ誓いを符養が私を守るといふ誓いにしようとしている。

正直自分が何を言っているのかよくわからなかった。

「……………飛鳥？」

符養の言葉で正気を取り戻す。

「なんでもない、なんでもない。さ、行く。」

「そう…。」

符養が怪しく私を見つめた。

新たな武器（後書き）

最後の方、自分でも何を書いているのかわからなくなっていました。

さて今回はこの世界の精霊について説明をさせていただきます。

精霊

魔法を使う者として人間に魔術を教えた。それぞれ地・火・水・風・氷・雷・闇・光を司る精霊が一体ずついてそれらの精霊の生息地が決まっている。その生息地にある街は生息地に住む精霊によって名前が異なる。

例えば、精霊グランが生息する地域にある街はグランズと呼ばれているように。

ちなみに友達からの要望で恋愛ネタをやってみたのですが、あれでOKです？

魔法石の探掘（前書き）

ユニーク12000人突破ありがとうございます！

今後も頑張っていくので応援よろしくお願いします。

魔法石の探掘

私達は又リント鉱山についた。

今私達は入り口に立っているわけだが、探掘エリアはここからすぐにあるモンスターエリアを通りぬけなければならない。

私は途中からなぜか符養が私を監視し続けているような視線を感じるので迂闊に自由行動できない。

「符養、さつきからなんでそんなに怖い顔をしているの？」

「飛鳥、さつき嘘ついたから…。」

「嘘？」

全く心当たりがない。

彼女はどのことを言っているのだろうか？

「…私に何か怒ってるの？何かあるなら言ってほしい…。」

「符養、ごめん。何のことを言っているのかわからないのだけど…。」

「

符養は私に悲しそうな目をしてそのまま私より先に進んでいった。なぜか私と符養の仲が悪くなってしまったようだった。

「フー。」

「……」

彼女お気に入りと呼ばれ方で呼ばれても反応なし。

「自分の答えは自分で探せ」…、というやつなのかな…？

「何があつたか知らないけど彼女の気持ちも考えてあげてね。」

琴葉が私に近づいてきて囁いた。

しかしすぐにそれに気がついた符養が私を琴葉から引き離す。

「へえ〜。符養ちゃん、飛鳥さんを避けているんじゃないの？」

符養はハツとして私からすぐに離れる。

再び符養は私に顔を向ける。

悲しそうな顔をしている。

「飛鳥…、なんで怒っているの…？…あの時怒ったような顔をしていた…。」

符養の言っていることがいつのことなのかわからない。

私は混乱してきた。

わからないからということでも符養に対して怒りが増し、本当に怒ってしまいそうに怖くなってきた。

「符養…何かわからない！私がいつ怒っていたのか！」

「……………」

符養は今の私を怖がっている。

琴葉も私を怖がっているようにみえたが、琴葉が口を開く。

「飛鳥…。あなたもう少し冷静になって。今も怒っているから…」

琴葉に言われて初めて自分が怒っているのに気がつく。

もしかするとその時も同じことになっていたのかもしれない。

「……ごめん。符養、教えて。」

「……『私が飛鳥を守る』と言った時に怒ってた…。私が守ってはいけない？」

「あの時か…」と理解する。

あの時は確かに符養への怒りがなかったといえは嘘になる。しかし顔に出るほど怒っていたとは思っていなかった。

「あの時は驚いたから。…符養。」

「何？」

「符養は追われている身なんだから『私が守る』なんて言わないの。」

符養が寂しそうな顔をした。

「だけど改めて言うけど符養は私が守る。あなたが守るんじゃないんで私が守る。だから私は約束を破った符養に怒ったの。」

「けど……私は飛鳥を守ってはいけないの…？」

符養は私に問いかける。

しかし私はそれには答えない。

私はそれを決めるのは符養だと思ったからだ。

「仲直りが済んだら早く入りましょ。」

中は灯りがないと暗くて何も見えなかった。

私はすぐに松明を探してそれに火の魔術を使って灯りをつけた。

「これでいいですかね？」
「うん、いいと思うよ。」
「フー、これ持って。」

私は符養に松明を渡そうとするが、符養は私を見たままぼーっとしていた。

「……ちょっとフー？聞いている？」

「あ、うん……。聞いている。」

「この松明持って。」

「……わかった。」

なんだか符養が嬉しそうだった。

私何か言ったかな？

琴葉が横で微笑んでいた。

私はよくわからなかったが、先に進むことを優先する。

今のところ何も出てきていないが、ここはモンスターエリアである、どこでモンスターが出てきてもおかしくない。

むしろ出てこないことが珍しい。

「……飛鳥。」

符養が呼び止める。

「何か聞こえる……。」

確かにモンスターの鳴き声みたいなものが聞こえる。

私達は暗闇の向こうに居ると思われるモンスターを待つ。

「ヒュッ」

何か飛び出る音がした。
モンスターの形からみてどうやら獣型のモンスターみいだ。
それと同時に符養が走り出す。

「戒めの光よ、闇にのまれて破滅への敵に降りそそぎ、浄化せよ
イービルシャイン
魔界の太陽！！」

闇の光が敵に命中…しなかった。
符養が足止めしているが私の魔術に気がついて、即座によける。

「『契約者琴葉が呼び出す。敵を倒す！ いでよ、デーモン！』」

琴葉が描いた魔法陣から魔物^{モンスター}デーモンが出現する。

デーモンは手から雷を出してモンスターに攻撃するが、やはりよけられる。

それを理解したデーモンはモンスターに接近し攻撃をはじめる。

「どう？これが私の最強召喚獣の五体の一体、魔界の大佐 デーモン」

「す…すごいです。」

「あ、デーモンは暴れるから符養ちゃんを戻さないと…。」

デーモンの戦い方に見とれて、琴葉の言葉を聞き逃してしまった。
デーモンはモンスターと戦闘中だった符養にも攻撃する。
しかし符養はそれをよけて私達の元に帰還する。

「…私に恨みでも？」

「ごめんね。早めに気づいていればこんなことには…。」

符養は怒ってはいないが、琴葉を警戒するようになった。しかし符養は無意識の内に警戒しているため、自覚していない、あの子は鈍いから…。

デーモンがモンスターにとどめをさした。

私はデーモンが暴れてよく崩れない鉾山の洞窟の方を感心していた、いや、実際に崩れたら私達が危ないけど…。

「ここには何度も来ているんだ。」

デーモンを元の空間に帰還させながら琴葉が続ける。

「契約獣を増やすためや精霊を探すに来ているんだけど、このモンスター達は魔術をよければみたい。しかも強いから私も一人だと三体以上を相手する場合は負け確定と言ってもいい。」

「あの強いデーモンでもですか？」

「ええ。デーモンだけじゃなくて、私の最強召喚獣でさえ四体は厳しいし、六体なんて…。」

「…私も基本人として戦闘を行わないからモンスターは難しい…。」

琴葉と符養が落ち込む。

私もモンスター達を怖がっていた身だから今でもモンスターと接近戦で戦うことはあまりしたくない。

ルナとサンを呼んでおいた方がいいのかもしれない。

「飛鳥は接近戦で戦えるよね？」

「は、はい。」

考え事をしている時に不意に名前を呼ばれて焦ってしまっ。

…やはりルナやサンは出さないでおこう。

「符養と飛鳥で私が契約獣を召喚するまでの間だけモンスターを引きつけておいてほしいの。…あなたの噂からあなたが魔術を優先して使いたいののはわかる。でも、そういうことを克服することが大事だと私は思うの。」

「わかっています。……私にはフーがいます。フーが私を守ると信じています。」

「…私も飛鳥が私を守ると信じる…。」

二人の信頼度は共に同調^{シンクロ}していた。

モンスターエリアを歩いていると、符養が話しかけてきた。

「…飛鳥、もし戦いで魔術を使いたいなら私みたいに剣に魔術をこめて使ったほうが良いと思う…。」

「それ、難しそうだね。……ってフー!? あなた魔術使えるの?」

「……(コクリ)簡単なものなら…。けどそれだけで十分使える。強い魔術を使える飛鳥ならもっと有効になると思う…。」

という会話をした。

もしモンスターが出たら試してみよう。

……しかし、採掘エリアに到達するまでにモンスターの出現が皆無だった。

それならそれで幸運だと思いたいが、琴葉はそう思っていないようだった。

「おかしい……。いつもならここまで来るのに百体ぐらいと戦わずなのに……。」

「百……私達今回は一体としか戦っていないですよね？」

「ええ、だからおかしいの。……やっぱりここに精霊が来ているの？」

「精霊ですか……。」

「……考えていても仕方ないからとりあえず鉱石の採掘でもしようか。」

琴葉は採掘をしようとしていたときも今回の異常を考えていた。

精霊か……、私もルナやサン以外の精霊に会ったことないな……。

それは置いておくことにして私や符養の真の目的である採掘が始まる。

……だが誰も鉱石について知識が無いため、一応鉱石っぽい石を（特に光っている石）集めることにした。

「どう？なんかよさそうなのあった？」

琴葉が質問してくる。

しかし私はよさそうな鉱石がなかったので何も言わず作業をする。

「こんなのは……？」

符養が琴葉に鉱石を見せる。

それはとても大きかった。

しかも一つだけではなく、それを四・五個持っていた。

「フー、すごい……。これどこで見つけたの？」

「……向こう。これくらいでよかった？」

「これだけで十分だよ！さあて、後はこれを袋に入れて精霊を見つ
けるだけか。」

琴葉が驚いた表情で私を見る。

「え、別にいいよ。私だけで精霊と契約するから。二人にそんな手
間はかけさせたくないし……。」

「いえ、私達は精霊を見てみたいだけです。手伝うのはいいです。
」

本当のことを言うと精霊を見ることの方がいいである。

精霊はサンヤルナを飽きるほど見ている。

どうせ、他の精霊も同じような者たちなのだろう。

「……ありがとう。」

琴葉の感謝の言葉で私と符養はやる気がでてきた。

「そういえばここにいると思われる精霊って誰なんですか？」

「ん〜と、……ここはたしかグランズの中だったはずだから精霊グラ
ンじゃないかな？」

精霊グラン、私達がヒラブルの役所で閉じ込められた時の魔法の元
々の持ち主……。

別に会ったこともないし、どういう者が知らないし、あれはツヴァ
イが悪かったのだが、私はなぜかグランに怒りを感じていた。

「……飛鳥、また怒っている。………リラックスして……。」

符養に言われて力を抜く。
そうすると、怒りが収まってきた。

「もう大丈夫だよ。ありがとね、フー。……!?!」

ここで初めて自分が符養のことを「フー」と呼んでいたことに気がついた。

あの時符養が嬉しそうにしていたのは、私が「フー」と呼んだからだともわかる。

言わないほうがいいのか…、しかし言わなくなると符養が悲しむ。

私は仕方なく呼び方をそのままにする決意をする。

「飛鳥に感謝されて私も嬉しい……。」「

「そう、それはよかった。私も…フーが嬉しそうでよかったよ。」「

琴葉が気まずそうな顔をしている。

これ以上モタモタしているといけないようなので

「さ、精霊と戦いに行こ。早く行かないと精霊が逃げるかもしれないからさ。」「

切り上げた。

琴葉の話によると、グランは鉱山の最深部にいることが一番可能性があるがあるらしい。

最深部は採掘エリアをより奥あるのだが、まだ採掘エリアというところモンスターで魔物が出現してきた。

「やっぱりグランはこの奥だね。」

「……琴葉、しゃべっている暇はない。」

私はやっとモンスターが出てきたと内心喜んでいた。

符養から聞いた戦い方を試すチャンスがきたと。

「…飛鳥、魔力を剣に流すようなイメージで、剣の中で魔術を発動するイメージをイメージできる。」

符養に言われた通りにやってみる。

相手は土属性のモンスターだから風属性の魔術を使おう。

まずは魔力を剣に流して…

「『吹き飛ばせ　　^{ブレス}吹息！！』」

剣が緑色に光る。

私はその剣でモンスターに攻撃する。

「『斬波！！』」

剣を振り、斬撃が飛ぶ。

しかし、いつもと違う。

それは斬撃が風を纏っていたことだ。

風を纏った斬撃はモンスターをなぎ払う。

「…やっぱり飛鳥は私よりこの戦い方がむいている。」

符養が囁く。

私もこの戦い方に慣れれば前より強くなると思う。

最深部。

グランが侵入者が侵攻してきていることに気がついた。

「この気配は…もしや」

魔法石の探掘（後書き）

今回、題名が題名なので探掘をするシーンをもっと長く書きたかったのですが、これが私の限界ですorz

毎回キャラや世界について説明しますが、今回は休ませてもらっていいですか？

だめ？

なら琴葉について説明を…。

琴葉 召喚科 四年

召喚科の上位。

飛鳥の大ファンでもある。

契約する召喚獣は強い者じゃないと契約しない。

なので、強いモンスター求めて遠くへ旅することもある。

精霊グラン

今私達は数え切れないモンスターの大量と戦っていた。
私にとっては新たな戦い方の練習になつていいが、他二人は連戦の
疲れとモンスターの強さで苦戦していた。

「『風よ、私の意志に従い敵をなぎはらえ
ト！』」 ウイングシヨツ

この魔術を剣に込めずに、普通に発動する。
ほとんどのモンスターは魔術をよけるが、数が多いため逃げ遅れる
者もいた。
少しでも多く倒せるなら私は構わなかった。

「飛鳥…、魔力大丈夫？」

符養が声をかけてくれる。

「うん、大丈夫だよ。私これでも魔力多いねって鈴にほめられたく
らいだから。」

「……鈴も魔力多い方なの？」
「あの人は別格で魔力がきれたことが一度もないんだって。……け
ど、エレメントエイトの発動時には魔力がきれて気絶しちゃったか
らあれが初めてきれたことに……？」

会話を続けながら戦闘をする。
符養は琴葉を守る役割を守っているためにあまり敵をなぎ払うこと
ができない。

「……エレメントエイト…？どういうやつ？」

「それはみせられないよ。私と鈴の魔力が満タンでも空になる寸前になるくらいの魔力が必要だから。」

符養が残念そうにする。

見せたいが、あの術の消費魔力と威力の問題上無理に等しい。

どうにか規模を縮小する方法があるが、私がそれに手を出さないの
でその方法も無理になる。

「『我に仇なす者、天雷により裁かれ、天へ魂を捧げよ！　へヴ
ンズライトニング！！』」

剣に新たな魔術をセットする。

「『我に逆らう者よ、地獄の業火で焼き尽くされ、魂を永遠に燃や
せ…』。　ヘルフレイム！！』」

次は普通に魔術を発動する。

黒い禍々しい炎が敵を焼き尽くす。

「『裂破斬！！』」

白い雷をまとった剣で斬りつける。

斬ったあと、白い電気が周りに放出される。

敵は先ほどの攻撃であらかたは片付いたが、私が魔力を多量に消費
したらしく、力が抜けて体が動かなくなってしまった。

「飛鳥！？」

符養が駆け寄ってきた。

「飛鳥大丈夫？」

「フー…大丈夫だよ…。ただ疲労と魔力の大量消費で動けないだけ…。」

「よかった…。…これ飲んで。」

符養がカプセルを渡してくれる。

これで疲労と魔力が回復するが、効果が出るまでに時間がかかるため、その間は符養が背負ってくれることになった。

「『主、琴葉が貴様を呼び出す。いでよ、ムシャ！』」

見慣れない鎧：鎧自体あまり見たことがないのだが、それと絶対見たこと無い剣を持っている。

「お呼びでございますか？主^{おぬし}。」

「うん。この人が回復するまで私たちの護衛をお願い。」

「御意。」

ムシャが剣を抜いて歩き出す。

私はおそらく符養も抱えているだろう質問を契約者に投げかける。

「この魔物^{モンスター}は一体なんなんですか？喋るし…。」

「この子はムシャ。サムライという職業らしくてブシだと言ってっているわ。で、あの鎧がカツチュウであの剣がカタナっていうものみたい。ワの心は忘れないらしいわ。」

説明を聞くとますますわからなくなってきた。

…とりあえずムシャは異世界^{モンスター}の人だと思っておこう。

その後も幾度かモンスターが出現するが、ムシヤによって倒される。私の体は全く動かなかった。そこまで疲労が蓄積していたのだろうか。

「…飛鳥の体まだ動かない？」

「うん。けど大丈夫だよ。少しずつ動くようになってるから。」

「……そう……。」

本当は少しずつ動くようになってはいない。しかし、符養を心配させないようにするためにこのような嘘をついた。

そんな状態で私たちは大きな部屋に来た。

ここに精霊グランがいるのだろうか？

そう思っただけを周囲を見渡していると、奥に古そうな杖を持った老人が現れた。

この老人は一目見た瞬間に人じゃないと確信した。その証拠に浮いている。

「よく来たな。飛鳥。」

私の名前を知っている！？

「……どうして私の名前を……？」

「…それは言えん。だがこれだけは言おう。…飛鳥よ、仲間を連れて早急にこの場から立ち去れ。貴様らとは戦いたくない。」

「なら、私と契約してくれない？」

琴葉が前に出る。

私はこっそり魔術を発動する準備をする。

「戦えないのなら私と契約して。ここまで来たのに手ぶらで帰るなんてごめんよ。」

「それはできぬ。貴様のような雑魚を相手にしている暇はないのである。」

琴葉が怒りにまかせてモンスターを召喚する。

「『^{マスター}契約者、琴葉が呼び出す。いでよ、デーモン！』ムシヤも行きなさい。」

「御意。」

ムシヤとデーモンが攻撃に行くが、グランが岩を飛ばすと、当たった二体のモンスターは消滅した。

「うそ……。」

「貴様のモンスターなど、我らにとっては蚊のようなものだ。」

私は準備していた魔術をグランにぶつける。

「『天に捧げよ地獄の闇、裁きの雷により、焼き尽くし、大地に聖なる水と風を吹き流せ！ ヘルジャツジメント！！』」

私の使えるだけの魔力を消費し発動した。

しかし相手も魔法を発動し、私の魔術の威力を弱める。

そして、グランは手で攻撃を受け止めた。

「これほどの魔術で儂を倒せると思うなよ。」

攻撃を受け止めたグランが私に向かって言った。

精霊には魔法のほうが有効なので、私みたいな魔術師は不利である。そして、私は急に出現した岩の壁に囲まれ岩の中に閉じ込められた。

「あの者がいると少し面倒だ。」

体が動かない。

意識ももつろうつとしてきた。

…飛鳥が岩に閉じ込められた。

私と琴葉だけでグランを倒さなければならぬという状況になった。しかし飛鳥は先ほどの魔術の使用で魔力を使い果たしたかもしれない。

「貴様等だけで儂に勝てると思うのか？」

「……勝てるとは思ってない。…私は飛鳥が逆転の方法を使うまであなたを止めるだけ。」

琴葉が「逆転の方法？」というような顔をしていたが、無視して戦闘にはいる。

飛鳥なら魔力が空でも絶対逆転の手を持っている……！

外ですごい戦闘の音だけが聞こえた。

戦闘の音が時々止む。

私が目を覚ました時には部屋の中が息苦しかった。相変わらず私の体は動かない。

なんとかこの状況でも脱出の方法を考えないといけない。と、脱出する方法を考えていると、外から声が聞こえてくる。

「僕がこんなにもてこずるとは…。人間を侮りすぎたか？……しかし、姫があのだ階まで成長しているとは……。」

…このグランの言葉から察するに、琴葉と符養がやられたということになる。

許せない！

「『^{マスター}契約者飛鳥が呼び出す！！　いでよ、サン！ルナ！』」

召喚に魔力は足りない。

だから現在魔力が空っぽの私でも召喚が可能となる。

そして、いつものように召喚された二人は私の召喚を待っていたかのような顔をしていた。

「喚ぶと思っただぜ。…お前の思っていることはわかってる。」

「精霊同士戦うのは嫌？」

「いや、俺らは今お前の召喚獣だ。^{マスター}契約者の命令は逆らうことではできない。」

「そうですね飛鳥ちゃん。相手がグランおじいさまでも私達は飛鳥ちゃんの味方です。」

サンもルナと同様の事を言う。

この二人ならそう言うってくれると思っていた。

「けど、私魔力を使い果たして動けないの。どっちなかに憑依してくれない？」

「そういえばあそこまで二人がボコボコになっただけでも素の飛鳥になっただけなのはそのせいかな……。」

それは関係ないと思うけど……。

すると、ルナとサンがジャンケンをし始める。
そして

「よし！俺が勝ったからお前が飛鳥に憑依しろよな。」
「残念。私もグランおじいさまと戦いたかったのに。」

おい、私ははずれか！！

「いいじゃねえか。お前は飛鳥と一緒に戦えるじゃねえか。」
「そ、それもそうだけど……。」

今動けたらこの二人をたたきたい。

「それで決まりね。なら早くしてくれない？時間がかかりすぎると二人が危ないと思うから。」

二人は口論中だったが、私の言葉で口論をやめて私の言葉に頷いてくれた。

「いくよ……」
契約者飛鳥が命じる、サン、我に力を貸し我に秘められた能力を引き出せ！
『』

サンが私の中に入る。

それで私は聖なる力が私の中に感じた。

サンの憑依が完了すると私は体を動かし、立ち上がることができた。これは精霊が普段空気中に存在する魔力を吸収して生きていることが関係している。

だからサンの力を得た私は魔力を自動回復できるということになる。

「さあいきましようか、ルナ。」

言葉遣いが丁寧になってしまいが…。

「この壁を二人の魔法を使って壊しましょう。」

「飛鳥…。そのしゃべり方やめてくれないか？なんか気色わりい…。」

「そうはいつでも直りません。壊しますよ。」

二人で魔法をぶつける。

「『聖なる光の槍よ、我の意志に従い敵を貫け！』 セイントラン

ス！』」

「『デモンズレイン』」

私はいつもの癖で詠唱を唱えてしまった。

ちなみに術名、詠唱は魔術の時と全く一緒だが、術式が魔法のものとなっており、魔術の時とは格段に違う威力となっている。

闇の針のようなものが一点に集中してそこに聖なる槍が突き刺さる。

壁が壊れ、外に出る。

そこには符養と琴葉が何度も吹き飛ばされ、相手に傷一つ与えることができなくても懸命にグランと戦っている姿があった。

「あ…すか？」

符養がこちらに気づくが、その直後に倒れる。

琴葉もグランにやられてしまい、壁に叩きつけられ、気絶した。

「貴様も儂と戦うのか…ルナ、サン。」

「俺らは飛鳥の召喚獣だ。契約者の命令に従うのが普通だろ？」

「私もルナと同様の意見です。あと私、実はグランおじいさまと戦いたかったですし。」

私の中のサンがグランに話しかける。

憑依状態でもこういうことができるのか…。

「なら貴様らも敵とみなそうではないか。」

「待ってください。」

私が止める。

「私達が勝った場合、私と琴葉さんと契約をしてほしいのですが。」

「よかるう。貴様らが勝った場合だな。」

ずいぶんと余裕だった。

私は早速魔法発動の準備を始める。

「『ライトバースト』」

その魔法を剣に溜める。

アイコンタクトでルナに援護を求めて一気に攻撃を仕掛ける。

「滅・破朽斬!!!」

突きの斬撃を連続で飛ばし、最後に横一閃の斬撃を飛ばす。
ライトバーストも加わっているので、まともにくらえば無事ではないだろう。

「『ストーンウォール』」

石でできた壁が突然現れ、攻撃を阻まれる。
しかし、砕けた石がグランを襲った。

「『ダークゾーン!』のまれな。」

さらにルナが魔法でグランに攻撃する。
グランが闇に引きずり込まれていった。

「やった!?!」

「こんなもので倒せたらあの二人はそこで倒されてない。」

ルナの言葉は本当だった。

グランはすぐに穴から出てきた。

「強すぎます…。」

「諦めるなよ。お前は俺とサンが守るからさ。」

「貴様らより数十倍生きておる儂をこんなことで倒せるわけがない。」

…しかし、まだ私には切り札がある。

しかしあれは魔力の消費が大きいし、それを使えば符養と琴葉に危険が及ぶ。
だから私はあれを使わずにグランを倒す！

精霊グラン（後書き）

遅くなりました、すみません。

次回でこの精霊編は終了です。
今回はグランの説明でも

グラン 精霊

グランズの精霊で属性は土。

精霊の中で最年長。

人間を好まず、常に洞窟の最深部など、人間がめったに来ることができない場所にいる。

戦いの末に

「『冷気よ、敵を凍てつかせ！　アイス！』」

氷の呪文でグランを凍てつかせようとしたが、前と同じで魔術を素手で受け止める。

やはり最上級の魔術を魔法に変換したものでなければいけないのだろうか。

…やってみるしかない。

「『浄化された汚れなき冷気よ、敵を凍てつかせ、天へ召せよ！

ライトロードフリーズ！』」

術はグランに命中し、グランが凍りついていく。

「くっ…。おのれ！」

「飛鳥、今のうちに俺とも融合しておけ。そっちのほうの勝率が上がる。」

グランが動けないうちにルナが私に話しかけてくる。

「飛鳥ちゃん、私もずっと思っていました。グランおじいさまが今動けないからお願い。」

サンも私の口を使って話しかけてきた。

私もうすうすそう思っていたが、ルナを私に憑依させる暇がなかった。

「わかりました。グランさんが動き出す前にはじめましょう。……

『契約者飛鳥が命じます。ルナ、我に力を貸して我に秘められた能力を引き出してください。』

ルナを憑依させる。

これで数的には精霊二人分の力を得ている。

そのためグランを倒すことができるはずだ。

もし一人一人がグランと同じくらいの力があればだが。

「……」

グランはルナが憑依しているときに完全に凍ってしまった。

「チャンスと置いていいの？」

「…多分な。」

私は魔法を剣にこめる。

「『クロスリング』」

剣の刃の周りに黒と白のリングが出現する。

さらにどの技で攻撃すれば確実に倒せるか考えていたときにふと思っ

た。
これ、もしかすると氷ごとグランも砕けるんじゃない？

…そんなはずはないだろう。

精霊は死なない……………多分。

「おい、早くしたほうがいいぞ。」

ルナが声をかけてくる。

「う、うん。早くしないとね。」

「…もしかして飛鳥ちゃん、切ると氷ごとグランおじいさまも砕けると思っているのですか？」

「……………」

正答すぎて言葉もでない。

「あ、正解だったの…。」

「大丈夫だ飛鳥、今グランのじいさんは今氷の中に閉じ込められて身動きが取れないだけだ。つまり氷を斬れば氷が割れて動けるようになるが、動けないから急所を突いてじいさんを倒してやろうということだ。…ってわかったか？」

実際のところ先ほど私が岩の中に閉じ込められていたようなことを思えばいいのだろうか？

とにかく私はグランに打ち込む技を考えていた。

…これはどうだろうか？

「『せんめつあんこうえんざん閃滅闇光円斬！』」

最大の威力を出すことができる私の一番の得意技。

その技をグランに浴びせる。

クロスリングの効果もあり、グランにはけっこう大きなダメージを与えることができるだろう。

氷が壊れてグランの体が空気に触れた。
動けるようになるくらいになったくらいでグランの体が倒れた。

そのまま倒れた状態で動かない。

融合を解除して倒れている二人を近くへと運ぶ。

「まさかあのじいさんを倒しちゃったか。」

「けどそれまで普通に行動していたグランがなんで凍らされただけで負けるんだらう?」

「それはですね飛鳥ちゃん。」

黒との会話にサンが割り込んできた。

「グランおじいさまは精霊最年長、ご老人ですから。飛鳥ちゃん、ご老人に寒さは死に直結する危険なことなのですよ。」

「やっぱり精霊も死ぬのか…。
しかし、琴葉もグランもこの状況だと契約するという約束が果たせない。」

「『傷ついた体を癒せ　　キュア!』!」

回復魔術を三人にかける。

しかし下級の回復魔術なのでだれもすぐに目を覚まさない。

しばらく待っていると、符養が目を覚ました。

「……あれ?…飛鳥、グランは?」

「倒したよ。サンとルナと一緒に。」

そう言って符養の後ろを指さす。

符養はその方向を向き、倒れているグランを見て驚いた。

「飛鳥、本当にすごい。」

「倒したって言っても私だけの力じゃないし、偶然弱点をつけただけだし……。」

「ああ、弱点をつけなかつたら飛鳥は負けていた。」

「でも必要なのは過程ではなく結果です。『もし』というのはないんですよ。」

サンがフォローしてくれた。

「あれ？グランは？」

琴葉が目を覚ました。

琴葉は自分の後ろにいるグランを探していて、サンとルナを見つけると

「あれ！？なんでここに精霊サンと精霊ルナがいるの？ここグランの洞窟じゃ……。」

「真正正銘グランの洞窟だ。俺らは飛鳥に喚ばれてここに来ただけだ。」

琴葉の顔をグランに向けながらルナが答えた。

琴葉は混乱してしまい、今ならどんな子供じみた嘘でも疑いなく信じてしまいそうな状態だった。

「……………って飛鳥、あなたルナとサンを召喚することができたの！？」

ようやく気づいたようだった。

「何で早く言ってくれないのよお！」

「だ…だって話したらややこしくなりそうだし…。できれば気づかれずに終わらせれたらな、と考えていたくらいで。」

「すごいことなんだよ！精霊と契約できる人なんてごく稀にしかないんだから。その中でもルナとサンは契約できた人が一人もいないと言われるほどなんだから。」

サンとルナってそんなにすごい精霊だったのか…。

自分のことに関してあまり話してくれなかったし、私も知りたいとは思っていなかったから少し驚きだった。

「精霊サン、精霊ルナ！私と契約を…」

「こゝとゝはさゝん？」

「は…はい。」

「ルナとサンとは契約させないよ？もし無理にするなら私が許さないから。」

「もちろんです…。」

琴葉がおとなしくなったのを待っていたかのようにグランが起き上がった。

そしてなぜか私を孫を見るように見てきた。

「……………」

「ぐ…グラン、約束です。私があなたを倒したので琴葉さんと契約してください。」

「いいだろう。しかし僕は僕を倒したものとしか契約はしない。…
契約者がしると言わない限りはな。」

つまり、私と契約しないと琴葉とは契約しないということなのだろうか？

しかし、私も契約すれば戦闘時にグランの力を使用することができるようになる。

「わかりました。では契約しましょう。」

私はグランに手のひらを向ける。

「『精霊グラン、汝を契約者飛鳥契約せよ。』」

「承知した。」

グランが手のひらを合わせる。

すると、周りに魔法陣ができて、すぐ消えた。

「これで契約は完了した。」

「では、これからよろしくね。」

「……」

目をそらし、黙ってしまった。

「じゃ…じゃあ次は琴葉さんとの契約ね。」

「いいだろう。」

琴葉も私と同じようにグランとの契約を始める。
そして同じように契約が終了した。

「これでお主との約束は完了したな。」

「ええ、よろしく。」

「グラン、ありがとうね。あなた私達のことあまり好んでいないように見えていたから。」

「貴様等は今でも儂の中では招かれざる客だ。」

グランが「もう帰れ」という素振りをしたので帰ることにする。

しかし、ルナとサンを元の場所に移そうとしたときに

「すまん、グランの爺さんに話があるからまだ帰すのは待ってくれ。」

「では飛鳥ちゃん、私達は先に行きましょう。」

「サンは？」

「私はルナが帰れる状態なのを飛鳥ちゃんに伝える役目ですから。」

飛鳥達が帰っていった後で、ルナとグランが話をしていた。

「どうだった？」

「ああ、貴様等の力を借りなければ儂に勝てないとはな。」

「なら伝えておくよ。けど爺さん、そんなこと言ったらあいつに嫌われるぞ?」

「別によい。姫のためだ。」

姫…その言葉は聞かせてはいけない。

その存在は精霊だけの秘密だから。

「飛鳥ちゃん、ルナから伝言です。」

グランの洞窟の出口付近でルナがグランとの会話を終えたようだった。

「なんて？」

「グランお爺さまが『精霊の力を借りなければ勝てないとはな』と言っていたようですよ。」

その内容を聞いて、私は最近の戦闘を思い返す。確かに最近の私はルナやサンの力を借りていた。

「だからまずは私やルナに一人で勝てるくらいに強くなってほしいらしいです。」

サンが続けた。

「ですから…帰ってすぐに私と戦いましょう。」

「…本当？」

「そうですね…今回は符養さんの修行も兼ねて二対一で戦いましょうか。」

「…飛鳥、頑張ろ。」

符養もやる気だった。

だが、サン相手に二対一でも勝てる気がしない。

「…『ルナ、サン、元の場所に戻れ！』」

「あつ、ちよ…。」

サンとルナを強制帰還させる。

二人とも「いいのかな？」というような顔をした。

だが、家に帰った時にサンが笑顔で家の前に立っていた。
そして修行後に符養とも一対一の修行をしておけと笑顔で命令され
た。

どうせ明日にはブツブツ文句を言う人ができるはずだ。
あの人は鎮めるのが難しそうだな…。

戦いの末に（後書き）

今回でグラン編終了です

今回は飛鳥の精霊憑依モードを説明します

憑依モード

飛鳥が精霊の力を自身が使用できるようにした状態。

この状態の時、憑依させた精霊によって性格が変わる。

しかし、精霊を複数憑依させた時組み合わせによっては通常性格になるときもある。

例をあげると、今回のようにサンとルナという対になる属性の精霊を憑依させたときになる。

ちなみに符養戦での複数憑依での飛鳥は怒りモードが発動していたため例外。

違う世界

昨日はグランとの戦いで、本来の目的を忘れて家に戻っていた。ということので次の日の放課後、私は符養とともに鉄のおじさんの鍛冶屋にきていた。

「おじさん、持ってきたよ。」

「おお！そうか、なら見せてくれ。」

私はおじさんに持ってきた鉱物を見せた。

おじさんは持つてきた鉱物を見て驚いていた。

「嬢ちゃん…こんなに上質な鉱物ばかりとは恐れ入ったぜ。しかもこれは異常なまでに見つかる可能性が少ないことから精霊自身が持ち歩いていると言われている^{スピリチュアルストーン}精霊石じゃねえか。」

私はその精霊石^{スピリチュアルストーン}を見てみたが、その石を採掘した記憶が無い。もしかするとグランが入れてくれたのかもしれないと思った。

「その石も新しい剣作りに使えます？」

「おうよ。これを入れれば魔術の威力が格段に上がるぞ。」

「精霊」という名前が付くから精霊の力を持っているかと思っていたが本当にそうだとは…。

あとで鈴から聞いた話だが、この精霊石^{スピリチュアルストーン}には魔力が宿っており、その魔力を自分で生産できる石で威力を増加させるのは発動した魔術

に石自身の魔力を乗せるかららしい。
だからいつもより少ない魔力を使えばいつもどおりの威力しか出ないかもしれないということになる。

「ならお願いします。」

「了解！なら一週間後にまた来な。今の剣は返ってくるまで使っていていいからよ。」

一週間後に新しい武器を手に入れれると思うとワクワクした。
早く一週間経ってほしいと思うくらいに待ち遠しかった。

「…あ、飛鳥。」

突然符養に呼ばれてびっくりした。

「な、何？」

「あ、の……、その……」

何か言いたげだが、何を言おうとしているかわからなかった。
しかし、言おうと決意したようで、

「昨日の精霊が言っていた修行……」

…忘れてた。

サンが昨日言っていた修行…、時々来るから普段は符養としていて
と言っていたことを思い出した。

しかし昨日で身体が疲れきっていて回復しきっていない。

この状態でやっても能力向上は難しいかもしれない。

そのことを符養に話すと

「…だめ。」

の一言で却下された。

修行後、家に帰った私達は各々の部屋に行った。

私はベッドに突っ伏したままそのまま襲ってきた眠気に従い、眠りの園へ遊びに行った。

夢は見なかった。

目を覚ますと知らない天井の下にいた、疲れているのだろうか。

身体を起こして周りを見ても私の家にある部屋の光景ではなかった。

「あれ？」

思わず声が漏れた。

またツヴァイが私に何かをしたのだろうか。

しかしそうだとしてもここにある物はない物ばかりだ。とりあえずここを探索しようと思う。

符養もここに連れて来られたかもしれない。

部屋を出て、階段を下りて下の階に行った。

そこで

「あ、飛鳥起きたの。今日は虎ちゃん達と疲れ果てるまで遊んだの？」

鈴がいた。

「鈴！ここどこなの！？誰がここに連れてきたの？」

鈴はよくわからないという顔をして

「…飛鳥、どうかしたの？ここはあなたと私の家じゃない。」

私は今やっと違和感を覚えた。

鈴の口調がいつもと違う。

いつもの鈴なら私を「飛鳥っち」と呼ぶし、もう少しのんびりした喋り方だ（真面目な時以外は）。

さらに初めの鈴の言葉に含まれていた単語「虎ちゃん」。

私はそんな人は知らない。

つまりこの人は鈴であって鈴ではない別の人の人なのだ。

「あなた、誰なの？」

鈴が衝撃を受けたような顔をした。

「飛鳥…まさか記憶が無くなってしまったの？」

「あなたは鈴の顔をしているけど私が知っている鈴じゃない。鈴は普段私を『飛鳥』とは呼ばない。」

「飛鳥…、どうしちゃったの？私を忘れ…」

「冗談はもうやめてよ。もう冗談じゃ済まさないよ。」

私は心の奥で「やっぱりこういう風に喋るのはダメなの？」と言い

ながら笑ってくれる鈴を期待していた。
しかし、

「……」

黙ってしまった。

そして

「ふふふふふ」

突然笑い出した。

と思うと突然普通になり

「あゝ、面白かった。なんで飛鳥がいきなり始めるから戸惑っちゃったじゃない。けどなんでこんなことしようと思ったの？」

彼女は私が冗談でやっていたかと思っっているらしい。

仕方がないから彼女を気絶させて外へ出て現在地を確認しないと。

彼女を気絶させるために剣を抜こうと手を腰に当てたが、

剣がなかった。

寝るときはそのまま外すのを忘れて付けたままだったのに無くなっている。

さらに気づいたことだが、見たことない服を着ている、自分だけじゃなくて鈴も。

そしてさらに鈴が大きく見えた。

私と鈴の背は同じ位だったはずなのに鈴が圧倒的に高い。

ここで私は確信した。

私は別の世界に来てしまったのだと。

しかしその場合、二つの疑問が残る。

一つ目は本来この世界に存在する私はどうなったのか。

二つ目はなぜ私がこの世界に来てしまったのか。

「飛鳥、どうかしたの？」

鈴が心配する。

しかしそれは今重要じゃない。

ここはどの世界なのだろうか。

ここがウルルという考えはあるだろうか？

ウルルの物がクロスワールドに流れてくることは知っているがクロスワールドの物がウルルに流れてくることなど聞いたこともない、人なんて余計にだ。

しかしここにある物はウルルから流れてきたという物と似ている物がいくつかある。

「飛鳥、本当にさっきからどうしたの？」

確信した、ここはウルルだ。

壁に文字が書かれた紙が貼ってあり、その文字がウルルの文字だからだ。

先程から鈴が話しかけていることに気がつかなかった。

事情を話して協力してもらうのが一番だろう。

「あの…、実は私あなたの知っている飛鳥ではないんです。」

「？」

意味不明だという顔をされた。

「何らかの事情でこの世界に飛ばされて来たんです。ここの私はどうなったのかわかりませんが、多分大丈夫だと思えます。」

「……そう。……なら帰る方法を見つけないとね。」

「……………え？」

簡単に受け入れられた。

「え？ちよ…：すんなり受け入れちゃっていいんですか？」

「慣れてるからね。」

…：さっきの言い方はクロスワールドの鈴に似ていると思った。

「へえ、向こうでは私はそんな性格してるんだ。」

「おかげでこちらは疲れますけどね。」

「けどこっちの飛鳥だって一人称が『ぼく』だし、人見知りな性格してるよ。」

それは自分も同じだ。

鈴や符養に対しては慣れてるからいいが、他の人には人見知りが激しい。一人称だって1ヶ月前までは「ぼく」だった。

私ってそんなに性格が変わったのか…：と自分の変化を実感する。

その後もお互いの友人関係などを話した。

その中で特に気になったのがお互いの世界の関係だった。

「つまり二つは平行世界ね。」

「ばられ…何ですか？それ。」

「『もし』の世界って言った方が一番いいかも。」

鈴が言うには例えば二つの選択肢があるとする。

自分がAの選択をしたとする、すると同時に自分がBを選んだ世界もできる。

このBの世界はAの世界とは二度と交わらない、ゆえにAからみての平行世界となる。

「けど私はあまり先の未来が変わらない選択ではすぐに二つの世界がくっついて元の一つの世界Cになると思うの。…で、二人の飛鳥が入れ替わったのはこれが関係あると思うの。」

「え？私の世界と鈴さんの世界は全く違いますよ？」

なんだか「鈴さん」という呼び方が懐かしかった。

しかし鈴はいつもの呼ばれ方なのか気にせず私に私の質問を返してきた。

「なら、全く違う世界でなんで同じ人が産まれたの？」

「それは…」

答えが出なかった。

「これはお互いの世界がくっついてきている証拠。同じ顔でも名前が違つというような人がいる場合はまだそこまで深刻ではないと考えた方がいいけど、一緒ならもう危ないと考えていいわね。」

「そんな…。」

これは間接的に世界は一つになり二つの世界はバランスが崩れて滅びると言っているようなものだった。

「まあただの私の推測なんだけどね。」

…真に受けていた私が恥ずかしかった。

しかしそんな危険があると思いつけなければいけないことがなくなつて安心していた。

…ふと他のことを話しすぎて鈴に聞いていなかったことがあったのを思い出した。

「そういえば聞きそびれていたんですけど、」

「何？」

「私の家族ってどんな人なんですか？」

先程の会話で飛鳥はここに居候しているだけで別に姉妹ではない（鈴の妹は現在海外に留学中）と話していた。

ならどういふ経緯でここにいるのか、自分の家の人はどういふ人なのか、それを知りたくなってきた。

「飛鳥、一応こっちの飛鳥はあなた自身じゃないからあまり詳しくは話せないけど…私もあまり知らないけどね、あなたは元は神社の子だったみたいよ。実際にあなた式神を呼び出すこともできるし。」

そ…」

「こっちの私も召喚が使えるんですか!？」

「え?まあ…、そうだけど…。……』も『?」

召喚が使えるということはこちらの世界にもサンとルナがいるということ、もしくはどちらか一人がいるかもしれないということ。二人は人外なので元の世界に帰れる方法を知っているかもしれない。私は鈴を無視してすぐに彼らを呼び出しはじめた。

「^{マスター}契約者飛鳥が命じる、我の前に現れ、我を元の世界に返したまえ。いでよ！サン、ルナ！！」

召喚時にあらわれる魔法陣は浮かび上がらなかったが、私の目の前に二人の友人が現れた。

「おい飛鳥、なんだよさっきの呼び出し方。いつもと違って戸惑ったぞ。」

「私たちの呼び方も違いましたよね。…サンとルナでしたっけ？」

この二人はこつちの世界では違う名前だった。

せつかく二人に会えたと思っただが…。

さてよ、二人は私と初めて会ったのが私が産まれた時だとしたら…名前が無く、名前を幼い私に付けてくれと頼んだのなら私はこの二人の名前を知っている。

「…黒、白。ある事件があつて人手がほしいの。手伝ってくれる？」

「お？なんだかいつも飛鳥っぽくないがまあいいぜ。」

「飛鳥ちゃんの力になれるなら。」

私は二人に私はウラルの飛鳥ではないこと、クロスの二人のこと、私がどうやってここに来たのかを二人に全て話した。

「なるほど、そういうことか…。」

「で、飛鳥ちゃんは私たちに何をしてほしいのですか？」

「この世界の空間の壁に穴をあけて私をクロスまで運べない？」

「いやいやいや、普通に無理だって。」

「飛鳥ちゃんすみません。私たちは式神、幽霊が人に触れるようになっただけのような存在ですからそういう超能力的なものは…。」

即答だった。

私は希望を失った。

私はまた同じ現象が起こるまでここにいななければいけない。
落ち込む私に鈴は

「飛鳥、そんなに落ち込まずにここで私たちとこの暮らしを楽しむのもいいと思うわよ。…もちろんいつもの飛鳥も帰ってきてほしいと思ってるけど、向こうでも私がそうやって言っているかもしれないし、なによりすぐに帰るなんて寂しいじゃない。」

と言ってくれた。

そうだ、別にすぐ帰らなくても余裕はある。

この暮らしを体験するくらいいいじゃないか。

なぜ私はすぐに帰りたいと思ったのだろう。

これを逃したら二度と体験できないことをなぜ…。

「けど私が帰らなかつたらクロスに飛ばされたかもしれない私はどうするんですか!？」

「だから言ったでしょ、向こうでも私がゆっくりこうって説得しているって。…どうせあなたの家にサプライズ訪問しているわよ。

私がそんな性格ならそうするかな？」

私はのほほんとしている鈴を思い出していた。

確かに彼女ならありえそうだった。

「わかりました。けど帰れる方法が見つかり次第私は向こうに帰ります。」

「え？…うん、わかった。……嫌われた？もしかしてツンデレ？」

…鈴がなにやら気にしていたが気にしないでおこつ。

私は白と黒をかえした。

黒は「ルナか…今度飛鳥に頼んでみるか」と言っていた。

違う世界（後書き）

飛鳥が普通の女の子になりました。

この章は伸ばそうと思えばいつまででものばせるのですが（このまま飛鳥をウルルに永住：おっとだれか来たようだ）下手をすると次の話で終わるかもなんですよね。

ではウルルの鈴の説明を今回はします。

音鴨 鈴 秋雨あきりゅう高校一年生

ウルルの飛鳥が居候している家の主、成績優秀。

親は海外におり、妹もアメリカに留学している。

お嬢様だが、普通の人たちと変わらない生活をしている。（これには少し深いわけが…）

どこかで訓練したのか戦闘ケンカでは異常なまでに強い。

ウラルの友人

その夜、私は鈴の家に泊めてもらった。（元々ウラルの私が居候していたためここで寝るのは普通だと鈴にあきらまれていた）そして夢でウラルに住んでいる私がクロスに飛ばされた夢を見た。

朝、見た夢を思い出しウラルの私も異世界に飛ばされていたことで一応無事なことに安心する。
そのことを鈴に話すと、

「あの『飛鳥』は向こうの私に世話になっているのか…。」

安心していろいろだった。

クロスの鈴も多分同じだろう。

「そういえば」

思い出したように鈴が話を切り出す。

「昨日メール…手紙を離れているところに一瞬で送信できる機械があるんだけど、それで友達に事情を話したんだけど、『今日会わないか?』だって。どうする?」

「あ、お願いします。一応私の友人にどんな人がいるのか知りたいですし。」

そこにウラルの符養がいればどんな人なんだろう。符養とは違って明るい性格なら笑うかもしれない。

「どうしたの？ずいぶん楽しそうだけど？」
「い、いえ、なんでもないです…。」

昼、私は鈴に連れられて外に出た。
監禁生活をしていた姫が初めて外に出た気分になった。
外は灰色の地面に覆われ、両横も灰色の壁に挟まれていた。

「ウラルの地面は土じゃないんですか？」
「一応土なんだけど車のためなのかな？そういう乗り物があつてそれが走りやすいように土をコンクリートっていうやつでコーティングしているわけ。コンクリートを割れば土が見えるわよ。」

ま、そんなこと生身の人間ができることじゃないけどね。
そう付け足した。

私はこんな堅いものを壊せるものを見てみたかった。
…魔術なら簡単にこれを壊せるかもしれないな、と試してみたが今使えたとしても事件になるな。
しかし、

「飛鳥、すごい目が輝いているよ。」
「だって、見たこともない物ばかりですよ。ウラルの物は一生で見れるか見られないかくらいの物なのにこんな『どこにでもある』みたいな状態なんてすごくないですか！？」
「確かにそうかもね。…飛鳥はこの世界について研究してたの？」
「いいえ、どちらかというところの鈴がしていたくらいかな。」

気づかずクロスの鈴に話すような感じになっていた。
鈴は

「へえ、言われてみれば私もファンタジーに興味あるかな？」
と答えた。

気にしていないようだった。
なら普通に接すればいいかなと思いはじめた、さらに考えてみれば
鈴に丁寧語で喋ることがおかしいんだという考えに達していた。

「でしょ？ やっぱり鈴も根本の性格は一緒なのかな？」
「かもね。あ、ここよ。」

話に夢中になつて危うく通り過ぎてしまつところだった。
私達は鈴が指した方向の家の中に入る。
私は知らない人の家なので緊張した。
中に入ると人が迎えてくれた。

「よお、神しんにも事情話して向かつてもらっているんだが、よかったか？」

「大丈夫、問題ないわ。」

「え…えつと、その人は？」

「あ、こいつは水星竜みずほしりゅう。私の幼なじみで何でも屋。」

「何でも屋はお前もだろ？…てか、本当に俺のことわからないのな、
いつもなら俺を見る度に睨にらんでたのに。」

…この人と私の間に何があつたのだろう。

竜と呼ばれたその人は私の顔を見た後、鈴に視線を戻し、

「で、俺に何させよう？」

「あの力で私達を飛鳥の元の世界に連れてって。」

「…何がしたいか知らないがそれは無理だと思っぞ。あれは万能じゃないって何度言えばわかるんだ？」

何のことだろう。

「鈴、『あの力』って何？」

竜が「へえ、タメ語か。」と言っていたがタメ語という意味がわからなかったのであまり気にしなかった。

「『あの力』って言うのは超能力のこと。竜はそう言われるのが好きじゃないから『あの力』って言うているだけ。」

超能力…？

どういうものか理解できなかった。

もしかすると魔術の一種かもしれない。

「飛鳥、超能力は魔術の一種じゃねえからな。」

竜に心を読まれた！？

これが超能力？

「ちげえよ、もつと強大だよ！」

これも読まれた！？

超能力恐るべし…。

「はあ…。飛鳥の天然っぷりはどの世界でも変わらないみたいだな。こいつの勘違いは正すのに苦労するぜ…。」

この飛鳥の天然っぷりは竜にしか適応されない。
ついでにいうとさつき竜はただ飛鳥の表情を見て何を考えていたか
推測していたのだ。

飛鳥はこれに気づいていないのである。

「飛鳥：話を戻すけど、いい？超能力は魔術と関係ないわ。けど魔
術に近いようなものね。だけど大切なのは科学と魔術が交差しない
限り物語は始まらないの！！」

「…ならもう物語は始まっているよね？」

「おい飛鳥、お前よくそんなツツコミを出せるな。…ああ、元ネタ
を知らないからか。」

…本当にウルルでは知らない単語が出てくるな…。
これが蔑称なら怒りたくなるな。

「竜さんの…『ちようのうりよく』…でしたっけ？それが使えない
なら他の方法ってあるの？」

「…無いわね。」

あっさり言われた。

「けどいつかは見つかるはず。…よかつたあゝ、今がGWで。」

『ゴールデン』ということはすごいいいことなのだろうか？
まあ鈴や竜が安心してているから大丈夫なのだろう。

「じゃ、時間があることだから他の友達にも会いに行こうか。…
って、逆に来ちゃったか。」

……時間？

何の時間だろう？

と思っていたら上の階から慌ただしく走ってくる音が聞こえた。

「飛鳥いるの!？」

「異世界の飛鳥と入れ替わったって本当!？」

二人の男女が部屋に入ってきた。

その内の一人は見たことある人だった。

「琴葉!」

召喚科四年、私と符養と一緒にグランと契約を結びに行った人、琴葉その人だった。

「こ……誰?その人。」

あ、この世界の琴葉は名前が違うのか。

私は自分がこの世界の人の名前が向こうの世界の人と違う名前であること(とは言っても実際鈴にしか会っていなかったが……)に驚いた。

「やっぱり飛鳥であって飛鳥じゃないのか……。」

少女は残念そうな顔をした。

「すみません。」

私はそういう言葉しか言うことしかできなかった。

「べ、別に飛鳥は謝ることないよ。」

「ですけど……。」

「飛鳥、俺はこれは事故だと思う。だから仕方ないと思う。お前も仕方ないと思って思え。」

少年の方も私を励ましてくれる。

しかし私は改めて今の私は私自身ではないことを感じる。

「ま、落ち込んでいても仕方ねえから自己紹介するわ。俺は水星雷^{みずほしらい}牙^{いが}。飛鳥とは同じ中3だ。」

「で、私は水星虎^{みずほしこ}。私もこいつと同じで飛鳥の同級生。」

虎はそう言うと、自分の胸に手を当て

「わからないことがあったら私に何でも聞きなさい。」

と、得意気に話した。

私は返し方がわからなかったのでとりあえず微笑んでおいた。

鈴は

「虎ちゃん、別にわからないことは家で私が教えるから大丈夫よ。

向こうの世界と少し違う点があるかもだけど常識知らずとかじゃないし、こっちの勉強がわからないくらいだからね。」

「ぶ〜、こっちの飛鳥の時は私が教えてたのに……。」

「それも私が教えてました。」

鈴が即答で冷たく返す。

「学校でわからなかった時のことです……。」

なんだろう、鈴と琴葉が私の取り合いをしているようにしか見えな
いんだけど……。

「ならもうそういう方法で分担すればいいだろ？はい、この話終わ
り。」

竜が無理やりしめる。

するとまた一人、部屋に飛び込んできた。

「チーツス。飛鳥は大丈夫か？」

「大変な状態だから呼んだんじゃない。」

「？俺には普通に見えるけど？」

私は一応会釈しておいた。

そつした直後後ろに後ずさり

「飛鳥じゃ……ない……！？」

と、もう少し失礼なことを言った。

「すみません、私も飛鳥なんですけど……。」

「神、状況も詳しく知らないでそんな失礼なこと言うんじゃないよ。
」

雷牙が怒りながら神に飛びかかる。

神はじゃれているのだと思って笑いながら相手をする。

「神、遊びながらもいいから話を聞いてよ。」

神という人はこういう扱いを受ける人なのだ。私は思った。

「なるほど〜ね〜。」

「伸ばすなうぜえ。」

「雷牙と〜戦いながら〜なら〜仕方ない〜だろ？竜さんよお。」

「切れよ普通に。」

事情を聞いた神は私のほうを見る。

みんな反応は似たようなものなんだなと思う。

しかしこの人ふざけすぎでしょ。

「神、飛鳥が睨んでるわよ。」

「え？」

「神さんふざけすぎだから飛鳥がイラついているんだよ。」

「こつこつ反応はこつこつの飛鳥と同じだからな。」

虎が私の思いを代弁してくれた。

……

「あれ？」

「？ 何をしたの？飛鳥？」

「いや、なんか足りないな〜と思って……。」

しかし何か全くわからない。

私が神にもう慣れてしまったため、何かをしてもらつのを忘れている。

「……あ、紹介。」

竜が思い出す。

その言葉に私も思い出す。

「そつだ紹介。神さんの名前しか聞いてないんですよ。……えーつと、『水星』とか、『音鴨』おとがもとか、こついつのをウラルではなんて言うんですか？」

「名字？」

「あ、そついうんですね。あと詳しいこととかを聞いてないです。」

みんな『ああ』^とと思い出す。

私は神に顔を向けた。

「……あ、えーつと、俺は戸宮神。とみや しん竜達と同じで高一だ。あとこいつらと一緒に何でも屋まがいなことを学校でやっているかな。」

「そついえは鈴たちの『何でも屋』^とって詳しくはどういうことをやっているの？」

「まあ正しくは『探偵部』^とっていう部活なんだけど、まあ学校で困っている人の依頼をうけて解決するっていう活動かな。」

「あ、こつちでい^{ギルト}組織みたいなものですね。」

みんなキョトンとしていた。

あれ？私何か変なこと言つたかな？

「おい飛鳥、やつぱりお前の世界^とって魔術が存在しているんだな。」

「え？はい、そつですけど？」

「ああああ！クロスに行つてみたいいい！飛鳥が羨ましい！！」

「え？え？」

鈴の言っていることがよくわからなかった。

私にとつて元の世界の生活は普通だったからわからないだけかもしれない。

「け、けどクロスではダンジョンにいくと魔物モンスターがでるから危ないですよ?」

「モンスターなら私は問題ないわ。私、我流の格闘術持っているし、竜は超能力があるから。……神はまあ、……足手まといね。」

「ひどっ!」

「我流の格闘術って……喧嘩殺法と素直に言えよな。」

確か鈴木も我流の格闘術を使う時あるな。
さすが平行世界、と誉めてあげたい。

「なーなー飛鳥、飛鳥の世界ってこんなかんじ?」

神が本を持ってきた。

その中身を見ると絵がたくさん書かれており、その絵の人が何かをしゃべっているが

「あの、神さん。」

「? 何だ?」

「私、ウラルの文字読めないんですが……。」

「え? こうやって普通に話せるのにか?」

「ええ。なんで話す言葉が同じなのに書く言葉は違うんですかね。」

「ねえ、ちよつとクロスの文字を書いてよ。」

虎に言われてさらに文字を書く道具を持たされた。

私はある単語を書いた。

「うわあ、本当に違うのね。」

「これなんて読むの?」

「これは『飛ぶ鳥』、つまり『飛鳥』と書いてあります。すぐに単

語が思いつかなかったので自分の名前を書いちゃいましたが良かったですか？」

「よかったよ。意味不明な言葉よりもいいよ。」

私は虎に誉められて照れる。

「ま、今から帰れるようになるまでは私たちの言葉を覚えてもらうことになるんだけどね。」

……また私は鈴によって変えさせられるのか。

そう思うと私は今の自分の未来を考えると倦怠感が襲ってくる感じがした。

「大丈夫よ飛鳥。ちゃんと私たちが守ってあげるから。」

「うん……。」

「なんだ、元気ねえな。」

「私達は力貸すよ？」

「ありがとうございます。けどまた大変な目にあっただんだなって思ったら……。」

私は少しの間鬱状態から帰ってこなかったらしい。

ウラルの友人（後書き）

登場人物増えました。（とはいっても少しの間だけだけど）

けどこの登場人物の数はクロスの世界の登場人物と同じ位じゃないですか？

ああ、クロスの間人が書けなくていと悲しい。

今回はウラルでの主人公の竜です。（主人公だからってそんな回は一つも書く気0ですけど）

水星竜^{みずほしじゅうりゅう}

秋雨高校一年

三週間前に突如超能力に目覚める。その力は見たものは黙秘しているため不明だが強力な力を秘めている。

飛鳥の元保護者から「飛鳥を頼む」という約束をしているが、他の人にはそのことを隠している。

絆

「これは『はる』や『しゅん』って読むの。」

竜の家から帰ってきてすぐ、私はウラルの文字を覚えさせられていた。

もうすでに私は「ひらがな」という文字と「カタカナ」という文字をマスターしていた。

そして今「かんじ」という字を習っている。

それよりも普通なら9年近くかかることをGWの5日でマスターしろというのはさすがに難しいと思う。

「飛鳥一回教えただけで熟語とかも全部覚えるってすごいね。」

「そ……そうかな。」

「そうよ。普通なら一回で覚えるなんてできないわよ。……読みは大丈夫だったけど書ける？」

「うん、大丈夫だと思う。」

「じゃあ、この本を今日中に読んでおいて。全部で23巻あるけど読めるだけでいいからね。」

と、鈴が本を私に渡す。

私はその1巻を手にとって読み始める。

挿し絵があり、文字ばかりだけど私の世界の本より神に渡された本に似ていると感じる。

「おお、もう早速読み始めるんだ。」

「……………」

鈴が何かを言ったようだけど私は本を読んでいて聞こえなかった。
鈴は

「ははは……このところもそっくりなんだ。」

「鈴」

「は、はい!？」

「うるさい。喋らないかどこか行っていて。」

鈴は静かに部屋を出る。

全く……この世界の鈴はあっちの鈴と一緒にうるさいな。
まあどこか行ってくれたし、静かに本を読むか……。

……。

……。

……。

静かだ……。

普通ならここで鈴は影でコソコソ私の様子を見にきて私がそれに気づくくらいのやり取りがあってもいいはずだ。

こちらの鈴は言ったことを素直に聞いてくれるみたいだけど……。
私はいつもの日常と違うことを感じた。

今はいつもと違うことにだらけなのにそのことだけが大きく違つと

思えた。

「帰りたい」

無意識に思っていたことが口に出てしまった。

そうだ、私は帰りたかったのか。

そう思うと私の目から涙が出てきた。

私は誰もいないか周囲を見回し、誰もいないとわかると思う存分泣いた。

私は悲しかった、寂しかったのだ。

知っている人に似ている人は大勢いたが、本人はいなかった。

私はそのことに寂しさを感じていたのだ。

楽しそうとは思っておらず、「帰りたい」ということしか考えていなかった。

今なら符養と一緒に修行していたころだろう。

それも今は無い。

鈴につきあわされることも無い。

符養が夜私のベッドに入ってくることもない。

きついサンとルナの修行も、モンスターとの戦闘自体無い。

だがそれは私にとっては意味不明な世界にひとりで飛ばされることよりはましだったのだ。

私が泣いていると鈴が扉を開けて駆け込んできた。

「ちょ、飛鳥！？なんで泣き始めるの!？」

「どう……して……？見てたの？」

泣きながらどうまく言葉が出てこない。

「飛鳥に言われたけどやっぱり気になって、二階に行かずにごっそり見てたの。そしたらいきなり泣き出すから。」

「そう……。」

「そついえばどうして泣いてたの？」

私はまだ気持ちが悪く落ち着かなかったから落ち着くまで少し黙っていた。

鈴もそのことを察知してくれて落ち着くまでの間、何も言わなかった。

ようやく落ち着いた私はすぐに話し始める。

「やっぱりいつも友達がやってくれることをしてくれなかったことが寂しくて……。ううん、本当は素直に帰りたかったの。私は私の世界に帰りたい！どうしてこんなわからないところに飛ばされたの！？友達はみんな私の知っている友達じゃなくなっただし！もう……。」

「わかったわかった。また怒ってきてるよ。」

「あ、ごめん。けど飛鳥がそう思っているなんて……。」

鈴は悲しそうだった。

しかしなぜか少し嬉しそうだった。

「だ、だけど私はこっちの鈴達と離れたくない。私にとってはどの世界の鈴でも大切だから。」

「ふふっ、私達自身は出会って2日目なのにね。けど私はそう感じないんだよね。前から一緒にいるみたい。まあこっちの飛鳥と住んでいたからだとは思っけど。」

不思議と笑顔になれた。

しかし鈴はそのあとに悲しそうな顔をした。

「けど、私も本音ではこっちの世界の飛鳥を心配しているの。けど私にはどうすることもできない。だからあなたを帰す方法を探してるの。ううん、あなたが帰れば飛鳥が帰ってくるって思ってるから……だからあなたを帰したいだけ。………だけど、私もあなたのことが大切よ。」

鈴は微笑んだ。

私はまだ帰れるわけではないのに鈴との別れが寂しくなって鈴に泣きついていた。

「はいはい、今日は簡単に引き下がったけど明日竜を叩き折るから今日は私が言ったことを終わらせよ。」

ずっと泣いている私をみて泣き止ませるためにか鈴が言った。しかしあるワードのせいで私は鈴の言葉の前半しか聞けなかった。

「え………鈴、竜さん叩き折ったら竜さん死ぬんじゃない………?」

「言葉のあやよ。本当に叩き折る気は無いから。」

「な、ならいいけど……。」

鈴は立ち上がり、夕食をつくろうとキッチンに向かった。

私は少し考えてから本を読むのに取りかかった。

あと半分、読み切ろう。

クロス

飛鳥がおかしいと符養から聞いたんだとツヴァイが0に話した。今は急いで魔術科に向かっている。符養は飛鳥が別人みたいになったとしか言わないらしい。

「やっぱり片方は抜けているとはいえ、裁きの者ジャッジメントの中でも派閥とかあるのか？」

「あいつは特別な所だったからあまり交流がなかっただけだ。そうでないとしてもあいつはあまり人と接さないタイプの奴だ。」

「そうか、俺はどんなやつか知らないから是非見てみたい……って、なんでお前もついてくる？」

0が見た限りではツヴァイは0に内容を伝えたあと、クラスメートと軽い組み手をしていた。

「用事を思い出したと抜けてきた。俺だって今の飛鳥が心配だからこうして様子を見に来てだな。」

「お前のそれは心配じゃない、単に面白がっているだけだろ……。」

0とツヴァイは同じ科だ。

だから2人は1カ月前のあの事件の時以降、（ライバル的な関係として）よく会話したりよくチームを組むことがあり、仲良くなった。

そんな仲良し2人は魔術科の飛鳥のクラスの前に到着した。

0は教室に入り、飛鳥を見つける。

飛鳥も入ってきた0をみて「そんなはずは……」という顔をしていた。

0が飛鳥に近づき、言葉を発そうとしたが、飛鳥のほうが早かった。

「骸亜…さん…？なんでこんなところに……？」

若干目に涙を浮かべているのが見えた。

0は「骸亜」というワードを聞き、懐かしい日々を思い出して笑いがこみ上げてきた。

ツヴァイと元々飛鳥と話していた鈴はなぜ0がこんな反応をしているのかわからなかった。

確かに今の「クロスにいる」飛鳥はいつもの飛鳥じゃない。

だってこいつはウラルの飛鳥なんだから、と0は思った。

0はクロスの飛鳥にもみせたことがない優しい口調で言った。

「久しぶりだな、元気だったか？飛鳥……。」

ウラル

私は本を読みきつたと同時くらいにできた晩御飯を食べていた。

鈴は驚異的なスピードだと言っていた。

私は元々本が好きでとてもぶ厚い本ばかり読んでいてそれを読み続

けるうちにぶ厚い本を30分くらいで読み切ってしまうほどになっていた。

鈴が貸してくれた本は500ページもなかったはずだから一冊5分から10分で読み終わってしまう。

「いやいや、速読のとよく知らないけどラノベ5分はさすがに無理よ。絵本じゃあるまいし。」

「鈴はこれどのくらいかかるの？」

と言いながら鈴の本を一冊見せる。

「えっと……集中すれば2、3時間くらいじゃないかしら。」

それが普通くらいなのかと思う。

……

そのとき、私は誰か懐かしい人に会った。

……

いや、そんなはずはないと思い直す。

私はさつき……今も鈴と会話していた、他の人がきた気配もない。しかしこの感じとった記憶も私自身のものだ。

つまりこの記憶はクロスにいる私のものだ。
二人揃えば別人といえど違う世界の自分達なのだ。
……だけど何故この記憶を私が感じたのだろうか。

夕食後、鈴にそのことを話すと

「うーん、その記憶は向こうで誰かが送ったとか。」
「なんで？」

「それは、事件を解決できる重要な人物が記憶のビジョンの中にいたからじゃない？」

「けど、その記憶は懐かしさが強くて内容が見えないの。」
「まるで暗号ね……。」

「鈴、ウラルの私があつたら懐かしいって思える人って誰？」

「やっぱり親じゃないかしら。……待つて、もしかするとあいつ……まさかね。」

「あいつ？」

親以上に大切な人がいたのだろうか？

まあ私も親がいないし、サンとルナが親みたいなものだけど。

「骸亜っていうんだけどね。飛鳥の親代わりの人よ。……っていつでも私や竜と歳は変わらないんだけど。けど飛鳥にとってあの人が一番大切だったみたい。あいつが死んだとき、すごい怒って竜に攻撃してたっけ。」

「死んだって……竜さんが殺したの!？」

「いや、本当に死んだかすらわからないけど建物内の戦闘でね、私たちが外に行ったあと二人だけで闘ってたの。で、竜が勝ったらしくて建物から出てきたんだけどね、骸亜は出てこなくて結局建物は崩れたわ。けど、瓦礫からあいつの遺体は出てこなかったの。」

「だけど出てこなかったことからその時のウラルの私は竜さんが殺したと思い込んで……。」

自分がものすごく怒るとどうなってしまうのだろう。

私だとウラルの自分より酷くなるかもしれない。

剣をもって強力な技や魔術を詠唱がめちやくちやな状態で乱発して魔力が切れるまで容赦なく敵に撃ち続けるだろう。

「けど思い返してみれば、その時以来飛鳥がキレたところみてないな。あれから竜にはキツイことばかり言うけど、基本楽しそうだし。」

「そうなんだ。けどそれまでにすごい時間かからなかった？私自身がそんなんだから。」

「うん、だけど今でも飛鳥は私たちに心を開いてくれてないと思う。」

……飛鳥、

「？ 何？」

「私こっちの世界の飛鳥が帰ってきたらあの子を私の家で養子にしたいんだけどいいと思う？」

「え……」

言葉が見つからなかった。

私はウラルの鈴と過ごしていて姉ができたみたいで嬉しい。

しかしウラルの私はどう思うだろうか。

もし私が「いいと思う」と言ったらあっちの人生を勝手に私がきめたことになるのではないか？

「そ、そういうのを私が答えてもダメだと思う……。」

「やっぱり？けど自分がこっちの飛鳥の立場ならどう？」

「私はいいと思う。鈴はしっかりした人だからこっちの私をしっかり守っていると思うから。」

「そんなこと言うけどあなた、自分のもとの世界に帰ったら私に姉妹になってほしいって言われるのよ？」

「それは速攻で拒否する。」

クロスは鈴もこっちの鈴みたいになんかちゃんとしていてくれて年上なら考えるけど。

……あ、符養がいたから無理か。

彼女なら「私が飛鳥の妹になる……」って言いそう……。

「……なんか私の場合はOKしてくれたのに傷つく。」

鈴が落ち込んだ。

「こっちの鈴はあつちの鈴を知らないからそんな反応するんだよ。

一度会えば私が拒否する理由わかんと思う。」

「……そんなこと言っているけどもしかしてあつちの私のこと嫌いなのかな？」

「嫌いじゃないよむしろ好き。けど、一緒にいると疲れるっていうか……。真剣な時はウラルの鈴みたいにかっこいいのに……。」

私はかつこよくないよ、と鈴が言った。

いや、多分そう言った。

急に目の前が真っ暗になって意識を失ってしまったからだ。

空を飛んでいる

そんな感覚だった。
地面や壁といった堅い感触がなく、どこにも触れていない。
と、堅い感触が戻った。

「飛鳥つち！」

その声で目が覚めた。

そこには鈴がいた。

だが、さっきより少し幼い。

それと呼び方。

ああそうか。

私はクロスに帰ってきていた。

絆（後書き）

クロス帰ってきた飛鳥。

しかしまたウルルへと行かなければならない事情ができた!?

異世界での物語もいよいよクライマックス!?

次回! 『別れ』

……と、半分あっていて半分はずれている次回予告です。

今回は飛鳥の世界の物語ではなく別世界の別時間での人物の物語でもやろうかなと思ってたり思ってたかったり……。

異世界と異世界での物語が交差しクロス始めた

とは言ってもまだまだ序章なんですけどね

戸宮とみや神しん

秋雨高校一年

竜の親友だが竜は否定。

中学は竜や鈴と違い、中学二年まで予知夢を見ることができた。

竜達とは中三の秋に偶然出会い、意気投合して仲良くなったらしい……。

お調子者でよく鈴や竜からスルーされることが多い。

異世界の物語

これは、飛鳥がクロスという異世界の飛鳥と入れ替わったときの事件より少し前……俺が高校に入ってすぐくらいだったかな……。

俺は教室でぼーっとしていた。

昨日のことを思い出していたからだ。

顔には飛鳥とかいう少女に殴られたあとが無数にある。

そんなところに神がきた。

「竜、お前昨日あんなことがあったのによく学校に来ようと思ったな。もしかして真面目ちゃんかあ？」

「うっせえ。なんか休むと落ち着かないと思ったから来ただけだよ。今日はほとんど寝るつもりだ。」

とは言っても昨日の傷の痛みせいであまり眠れないとは思っが……。
神は溜め息をつき

「お前、骸亜のこと考えてたろ。」

「ああ。」

「……やっぱりあいつのこと……好きだったのか？」

俺は無言で神を三回ほど殴り蹴った。

まだ足りない気がする。

いっそ殺すか……？

「待て待て！冗談だって！なにも殺すまではないだろ！」

「心を読むな。こんなの冗談でも殺したくなるレベルだ。シリアスなシーンなら余計に殺したくなるわ！」

「……すまん。」

……はあ。

確かに俺は骸亜のことを考えていた。

あいつは瓦礫の下になった。

俺が殺したようなものになっていたから飛鳥に殴られたんだろっな。

さて、プロローグ的なものはこころへんでいいか？

俺は骸亜との戦いを思い出していたんだ。

事はこれの一昨日になるかな。

神から電話がきた。

俺はいつもの冗談だと思って電話をとった。

「もしもし、なんだ？」

『竜、大変だ。』

「あ？何が大変なんだよ。」

『とにかくきてくれ。』

俺は神に言われたとおり神の家に向かった。

その道中、鈴と会った。

鈴も俺と同じ道を歩いている。

「鈴、お前も神に呼ばれたのか？」

「ん？…ああ、竜。ええそうよ。あいつがあんな真剣な感じで話をもちかけるって珍しいわね。」

「真剣な感じで話をもちかけること自体少なえと思うが。」

鈴は「そう？」と言ったが、返事はしなかった。

まあ確かに最近変なことばかりおこるからな。

だが普通にしていれば真剣な話をもちかけることなど一年に一回か二回くらいだろう。

「そういえばあいつ落ちついていているようにふるまってたけど、すごい慌てたわよね。」

「そんなん全く感じなかったぜ？あとお前心理学者になってみれば？」

「嫌よ。私は私の道があるの。」

さりげなく言ってみたら即答で拒否された。
俺は神が俺達をよぶ意味を考えていた。

……。

「……なんか」

「特に必要じゃない物をなくして慌てていそうね。」

鈴が俺と同じことを考えていた。

鈴もそれに気づいたようで俺を見て微笑んでいた。

しかし俺達はこうふざけあっていただけなんだ。

本当は神がくだらない理由で俺達を呼び出すはずがない。

あいつは馬鹿だが真剣な時にしか真剣な顔をしない、真剣な時にふざけることはあるが冗談で真剣な真似をするなどありえない。

ましてや焦っているのを隠していた、これはもう真剣そのものだと確信してもよいだらう。

神の家の前にきていた。

俺と鈴は顔を合わせて同時にうなづく。

さっきまでの冗談を言い合う2人ではない。

そんな気もおきない、もし鈴がそうするなら俺は鈴を全力で殴る。

「入るぞ。」

「うん。」

インターホンを押し、ドアを開ける。

「神、俺だ。あと鈴も一緒だ。」

「……れ」

かすかに「入れ」と言ったのが聞こえた。
入ってそのまま奥の神の部屋に入る。
そこに神がいた。

「……よう。」

元気がない。

いつもうざいくらいテンションが高いがこいつは真面目な時は信じられないほどテンションが低いからな。

「で、話ってなんだ？」

「了承してくれるって期待はしてない……。」

「は？」

「なんでもねえ。」

神は咳払いする。
すぐ話にはいる。

「家に昔友達だったやつから電話がきたんだ。『よう神、久しぶりだなあ』って。」

そこまでは普通の旧友だ。

神は続ける。

「そいつとは今は険悪なんだ、あいつが転校するとき起こった事件でな。で電話の内容が『明日、全てのやつに絶望を与えようじゃねえか。もし協力してくれるなら今日夕方5時まで俺たちの秘密基地に来い』って。」

「それで？行かなきゃいい話じゃねえか？」

「んなもん放っておけるか！あいつにどれだけ恨まれてたって俺は

あいつを親友だと思ってる。だからこんなこと止めなきゃいけないに決まっているだろ!？」

「けど、それが畏かもしれない。神の……私たちの性格を考えて私たちが誘き出すための偽の内容かも。」

「嘘だつて構わねえ。友達がそんなクソみたいな考えを持っているならそれを正してやるよ。」

神の決意は固そうだった。

俺はそういう考えを持っているのは神らしいと思える。

「まったく、お前はその旧友が心底大切なんだな。」

俺たちはその秘密基地と呼ばれる場所へ向かった。

鈴の考えは正しかった。

いや、三人ともそうなるかわかっていた。

それよりも……

「敵多いな。俺が中学の時に見たやつらも数人混じってるよ。鈴、そこに箱谷いるよ。」

「あ、本当だ。私もあいつは知ってる。おゝい、箱谷元気?」

箱谷とは中学時代よく俺に絡んできたやつだ。

敵は不良ばかり、全部で100人くらいか……。

まあ俺たちが全力出せばそこらへんの不良なんて何人きても相手にならないな。

「鈴、俺とお前で突破する。神は後ろからの援護を頼む。」
「了解。」

二人が同時に了承する。

俺が能力を使い、鈴が突進する。

「竜、30秒後に真後ろ。鈴、10秒後に左右同時。」

「なんで私はそんなすぐなの!？」

神は数秒後のことを予知できる能力がある。

もつと未来を予知夢で見ることができたが、俺や鈴に会う少し前にその能力をなくしたらしい。

神が言った通り二人が鈴の左右から攻撃、鈴はそれを見ることがもせず、相手が攻撃するより先に反撃、相手は一瞬でK.O.。

鈴はそこからものすごい鬼畜っぷりを見せた。

倒した二人を持って、振り回す。

「ちよつ！」

「私はね、今苛立つてるの……。こんなんじゃ私は満足しねえ！」

本気モードに突入してしまったようだ。

久しぶりだなあ、あいつの本気。

あいつの本気モードを最後に見たのっていつだったかなあ……。

「なら俺も鈴のストレス発散の邪魔するか……。」

俺は自分の能力を発動する。

「波動圧」

俺が言葉を唱えると、不良全員が地面に叩きつけられて動かなくなった。

「ちょっと竜！」

イライラしている鈴が獲物を奪われ、怒って俺に飛びかかってきた。

「なんで私の獲物奪うのよ！」

攻撃しながら俺に怒る。

俺は鈴の休む暇ない攻撃をよけながら返答する。

「お前がイライラしていたほうがあとの強敵とあたった時に突破しやすいだろうが。」

「竜の言い分はわかった。けど私はこのイライラを今すぐにでもスツキリさせたいの。だから能力使うのやめろ！」

俺は能力を使用しながら鈴の攻撃をかわしていた。

鈴の攻撃が強くなる。

俺は力いっぱいになった分攻撃速度が遅くなった鈴の攻撃を軽々よける、これはもう能力使わなくてもよけるのではないかというくらい簡単によけた。

「いい加減夫婦喧嘩はやめにしろよ。」

「どこが夫婦だ！！！」

二人で神を殴る。

鈴はそれで怒りがおさまったようで、俺達はやっと先に進めるよう

になった。
やれやれなだめるのが面倒なヤツだ。

奥へ進むと、骸亜がいた。（俺は知らないが神がそういうので
骸亜以外にも俺らより年下の女の子がいた。）

「よう神、そちらのお二方は？」

「俺の今の親友だ。」

「そうか……………ちょうどよかった。」

骸亜が何か呟いたが、何を言ったのか聞こえなかった。

「てめえ！どうしてこんなことしようとするんだ！昔は……………あの事
が起こる前までは……………」

神が言いかけた時に神は吹っ飛んだ。

「骸亜さんを悪く言うならばくが許さない。」

少女が飛ばしたようだ。

しかし、彼女は元いた場所から一步も動いていない。

神は起き上がり、「どういことだ……………？」という顔をしている。

「あいつも超能力者なのか……………？」

「ぼくは超能力なんて使ってませんよ。これは……………」

「飛鳥、それ以上手の内を晒そうとするな。あと、怒りで我を忘れるな。」

「す、すみません、骸亜さん。」

飛鳥という少女はビクビクしだした。
骸亜はそこまで怖い存在なのか？

「神。骸亜とは私が戦う。」

「どうした？ここなら普通俺と神でいくところじゃないか？今回は喧嘩好きの血が騒いだって言っても許さねえぞ。」

「違うのよ。なぜかあの子は私にとって大切に思えるの。私はあの子を攻撃したくないの。」

知らなかったが、鈴にはロリコン属性があるようだ、虎に注意するように言っておかないと……。

「わかったよ、ロリコン。」

「誰がロリコンだ！」

「シヨタコンと神は骸亜と、」

「シヨタコンでもねえよ！！」

「俺は飛鳥と戦う。」

「無視するな！！！」と鈴が怒ったが、無視。
俺は飛鳥に向かって走る。

骸亜も俺が走り始めた瞬間に飛鳥の前へ走る。
俺は波動の能力を使い、骸亜を吹き飛ばそうとする。
しかし、骸亜に当たる前に波動弾が爆発する。

「が、骸亜さんに攻撃させません！」

飛鳥が怯えながら言う。

「竜、しゃがめー！」

神の声が聞こえる。
俺は体がかがませ、術者であると思われる飛鳥に波動弾を撃つ。
しかし撃つてすぐ爆発し、爆発したところから黒い服を着た男が床に倒れる。

「黒！」

何も無いところから真つ白な服を着た女の子が男に駆け寄る。

「大丈夫だ……、そんなにきいてない。」

「ど……どういうことだ……？」

骸亜がため息をつき、飛鳥が怯えている。
そして骸亜が飛鳥の頭にポンと手を置き、

「こいつは陰陽師の家系でな、生まれつきこの2人の式神を使うことが出来るんだ。」

「なん……だと……。」

超能力者ならぬ霊能力者だったとは……。

式神の2人は神に攻撃をしようと神に走る。

俺は波動弾を飛鳥に撃つ。

飛鳥はまともにくらい、式神の動きが鈍る。

「飛鳥！」

骸亜が叫び、飛鳥を助けに行こうとするが、俺は更に波動弾を天井に放つ。

天井が壊れはじめ、骸亜は飛鳥の元へ行けなくなる。

しかし、俺も鈴と神の2人と分かれてしまった。
そして俺の能力使用制限時間の2時間をきってしまった。
やっぱり先に不良をなぎ払うのに使わなきゃよかったな……。

「飛鳥は無事なんだろうな……。」

「どうして国を破壊しようとか言っているヤツがそんなに飛鳥にこだわる？」

「国を破壊するなんて嘘に決まっているだろ。……そうだな、俺と戦って勝てたら教えてやるよ。」

骸亜が俺に走ってくる。

俺も骸亜に向かって走り、2人同時にお互いを殴る。

俺達は吹っ飛び、お互い立ち上がった。

「どうしたあ！さっきの能力は使わないのか？」

「……生憎時間切れでね。」

先ほどのようにまた殴り合ってはお互い吹っ飛び、また立ち上がるのが続いた。

「やるな……。」

「……お互いに素手の力は互角か。」

「それだと、俺が能力使ったらお前は負けることになるぜ？」

「俺だって本来の俺ならこんなじゃない。」

それは是非本来の状態を見せてもらいたいな。

「お前と殴り合って1つわかったことがある。」

「なんだ……？」

「お前は悪いことのために俺達を呼び出したわけじゃない。」
「……………」

骸亜が黙る。

その反応からして当たり前なのだろう。

と、突然天井が崩れはじめた。

「もうそんな時間か……。」

「？」

「気にするな、俺の事情だ。時間がないから話すが、俺の目的は、飛鳥をお前らに託したいんだ。」

骸亜から聞いたのはいきなりで何を言ったのか把握するのに時間がかかった。

骸亜は続けた。

「俺はこことは別の遠くへ行く。飛鳥はついてこれないんだ。……いや、あいつは俺のそばにいてはだめなんだ。」

瓦礫が多くなり、出口をふさがじめている。

「……………飛鳥を、頼む。」

と、目の前に大きな瓦礫が落ちてきて、骸亜の姿は見えなくなった。

「行け！俺のことはいい！」

「おい！お前が言っていた遠くって死後の世界じゃねえよな！？」
「心配するな。俺もあとから行く。」

俺はその言葉を信じてここを出た。

思えば、その時使えない能力を無理やり使っても助ければよかった。

建物を出た。

外には鈴、神、飛鳥がいた。

「骸……」

「骸亜さんは無事なんですか！？」

神が言いかけたのに飛鳥がそれを押しのけて聞いてきた。

「ああ、あいつもすぐくるって……。」

そう言っていたら、建物が完全に崩れた。

骸亜はそれ以降、見なくなった。

異世界の物語（後書き）

今回は飛鳥達クロスの物語ではなく、ウラルの物語をやりました。意外に現実のネタを使うことができるので楽しかったです。

物語の交差はさらなる交差を生む。クロス

というわけでまた新しい平行世界の物語を書くわけではないです。

今回はちゃんと飛鳥の物語をします。

次回が異世界編ラストかな？

……もしかするともう一回続くかも。

氷冷飛鳥ひれいあすか 14歳

骸亜が大切にしていた少女。

陰陽師の子であり、式神の黒と白とは生まれた時からのつきあい。

性格は臆病な性格でクロスの飛鳥と違い、その性格を直していない。

またウラルへ

自分の世界に帰ってこれた。
それを理解するのに数秒かかった。

「飛鳥つち。大丈夫？」

「……」

何回鈴が呼びかけてくれているだろう。
私はずっとぼくっとしていて鈴が何を言っているのかわからなかった。

「飛鳥つち！」

「っ！……鈴？」

「ぼくっとしていたけど大丈夫？」

「う、うん。」

鈴以外に周りに符養と0がいた。
自分の今の状態を確認してみると、……今の自分の服はウラルのものだった。

「……この服……」

「一応お前は今ウラルの飛鳥だ。2人を入れ替えさせようとしたら体までついてきてしまったんだ……」

「え、どういうこと？」

0は口をおさえたが、鈴が私の手をつかみ、私を起こしながら

「0ね、空間魔法が使えるの。」

空間魔術……「指定した場所に移動する」というようなある地点Aから地点Bに瞬間移動するような魔術である。しかし、この魔術は数百年前に滅びたはずだ。鈴はそんなこと気にせずに続ける。

「すごいよね、こんな魔術使えるなら、魔術科に来ればいいのにな。」
「残念だが、俺は少ししか空間魔術を使えない。さらに言うと俺の魔力の量はお前ら魔術科の生徒の平均的な魔力量にどうあがいても届かん。俺の魔力はさっきの魔術でほとんど空だ。」

……こんな状況で思っのもなんだけど、初めて0に勝った気になれた。
起こされた私はすぐ符養に抱きつかれる。

それに少しムツとした鈴も私に抱きつき（さらにいろいろなところをベタベタと触ってきたり、頬を擦り付けてくる）、話を続ける。

「あとね、0の本名が分かったんだよ。ウリヤリュのあしゆかつちが教えてくれたんだ。えつと……『ガイア』って言うらしいんだけど、飛鳥っち二号に書いてもらった字がウラルの言葉だからわからないの。ほら。」

頬を擦り付けてくる鈴に字を見せてもらつと「骸亜」と書いてあった。
それを見て私はもう「飛鳥っち二号」にツッコむことを完全に忘れた。

「それって……。」

「……はあ……。」

0がものすごい大きなため息をつく。

「飛鳥……、もしかしてウルルでの俺の事件を聞いたのか？」

「え……あ……、……うん。ウルルの鈴から聞いた。」

「ちっ……まあ、こうなることなんて予想してなかったしな……。」

0は呆れていた。

自分も少し意味がわからない。

えっと、0と骸亜は同一人物、それに加えて0はウルルの人、だけどそれだと骸亜はウルルの私より年上だったはず……、けどそれは年齢を偽ればどうにか……。 (自分なりに苦しい言い訳だなあ) よって骸亜=0は成り立つ。

「飛鳥……どういうこと？」

私に抱きついている符養が抱きついたらまま聞いてくる。

「あ………は、話すからまずは私に体を擦り付けてくるヤツをどけてくれない？」

「……わかった。」

符養は鈴を私から引っ剥がし、それに怒った鈴は符養とじゃれあいという名の戦闘を始める。

「2人とも、家が散らかるから外でやって。」

2人は素直に外に出る。

「で、ぜろ。……うっん、骸亜。どうしてあなたはここにいるの？」

「……お前は向こうの飛鳥と違って俺にタメ口とはな。」
「だって、私とウラルの私は別人だから。」

0が苦笑する。

外で2人が暴れる音が聞こえる。

他は何も聞こえない。

「違う世界の自分自身なのに別人発言とはな。」

「だって彼女も自分の意思で動いてる。私が動かしているわけじゃないし、まずそれ以前に私は彼女に会ったことすらない。……それより話をそらさないで！なんであなたはこっちにいるの？」

「……それはもう少し後に話す。ちょうど邪魔な2人が消えたから行くぞ。」

0は私の手を握り、呪文を唱えようとする。

「ちょっと待って、どこに行くの！？それより魔力は？」

「うるさいやっだな……。こういうところはあっちと変わらねえな。」

0が何かつぶやいたが、聞こえない。

「魔力はさっきマナカプセルをのんで回復させた。帰りはお前が空間魔法を使え。」

「え！？私空間魔法使えない！」

0は無視して呪文を唱える。

「『私の残した大切なもの、そのため我戻る。パラレルジャンプ！』」

少し下手な詠唱により、また私がクロスに帰ってくるまでの空を飛ぶ感覚におそわれた。

空を飛ぶより、宙に浮いているのに何かに押しつけられている……そう、急加速したときのようなそんな感覚……と思っていれば、堅い地面の上に立っていた。

「ここって……。」

「ああ、ウルルだ。」

しかも鈴の家の前だった。

「……あれ？鈴の家を知ってるの？」

「ああ。クロスの飛鳥をまたこっちに持ってこないといけなかったからウルルの飛鳥から住所を聞いておいた。住所さえわかれば座標指定はできるからな。」

「それより、何で私がまたこっちに来なくちゃ……。」

「今の自分の体は元々誰のだ？」

「あ……。」

そういえばウルルの私だった。

Oは私の返事を聞かず、呼び鈴を押した。

……しばらくして鈴が飛び出してきた。

「骸亜！それに飛鳥。なんでここに!？」

出てくるなり、大声で叫んでいた。

私はふざけてこっちの私をイメージだけでだが真似を試してみた。

「あ、あの、骸亜さんがクロスにいて……。私嬉しかった。けど骸

亜さんがまた私をここに預けるって言っ、たッ！！」

0が私にデコピンしてきた。

「何いきなり変なことしてるんだ。もしかしてこっちの飛鳥の真似か？……全く似てないぞ。」

「そつよ飛鳥。こっちの飛鳥なら自分のことを『私』なんて言わな
いって言ったはずよ。」

痛恨のミスだった。

やっぱりアドリブ……即席でやったのが間違いだったな……。

「で、骸亜、なんであなたここに！？死んだんじゃないの？て
いうか……少し背縮んだ？」

「……………」

0は黙っていた、どうしたんだろう。

「理由はあとから話す。とりあえずまずは2人の飛鳥の体を元に戻
さないといけないから竜を呼んでくれ。」

「……………わかったわ。」

鈴は0がここにいること以外でも驚いているようだ。

私は夜の空を見上げて呟いた。

「やっぱりウラルの空もクロスと変わらないな……………」

「おい飛鳥。ここに突っ立っていても通行人に怪しまれる（特に俺
が）。中に入るぞ。」

と、私も0について鈴の家に入った。

ここを離れて1時間程しか経っていないはずなのにとても懐かしく思えた。

「骸亜さん！」

私達が鈴に連れられ、リビングに入った時に私が0を呼んだ。

……いや違う。

私が呼んだのではない、『私』が呼んだんだ。

「ぼく、また会えて嬉しいです。」

「……まだ1時間くらいしか経ってないだろ。」

「でも、また長い間会えなくなるって思っていたんです。」

そこにウラルの私が出た。

声も姿も、鏡を見ていると思えるくらい一緒だった。

「0、やっぱりその人がウラルの私？」

「そうだ。こいつがウラルの飛鳥、氷冷飛鳥だ。」

『私』が頭を下げる。

「あ、私はクロスのあなたです。」

私も自己紹介をして頭を下げる。

「よ……よろしく……です。」

見た感じ、やはり昔の私を見ているようだった。

飛鳥はどうしたことか0に寄っていき、0にしがみついた。

私が0に涙目でくっついてるようで恥ずかしい……。

それを察したか0は私を鼻で笑った。

……体が元に戻ったら私の最強の魔術で葬ってあげよ……。

「竜に連絡つけてきたわよ。」

先ほどまで竜さんに連絡をしていた鈴が部屋に入ってきた。

「ああ、助かる。」

「神は？あいつも呼んだ方がいい？」

「それはいい。あいつとは一応まだ喧嘩中だからな。」

「けど神に対して怒っているようには見えないけど？」

「ふっ……、あいつも来ると思っぜ？」

私たちは竜さんが来るまで待つことにした。

「あ……あの、ぼく……」

声がすると思っただけ振り向いたら『私』がいた。

「は、はい。なんですか……？」

「わ……わた……」

「綿？」

「……綿って、ふわふわして気持ちいいですよね！」

「……はい？」

『私』は顔を真っ赤にさせて部屋を飛び出ていった。
0も鈴も啞然としていた。

「あの子……、フワフワしたものが好きなの？」

「いや、普通くらいだったと思うが……。」

と、白けた空気にチャイムが鳴った。

「あ、竜が来たのね。」

鈴が玄関まで迎えに行った。

私と0は取り残された。

「……………」

「……………」

お互い沈黙が続いた。

「ねえ、ぜろ。」

「……………なんだ？」

「行きの時言ったと思うけど私、空間魔術使えない。」

「帰りに教える。」

私は少し0に腹が立った。

この人はさっきも後にと行ってその場で教えてくれなかった。

「そういえばなんで同じ体のようなものなのに私とウラルの私の体を戻そうとするの？」

「今のお前はウラルの人間のようなもんだ。ウラルの人間は魔力を持たない。だから今お前は魔術を使えない。魔術が使いたくないなら話は別だかな。」

「ならなんでその話を今話すの！？行く前に話して私が了承してから行くとか考えないの？」

「お前なら頷くだろ。飛鳥と長年一緒にいたんだ。」

私はそれで今まで溜まっていた怒りが爆発した。

「だから私はこっちの私と違うって言ったでしょ！」

「……うるさいやつだ。違う世界の同じ人間なんだ。考えは似たようなものだろ。」

「……お前、こっちの私にも同じこと思ってるの？」

「フツ……思っているわけないだろ。お前以外に思えるやつなんていない。」

こいつに対してものすごく怒っているが、今の私の体じゃ返り討ちになってしまう。

私は今の自分の無力さに涙が出てくる。

「どうした？魔術は使えず剣もない、頼りの精霊……今は式神だな。まあそいつらは俺に攻撃してこないように飛鳥が言いつけてある。そんな状態のお前が俺にどう攻撃する？俺は剣はないが武術がある。同じ丸腰でも体得しているものでこつちも差が出るんだな。」

「……それでも私はお前に一発入れることくらいはできる。」

「ならこいよ。」

私が一歩踏み出した瞬間

「やめてください。」

「飛鳥」が0の前に立っていた。

「骸亜さんにはぼくが攻撃させません。どうしても闘いたいなら、ぼくを倒してからにしてください。」

「飛鳥」は闘う気だった。

0をかばう「私」を見た時、私は自分の体が「飛鳥」の体だと改めて気づく。
もしこのまま私が0に返り討ちになって怪我したら、その後痛みを背負うのは「飛鳥」なんだ。

「なんか飛鳥すごい叫んでたみたいだけどどうしたの？」

そこに鈴が竜さんと神を連れて入ってきた。

竜さんと神はそこに0……骸亜がいるのを見て驚いていた。

「何でもない。こいつが体が元に戻る嬉しさのあまり発狂していただけだ。」

「そうなんだ……。」

鈴が引いた目で私を見てくる。

「鈴、誤解なの！0が勝手についた嘘なの。」

……と言いたかったが、話がややこしくなるためこのままにした。

「……飛鳥。」

0が呼ぶ。

私はこいつにどう一発入れようか考えながら0に近づく。

0は私の頭に手をのせ、

「さつきは言い過ぎた。確かにお前の言うとおり、同じヤツらでも考えは違つかもな。……俺みたいに。」

「う……うん？」

最後に0が言った言葉が聞こえなかったが、私の中の0に対する怒りは治まっていた。

「おい、骸亜。」

神が0のところに来ていた。

「お前死んだんじゃないのか？どうしてそっちの飛鳥と同じ世界の人間ってことになってる。」

骸亜に質問する神の顔は、昼間見たふざけている人物と別人に見えた。

「……まあ全員揃ったから言ってもいいか。」

みんなが0に注目し、0が話し出す。

「俺の本名は『骸亜』だ。だが、ウラルの氷冷骸亜でもある。そして俺の生まれはクロスであり、ウラルでもある。」

みんなの頭に「？」が浮かんでいた。

またウラルへ（後書き）

今回で異世界編終わらせるつもりでしたのに、グダグダと続いて終われませんでした……。

最後、ギャグみたくなりましたが、ギャグではありません。
ちゃんと0も自分も真剣です。

次回いよいよクライマックス！

みなさん、ハンカチの用意は……いらなかな？

水星 虎たいが 雷牙らいが

中学2年生

竜の妹と弟で雷牙の方が兄。

2人共クロスクロスの飛鳥トビと親友である。
よく竜リウにいたずらをする。

ぼくと私

……正直骸亜以外全く声が出なかった。
それに気づかないのか骸亜は話を続けようとする。

「俺は……」

「ちょっと待て。」

神が止める。

「いきなり電波なこと言われて混乱してるのにそこから続けられると余計わからねえよ。」

「そついうと思つて今からそのこと説明してやるつと思つたんだがな……。」

「確認してからにしろ。説明入れられても混乱してる頭じゃ頭に入らん。」

骸亜は少し黙った。

そして少し黙つたあと

「もう頭は整理できたか？」

全員が頷いた。

もちろん私も。

とはいっても神が言ってくれなかったらまだ混乱していただろう。

「続きを話す。俺はこの世にごく稀な異世界の自分と全てを共有してしまふんだ。」

……やっぱり意味がわからなかった。

私は……私達はまた説明があると思って声を出さなかった。

「つまりだ。俺は記憶、感覚、体、意識を共有したんだ。記憶から始まり、最終的には意識を共有する。」

「その共有はいつから始まったんだ？」

「書物を見た限り人によつて共有し始める時期も進行スピードも違ふみたいだが、俺は……俺達とは言った方がいいのかな。神、お前と喧嘩して俺が引越したくらいからだ。ちょうど一年半前か。その時に『二人』の記憶が一気に流れてきた。記憶を共有って言うてもわからないと思うが感覚的には見たものが二つあるんだよ。ウラルの飛鳥と話しているのとクロスの飛鳥と話しているのが見えていた。始めは時々ウラルの飛鳥に話さないけなことをクロスの飛鳥に話していたことも逆もあったな……。」

骸亜が懐かしそうにしていた。

私も一年半前の骸亜……0を思い出した。

そのとき実際によく会話になっていなかった気がする。

骸亜は続けた。

「実際に声を聞いたはずがないのにそいつの言ったことや声を知っていて、実際に食べてないのに味を知っていて、殴られてないのに痛みを知っている……。複雑な気持ち、いや、気持ち悪かったな。次に感覚がそうなって……。」

骸亜の話は長かった。

説明だけでも長いのに途中昔話までして余計長くなった。

昔話の時はウラルの私以外は少しイライラしながら聞いていた。

まあ結論を言うところの骸亜はクロスとウラルの2人の骸亜が融合し

た状態で、その体の融合が1ヶ月前……私がヒラブル役所を破壊した直後くらいに起こって、1週間前に完全な融合を果たした、……という感じだろうか？

「以上だ。何か質問は？」

「長い。」

神が手を上げて皆の意見をまとめて言った。

「ああ、それはすまん。途中脱線したりしてな。」

「……あ、そういえばだが、」

竜が手を上げる。

「骸亜、どうしてお前は俺の能力のことに知っている。確かに飛鳥にこの能力のことを話したし、実際に使用しているところも見ている。だがお前は飛鳥から聞いたにしては行動が早すぎる。お前はまるで以前から俺の能力について全部知っているみたいなんだよ。」

そう言われればそうかもしれない。

骸亜が知ったのは多分今日の昼休みくらいだろう。

なんとなくそんな気がする。

昼に竜の能力について知ってその夜実行するためにここにくるのはいくらなんでも早すぎる。

骸亜は

「調べたんだよ。無いと思いがらクロスでな。………すぐく見つけたよ。まあ見つけたのは類似した内容だったけどな。」

骸亜は少し疲れたというような顔をした。
私は竜の力について無知といえるほどなので周りのみんなと同じように真剣な顔があまりできなかった。
骸亜は竜に近づき、

「実はな……………」

骸亜が竜の耳に囁く。

竜はそのことを聞き、驚いていた。

横を見ると鈴が少し顔を赤らめていた。

そのときに困惑している「私」をみつけた。

竜は骸亜と話し始め、鈴も神と何か話している。

私はさつき二人が何を想像しているのか疑問に思いながらもソファに座って一人クロスにいる符養や鈴のことを考えていた。

「あの……………」

急に話しかけられて体がビクツとする。

声のした方を振り向くと、「私」がいた。

「な、何？」

「ちよつと違和感を覚えて……………」

「????？」

飛鳥は私が意味不明だとわかったのか慌てて説明した。

「すみません。『ぼく』なのにぼくと全く似てなかったから……………」

ああ、なるほど。

……………確かに今の私は彼女と違うと思う。

私は彼女に微笑みながら、彼女に言った。

「私も1ヶ月前まではあなたみたいだった。けど、私の親友が私を……ぼくを変えてくれたの。」

「……親友？もしかして鈴さん？」

「そう、あつちの鈴。あの人が『堅苦しい』っていうわがままで一人称も丁寧口調もやめさせられたの。」

「そういえばぼくも言われました。」

飛鳥は苦笑いをする。

飛鳥に苦笑いを浮かばせる鈴に私は若干だが呆れる。
しかしどこか飛鳥は羨ましそうだった。

「けど羨ましいです。ぼく……わ、私もあんな日常すごしてみたいです。」

「意外と馴れるとつまらない……むしろ大変だよ？モンスターとかと戦わないといけないし。」

「ですけど羨ましいです。明るい性格の私がいって、鈴さんや骸亜さん達とクラスメイトとして対等に話せる、そんな世界……。」

たしかにこっちの世界の私からみたら私の立場って羨ましいのかな？
どっちかっていうと私はこっちの世界の方が羨ましいと思えるんだ
けどなあ、やっぱり……。

「ぼ……私もそんな風になりたいなあ。」

「……一緒なんだ。」

飛鳥の頭の上から？マークが浮かび上がる。

「……あ、ごめん。多分なれると思うよ。私達は元々の性格も中身

も似ているんだからさ。」

「え？あ、はい。」

「ほら、そこも堅苦しい。」

「あ、ごめんなさ……ごめん。」

……私にやらせると言葉が乱暴になるといつか、敬語というもの自体ができなくなりそうというか……。後のことは鈴に事情を話してきっちり指導してもらった方がいいだろう。

私の喋り方がこうなったのもあつちの鈴のせいだから同じ成果が期待できるだろう。

こっちの鈴はお嬢様だからもしかすると今の私より数段きれいな言葉遣いになるかもしれない。

「話は終わったか？」

後ろを振り向くと骸亜が目の前に立っていた。

もしかしてと思い、周りを見ると鈴や神、竜もいた。

どうやら話を聞かれていたようで、

「飛鳥、あなたは今の喋り方でも十分だと思うけど？」

「あ……あ、あ…鈴さん……。」

話を聞かれていたのがよっぽど恥ずかしかったのか（まあ私も恥ずかしいのだが）飛鳥は顔を真っ赤にして言葉にならない何かを発していた。

私はその飛鳥をひとまず置いて（骸亜にでも任せておこうかな）、鈴を捕まえ、少し離れたところに連れていった。

「鈴、言い過ぎじゃない？」

「私はただ飛鳥はあのままで良いって思ったから……。」
「けど彼女が明確な意思表示をしたんだよ？参考にならないかもしれないよ。私がああ状態だった時はあんな風に意思表示した記憶はないよ。いつも人の意見に従うだけだった。」
「……うん、言われてみればあの子も自分の意見を積極的に言ったことなんてなかったかも。」

鈴は賛成してくれた。

「で？私を説得したのは何か理由があったからじゃないの？」
「それはね……。」

私は鈴に飛鳥の喋り方、性格を変えるように頼み、その理由まで全てを話した。
その本人のところをチラッとみたら、予想通り骸亜に対処されていた。

「わかったわ。絶対向こうの私より行儀の良い飛鳥を育てるんだから。」
「ははは……。せめてゲーム感覚でやるのだけはやめてあけてほしいな。」

話も終わったことだし鈴に戻ろうと提案する。

鈴もOKしてくれて戻るとちょうど飛鳥が立ち直っていたところだった。

「おお、話は済んだのか？」
「ええ。早速本題を進めましょ。」

本題と言われて一瞬何かと思ったがよく思い出してみたら、まだ元

の体に戻っていないと気づいた。

骸亜は飛鳥を竜の前に移動させていた。

私も行かなければいけないと思ったので行く。

「よし、竜はじめてくれ。」

竜が頷き、そして私と飛鳥に手を置いた。

「『イタズラ好きな魂を司る双子の悪魔、飛鳥と飛鳥、二人の魂を入れ替えよ。』」

一瞬体の感覚がなくなり、ふわふわした感覚だけがあったが、すぐに感覚が体に馴染むような感じがした。

そして、体から魔力がみなぎるのを感じ、やっと私は元の体に戻れたのだと思った。

「竜、さっきのあれは魔術？それとも召喚術？」

さっきまで飛鳥だったためか竜は少し戸惑っていたがすぐに落ち着いてたようでした。

「い、いや、あれは俺の能力だ。俺は体に悪魔を宿している。それ以上は俺もうまく説明できないんだ。」

「飛鳥、」

背後から骸亜が話しかけてきた、いい加減背後から話しかけてくるのをやめてほしい。

「あのさ……」

「今から空間魔術の方法を教える。」

いきなり言われた。

確かに教えられないと帰れないが、いくらなんでもいきなりすぎる。しかし、それが0だと諦める。

多分、骸亜も別れがづらいだろうし。

「……………どういうやり方なの？普通の魔術とは違うの？」

「ああ、だがいたってシンプルだ。空間座標……………まあ住所でもいいか。それを術式にウラルの言葉で組めばいいだけだ。」

「え……………？」

ウラルの言葉って……………私漢字ってやつをまだ完全に覚えてない。

しかも読むことはできるけど書いたことなんてない。

「大丈夫だ。ここにはウラルの言葉を知っているやつばかりだ。

まず俺がお前の家の住所を紙に書いてやるからそれで術式を組め。」

骸亜が紙に文字を書き私は骸亜の手を持つ。

私は骸亜からもらった紙を見て術式を組もうとする。が、ある声に遮られた。

「待ってください。」

飛鳥だった。

「あの……………その……………ありがとうございました。あなたがいなかったら多分変われなかったと思います。」

「かもね。けど、私とあなたは同じ『飛鳥』なんだから敬語なんておかしいよ。自分に敬語って変でしょ？」

あう……………と言ったとき飛鳥は何も話せなかったみたいだった。

「骸亜、今度こつち来たらまたあの日のリターンマッチといこうぜ。お前、本気出してなかつたら？」

「武闘家の技を使わせると絶対にお前は俺に一発当てられないぞ。」

「なら、こつちは神と鈴を加えていいか？」

「……そうすると飛鳥がこつちに加わるぞ。」

骸亜も竜と別れの話をしていたようだった。

「飛鳥、ありがとね。あなたがいなくなったらあの子に養子のお話をする勇気が出なかつたと思うわ。」

「ふふ、なんかもう会えないみたいない方だね。またいつか遊びに来るしそれかクロスと一緒にいこう。あつちの鈴とも会わせたいし。」

各々別れの言葉を交わした。

そして骸亜からもらった紙……紙を……

「どつした？」

「紙……無くした……。」

骸亜が頭に手を当てる。

骸亜は仕方なく新たに紙に住所を書き、それを鈴に渡す。

次に紙に住所を書いて私に渡す。

「鈴、それが飛鳥のうちの住所だ。いつか来る時にでもそれを見て来ればいい。飛鳥、術式できたか？」

「あ、うん。」

私は術式を組み、術を発動させる。

「『空間を超越する魔力よ、我らをその魔力で飛ばせん。　　デイ
メンション！』」

横を見ると、飛鳥が私にか骸亜にかわらないが微笑んでいた。
しかし一瞬だった。

私達は空間を飛んでいた。

私は骸亜の手を握っていたが、骸亜は私の手を離した。

「ぜろ！」

「ここらへんなら俺は自分の家に着ける。心配なら明日学校で俺の
クラスに來い。」

私はそんなつもりはなかった。

だって0を信じてるから。

やっと地に足がつく。

そこで私が見たのは取っ組み合いをしている符養と鈴だった。

私はやっぱりあの鈴と似ても似つかないと思う。

けど、ここが私の帰る場所なんだよね。

この日常が私の普通なんだ。

ぼくと私（後書き）

祝一周年！今まで読んでくれてありがとうございますm（　　）m

今回で異世界編完結です。

ですが、いつかウラル飛鳥やその他ウラルの人物のその後の物語を書きたいと思っております。

今回は骸亜についてでも

骸亜^{がいあ}

ウラルの骸亜とクロスの0が一人の人間になった状態。

今は二人の体だけでなく、精神も一つになり、完全に一人となった。現在クロスの0の家に住み、武闘家科四年である。

テスト準備1

「飛鳥、契約して。」

「……は？」

あの異世界へ飛ばされる事件から一週間が経っていた。

あの事件の次の日には何事もなかったかのようにサン・ルナの修行があった。

今、私達は鉄のおじさんから武器を受け取りに武器屋に向かっている途中である。

「ふ、フー？いきなり何言い出すの？」

「飛鳥が学校に行ったら離ればなれになる……。」

「そうだけど？」

「……私が飛鳥を守れなくなる。」

「う、うん……。」

「……飛鳥、契約して。」

「ちよつと待って、そこからどう考えたらそうなるのかわからない。そもそも契約って何？」

符養は「やっぱり飛鳥を守らないといけない」という顔をしている。私のさっきの言葉からどこをどう巡ったらああいう結論になるのだろうか？

「……飛鳥は鈍感。」

「まあ敏感な方ではないことは自覚してる。」

「契約の意味もわかってないの？」

「……もしかとは思っていたけど……？」

「……そう。結婚。」

……まさかのポケに入ったよ。
しかも符養は顔を赤らめてる。
この子のことだから本気ってこともありえるが……。
しかし、出会って二週間ちよつとの人間に求婚するか？

「……符養、私にはそんな趣味ないからね。」

「……わかってる。冗談。」

ホツとする。

やっぱり符養にはそんな趣味ないよね。

「……というのも嘘。」

……前言撤回。

彼女はしばらくの間家に入らせないようにしないと。
というよりこの子私がウラルから帰ってきたあとからなんかおかしい。

鈴とも仲がよくなってるし、2人の間に何があったのだろうか？

「符養、これ以上ふざけると怒るよ？」

「……ごめん。」

「別にふざけるのはいいけど……鈴になにか吹き込まれた？」

「……うん。」

この子が素直な子でよかった。

今度鈴に会ったら精霊を憑依させて自分の最大級の魔術をお見舞いしてあげようかな。

「……けどさっきのは鈴に関係ない。ただ鈴の家で読んだ本に書い

てあつただけ。」

最近符養が鈴の家によく遊びに行くのは読書するためだったのか。私を読む物は大抵学校の図書館とかそういうところになく買えない本だったからなあ。

……それにしても鈴、あなた家にどついう本を持つてるの？

「まあ、うちにはあんまり本が無いから、フーが欲しいんだつたら今度買ってあげるよ。」

「うん……。」

鉄のおじさんの店に着くまで符養は自分が買いたい本のことをずっと話していた。

符養が話している本の量を聞くと帰りには両手いっぱい本を抱えて帰ることになりそうだった。

とにかく、おじさんの店に入ると鉄のおじさんが剣を鍛えているところだった。

「おお、来たか嬢ちゃんたち。」

「あれ？もう剣はできたつて言つてませんでした？」

「ああ、これは嬢ちゃん用の杖だ。」

「杖？」

確かによく見てみると剣ではなく杖だ。

しかしほとんど剣といつてもいいくらいだった。

「今度テストがあるだろ？それでの実技試験で使うものだ。ほら、

嬢ちゃんは魔術科だが武器が杖じゃないだろ？」

私はこの年から剣士科から魔術科に転向したので武器も使い慣れている剣である。

鉄のおじさんはニヤっとしながら続ける。

「魔術科のテストで剣は使っちゃならねえ。だからお前さん専用の杖を作っているってわけだ。剣としても使えるんだから使いやすいと思うぜ。」

「なら、もうできてるって言った剣はいらないんじゃないですか？」

「俺もそう考えたさ。だがこの杖は剣としてはちょっと使いづらくてな。だから普段はそこにある剣を使っしてほしいんだ。」

おじさんが指差した方を見ると、剣がおいてあった。

私たちはその剣を取って使い心地を確かめようとする。

しかし剣に触れた瞬間、私は確かめる必要が無いと思った。

この剣は私ととても相性の良い。

符養をみて見ると、彼女も同じ反応をしていたからきっと彼女にも使いやすい剣だったのだろう。

「使いやすいとすぐにわかったろ。」

おじさんが私たちの反応をわかっていたかのように話す。

「それは嬢ちゃんたちの剣を見て、二人と相性の良いような剣を考えて鍛えた剣だからな。そんな反応じゃなかったら俺が驚いているよ。」

「やっぱり、おじさんってプロなんだ……。」

「……おい、若干遠回しに失礼なこと言わなかったか？」

「だ、だって初めて会ったはずの符養が使いやすい武器を作るなん

て刀匠と呼ぶ以外ないですよ。」

「へっ。おだてたつて何も出ねえぞ？ここに初めて来る客が武器を修理してほしいとか武器を作ってほしいとかの注文なんかがよくくるからな。」

私はただただ感心する以外なかった。

私と符養はおじさんの作業が終わるまで店の裏で新しい武器を試すことにした。

それをおじさんに言うと、

「ああ、なら地下の訓練所でやってくれ。そこならお前ら以外にも人がいるから良い練習になるだろ。」

それに私は驚いた。

「え？おじさん、道場とかやっているんですか？」

「違えよ。そこにいるのはお前らと一緒に俺の客だ。新しい武器が欲しいとか装備の強化・修理といういろんな注文があるんだが、今嬢ちゃんの杖の製作が大変だから順番待ちになってるんだよ。……まあ俺が杖作りが得意じゃないのも遅い理由だな。」

その言葉どおり、おじさんの店はほとんど剣や防具ばかりで杖は取り扱っていない。

剣みたいな杖だからかよけいに製作が困難になっているのだろう。

「ならお言葉に甘えて。」

私達は地下への階段を降りる。

すると途中で符養が

「……飛鳥、さっきの話の続き。」

「え？なんだっけ？」

「……………」

また符養に呆れられた。

しかし符養に呆れられたというデジャブのおかげで彼女が言いたいことを理解した。

「思い出した。フーと契約してほしいってことだったよね？」

「……………。(コクン)」

符養が無言で頷く。

私は別に彼女が契約してほしいと言ったのを忘れていたわけではない。

ただ、その後の冗談でそのことも嘘だと思っていたただけだ。だが自分としてはさっき思い出した本を買うことの話をしてほしかった。

「……………で、フーはどういう契約をしてほしいの？」

「こ…婚や……………」

私は言い切る前に無言で、しかも無表情、無詠唱でフレアを放った。至近距離で魔術を撃たれた符養は放たれる前に回避体制をとって私の至近攻撃を見事に回避した。

「飛鳥！さっきのは危ないじゃん！」

符養が自分の感情を出していた。

彼女も自分の感情が表に出たのに気づき、慌てて自分の感情を押し殺す。

だが、今の自分はそんなことに驚いて手を止める気はない。
私は次の魔術の準備をしながら

「符養、冗談はやめなさいって言ってるよね？これ以上やると本題の方も却下するよ？」

「……………ごめんなさい。」

『おい、そんなところでケンカとかすんなよ！？やるなら地下でやれ。』

上からおじさんの声が聞こえてきた。

私は冷静になり、符養に改めて聞く。

「で？本当に契約ってどういうこと？」

「……………うん。飛鳥改めて言うね。」

符養は落ち着いているように見えて、落ち着いていなかった。
その証拠にまた自分の感情を殺すことができいなかった。
まあ私はその方が可愛くていいと思うけど。

「飛鳥、私と召喚契約して。」

「……………え？」

あまりの突然のことにはじめて契約してと言われた時のような顔になっっていた。

だが、さっきの言葉でその時に符養が「守らないと」という顔をしていた理由を理解した。

「……………」

私は頭を整理するために黙った。

符養が黙っている私を見て不安そうにしている。

ようやく整理し終えた私は、符養に話を聞く。

「大体予想はできてるけど、どうして召喚契約したいの？」

「飛鳥を守りたいから。」

いつもの「……」というもなく、即答された。

符養は続ける。

「……飛鳥を守りたい。あなたが学校にいるとき私達は離れ離れ。

その時がすごい心配。だからいつでも私を喚べるように。」

「……」

「……だから契約して。」

私は迷った。

符養の理由を聞いて私は召喚契約を交わしてあげたいとは思ったのだが、今まで人と召喚契約を交わしたということを知ったことない。

「……ごめん、少し考える時間をお願い。」

今度琴葉あたりに聞いてから考えて符養と契約をするか決めよう。

しかし今の符養は、先ほどの言葉で契約を断られたと思ったのかひどく落ち込んでいた。

「……フー。」

「何？」

「私はあなたと契約したくないわけじゃないよ。」

「……ならどうして？」

「……ごめん、それは言えない。言ったらフーを傷つけると思うか

ら。」

なんとなくそう思った。

符養はまた落ち込んでいた。

……私は一体どうすればいいのだろうか？

まあそんな話をしても進まないの、私達は地下へ降りた。

そこにはいろんな人たちが各々いろんな人たちと手合わせしていた。私は長年おじさんの店に通っていたが、こんな地下施設があるとは思わなかったの、このスケールをみて改めて驚く。

と、感銘を受けていると遠くから聞きなれた声が聞こえてきた。

「あ、飛鳥つちだ。」

声がる方向と逆の方へ行こうとする。

「何で逃げるのさあ。」

「フー、今はあの変な人と関わってはいけないよ？」

「……？」

声の主は私を追いかけながら詠唱を唱え始める。

私もそれを迎撃するために詠唱を始める。

「『魔力でできた鎖、我の意思に従い我の支持する者を捕らえよ
バインド！』」

「『聖なる盾、全てを跳ね返せる盾、我を守る強靱な盾よ、今我を
襲うものを跳ね返せ！ リフレクトシールド！』」

鎖が飛んでくるが、私が出した盾で跳ね返す。

そして魔術を出した本人に鎖が巻きつき、術者自身が捕らえられた。私は完全に動けないのを確認すると、彼女の元へ歩み寄った。

「……声かけただけでいきなり逃げて、そのうえ私を捕まえるってどういうこと？」

「鈴は絶対私やフーに飛びついてくるじゃん。あと、捕まえられたのは自分が魔術を出したからでしょ？私はそれを守っただけ。言うなれば正当防衛よ。」

「ぶー。」

私は仕方ないので鈴の鎖を解除してあげた。解放された鈴は起き上がりながら、

「飛鳥つちはどうしてここにいるの？」

「鉄のおじさんが今私のために杖を作ってて、それを待っているところ。ちょうど新しい武器も手に入ってそれを試すのも兼ねてただけ。鈴は？」

「私？私も上の魔術武具店で買った新しい杖を試すためだよ。」

魔術武具店？と思ったが、すぐにその驚きは納得に変わった。私達が降りてきた階段以外にも階段があったのだ。

つまり、ここはいろいろな武器屋が競合して造った新しい武器を試す施設なのだ。

「飛鳥つち、手合わせしてくれない？」

「え？いいけどフーが……。」

「あれ？飛鳥じゃん。」

声が出た方を向くと、琴葉がいた。

琴葉も武器を新調しに来たのだろうか？

「何？飛鳥の新しい武器今日できたの？」

「うん。これすごい私に合うんだよ。」

「使ったの？」

「ううん、はじめてこれに触った瞬間感じたの。」

「へえ。そういう風を感じるってことはその武器を作った人、すごい腕のいい人なのね。」

改めて私はおじさんがすごい人だと知った。とそのとき、私はとあることを思い出した。

「琴葉、ちよつと話があるんだけど。」

「？ 何？」

「ちよつと召喚に関することなんだけど。」

「召喚」という言葉を聞いて、符養がハツとした。

しかしそのことは私だけが気づいたようで、他は何の反応もしていなかった。

「だからちよつと向こうで話せない？」

「え？うん。いいけど？」

「飛鳥つち！私との手合わせはどうするんだよ！」

「ちよつと戻ってくるまでフーとやってて。フー、いいよね？」

符養は無言でうなづいた。

しかしその顔は他の人には無表情にも見えるだろうが、嬉しそうに見えた。

私と琴葉は人が少ないところへ来た。

「で？話って何？召喚のことなんでしょ？」

「……うん。フーが私と召喚契約して欲しいって言ったの。」

「符養が！？けど人との契約なんて聞いたこと……。」

「うん。それについて聞こうと思ったの。契約法に人と契約してはいけないとか書いてあるの？それか人と契約したら何か人体に影響とかあるの？」

契約法とは召喚契約するためのルールみたいなものである。

琴葉は思いつめたような表情で言った。

「前者は何にも書かれていないはずよ。多分人と契約するなんて考えてなかったと思うから。後者については私からは何も言えない。前例が無いもの。もし契約するなら符養に何かしら影響があると思つて。運が悪いと彼女、死ぬわよ。」

私はそれを聞いて覚悟が揺らいだ。

もし、契約をして符養を喚んだ場合、符養が死ぬかもしれないという不安が起こった。

琴葉はそんな私を見て私をフォローしてくれるようにこう言った。

「さっき言ったことは私の考えだし、確立は低いと思うわ。もしそんなことが起こるなら他の召喚獣にもあるはずだから。彼らも生き物だもの。」

「……本当？」

私が出した声は涙声だった。

しかも涙目だった。

「うん。」

「琴葉、変な心配させてごめん。」

「いいわよ。私も力になれなくてごめん。」

「じゃあ、戻ろっか。」

テスト〜準備1〜（後書き）

今回からは結構長い話になると思います。

「なると思う」「というのは自分が面倒くさがって、短くしてしまいそうだからです。

そんなこと絶対にさせませんけどね。

さて、今回の話ですが、いよいよ来ましたよテスト。

一年やってやっとテスト……いいですね〜一年以上の間があつてのテストって……。

自分もそんな学生生活を送ってみたいです。

とはいえストーリー上では新学年から一ヶ月ですから現実でいう中間テストみたいなものになると思ってますけどね。

まあですけどこの学校では年に三回程しかテストをしません。

理由は単純で細かくやっても生徒の戦闘力なんてそんな短期間で伸びるわけないからだそうです。

だからって今回テストの話をして、さらにいつかまたテスト回をやるというわけではないです。

なんかいつもより長くなりましたね。

今回はこれにて

テスト準備2

私は符養たちの下へ戻る途中に琴葉からこう言われた。

「飛鳥、せつかくここに来たんだから私と戦わない？」

「でも私、先に鈴と手合わせする約束してるし……。」

「うーん、そうかあ……。……ならさ、符養もいることだし2VS2のタッグマッチしない？」

「いいけど私と手合わせしたい琴葉と鈴で組むことになるけど？知り合ったばかりなのに大丈夫？」

「あー、あの人ね。それはちょっと厳しいかも。あの人自由人っぽいからさ。」

わかる、と思った。

あの方は自由すぎて呆れるほどの自由人だ。

「なら1人ずつ私と戦る？」

「ううん、大丈夫。あの人魔術科トップの鈴でしょ？なら頭良いしうまく作戦をたててくれるでしょ。」

そういう話をして私達は残った2人のところへ戻った。

手合わせしていた鈴と符養は互角……鈴の方が少し上くらいの戦いで、鈴の魔術を符養は避けて間合いをつめて斬りつける。

鈴はそれを当たってるんじゃないかと思うくらいストレスでかわし、かわしながら詠唱した下級魔術を符養に当てた。

当たった符養は後ろに吹き飛ばされ、倒れたがすぐ起き上がる。

そして符養も術と術の合間が全く無いくらいの早さで魔術を連発す

る。

しかし鈴は防御魔術で防御した。

……そこで私が止めた。

「はい、そこまで。2人とも良い戦いだったよ。」

「……飛鳥。」

「あ、飛鳥っち。短時間だったはずなのにすごい疲れたよ。」

「……鈴が本気できたから私も全力で戦うしかなかった。」

「私も少しでも手を抜いたら負けるって思ったもん。あゝ、もう動けん！」

と言って鈴は床に仰向けになった。

私は鈴と符養に回復魔術を使いながら

「なら私との手合わせやめる？」

「やる。」

「わかった。」

私は鈴と符養に手合わせの方式を伝える。

鈴と符養はすぐに了承し、鈴は早速琴葉と作戦会議を始めた。

「そつえば」

ふと疑問に思う。

「剣とかで人を斬っても大丈夫なの？」

「ああそれはね」

作戦会議中の鈴が会議を一時中断して話す。

「ここは特殊な魔法で武器や魔術の威力を弱めてるの。だから人体を真つ二つに斬るくらい威力でも軽傷ですむし、ここでの最悪の怪我は骨折だつて言われてるの。」
「へえ。」

私は感心するしかなかった。
会議が中断される隙を狙っていたのか琴葉が私に耳打ちした。

「飛鳥、あなた精霊は使うの？あと鈴はそのこと知ってるの？あなたの対策で精霊をのこと全く話さないけど。」

「ごめん、話してない。こういうことはあんまり人に話したくないの。精霊サモナーを使える召喚士なんてすごい珍しいから。だから人前では私は使わない。」

「わかった。なら私もグランは使わない。」
と言つて2人はまた作戦会議に入った。

「……飛鳥、私達は？」

「とりあえず、琴葉から助言もらつて人と召喚契約しても大丈夫つてわかつた……多分だけどね、から召喚契約しよつか。」

それを聞いて符養の表情が一気に明るくなった。
私は召喚契約の準備をして符養と契約を結ぶ。

「『符養、マスター汝を契約者飛鳥と契約させ、マスター契約者を守れ。』」
「絶対にこの約束を破らない。」

符養が私と手を合わせ、魔法陣が出現し、すぐに消えた。
私と手を合わせている符養の手は私の手を強く握っていた。

そこまで私と契約したのが嬉しかったのだろう。

「符養」

「何？」

「人を召喚することは前例がないみたいだから、もし体調が悪くなったりしたら言っただけ。……それは普通の生活の上でもか。」
「うん、わかった。」

無口な少女は私に満面の笑みで微笑む。

その笑顔に私は少しドキツとした。

「お熱いねえ。」

その言葉に振り返ると、鈴と琴葉がニヤニヤしていた。

「もう2人とも結婚しちゃいなよ。」

「私にそっちの趣味はないから！」

「わかってるって。冗談、冗談。」

呆れながら横の符養を見たら、彼女は顔を赤らめていた。

……この子、ここへ来る前のあの言葉はまんざら嘘でもなかったな。

「それじゃあ、開始しましょうか。」

その言葉を琴葉が言い終えた瞬間、鈴が魔術を放ってきた。

「『大気に渦巻く風の竜巻、その風は刃と変わり人々を切り裂かん
トルネード！』」

「フー、後ろに下がって。『邪悪な闇よ、仇なす者を闇に飲み込め
！！』
ダークゾーン』」

闇へと続く穴は竜巻を全て飲み込む。
竜巻が消えた瞬間に琴葉のムシヤが私に切りかかる。
しかし同時に符養も駆けていた。

「…………『アイシア』。…………『氷月閃』」

氷の魔術を自身の剣に込め、その氷をまとった斬撃を放つ。
ムシヤはそれをくらい、よろめく。
そこに私が剣で斬りつける。

「『刹爪』」
せつそう

居合い斬りなのだが、一回の居合いで五回斬れその斬れは獣が爪で
切り裂いたようにも見えた。
それをノーガードで受けたムシヤはダウン。

「『バインド』」

しかしその隙をみた鈴が私に拘束魔術をかけようとする。
が、それにいち早く気づいた符養が身代わりになる。

「フリー！」

「私の心配はいい。それより他の攻撃が来る。」

次の瞬間ゴーレムのパンチが私にくる。

私はとっさに避けようとしたが、反応が遅かったため避けきれな
かった。

私は二、三回地面に叩きつけられながら十数メートル飛ばされた。
私は痛い体を起こし、立ち上がる。

追撃はこない。

「……」

私は状況を確認する。

符養は捕らえられ、実質2対1。

多分琴葉が召喚獣で引きつけて鈴が魔術で攻撃するとかそういう作戦だろう。

しかし鈴のことだ、他に作戦を練っているだろう。

だがそんなことを考えている暇はない。

「『異空間の門、敵を捕らえ異空間へ閉じ込めよ。ゲート』」

何も無いところから扉が開き、琴葉のゴーレムを扉の中へ吸い込んだ。

「な!?!」

「何?これ?」

2人が困惑する。

無理もないだろう。

これは空間魔術、つまり2人はこれについては無知に等しいのでオリジナル魔術が使われた時よりどういう魔術かというものが判断するのに時間がかかるのだ。

私はその隙を狙って更に魔術を唱える。

「『ネガティブボール』」

スプリチュアルストーン

精霊石の効果を使って詠唱破棄で魔術を放つ。

私の剣に使われた精霊石は闇属性と光属性を持っているようで、私

の得意な光と闇の魔術なら詠唱破棄で唱えられる。だが普通に詠唱したほうが威力は高い、しかし隙は一瞬だから詠唱する暇などない。

闇に染まった漆黒の玉が私の前から放たれ、鈴達の目の前で爆発した。

2人とも吹き飛ばされ別々に飛ぶ。

私は更に詠唱をするが今度は魔術ではない。

「『^{マスター}契約者飛鳥が命ずる。我と協力し、敵を倒せ。符養』」

縛られていた符養が縄を残して消え、私の前に現れた。

「……飛鳥、ありがとう。」

「フー、琴葉をお願い。今なら召喚獣がないから召喚する前に初撃を入れれば後は楽だと思う。」

「……わかった。」

そう言つて符養は琴葉に向かって行つた。

さて、私は鈴を倒さない。

私が鈴が飛ばされたところに着いたとき、鈴が立ち上がったところだった。

「飛鳥、まさかあんな空間魔術も使えるようになっていたなんて。ただ異世界同士を行き来するだけかと思つたのに。」

「自分で言うことじゃないけど私の応用力なめないですよ?」

「なら飛鳥っちも私の分析力なめない方がいいよ?」

私たちは同時に行動を開始した。

「『硬き岩の壁よ、敵から我を守り敵を押し潰せ
グ라운드
ウォール』」

目の前に岩の壁が現れ、それが相手目掛けて突進した。
私は術を唱えたあとすぐに別の術の詠唱に入った。

「『逆巻く炎、相手を包み込み焼き殺せ
グレン』」

2人が放った岩の壁がぶつかり崩れる。

そして、火柱が鈴を包み込んだ。

私はそうなったあとすぐに鈴に向かって走り出す。
崩れる岩が時々当たるが気にせず向かう。

「『風よ切り裂け
ウインド』」

その時に私は小声で魔術を詠唱しそれを剣に溜めた。

「『スプラッシュ』」

鈴が水の魔術で火を消していた。

鈴の周りから水が吹き出ているので鈴の姿は見えない。

「『刹爪・疾風』」
せつすゝめ・はやかぜ

刹爪だが、斬撃が鎌鼬となった。

それは鈴のいたところとその奥までを切り裂いた。
しかしそこに鈴の姿はなかった。

「しまった!」

私は上を見上げた。

鈴は水の魔術を使って火を消したのではなく、こうなることを予測して水の勢いで空中に飛んだのだ。

鈴は私に気づかれた時にはとっくに詠唱をし終えていた。

「『プレス』」

大きな岩の塊が私に降ってくる。

魔術では防御に間にあわないと思った私は別の魔術を使う。

「『飛べ ジャンプ』」

私は岩が当たらないところへ瞬間移動した。

だが、ここまでもかもしれない。

空間魔術は空間を超越する魔術なので、簡単な術でさえも魔力の消費が激しい。（しかし、異世界へはなぜか通常の魔術を使った時のらしいの魔力しか消費しない）

しかし私には剣術がある。

それだけでも勝てるかもしれない。

私は空中から降りてくる鈴が地面に着地すると同時ほどのタイミングを考えて走り出した。

鈴は私が走ってくるのに気づき、慌て術を詠唱し始める。

しかし遅い、私が一瞬早かった。

「『連牙翔龍迅』」
れんがしゅうりゅうじん

龍の形をした斬撃を何度も撃ち、最後に剣を思いっきり振り下ろす。

鈴は攻撃をモロにくらった。

………と思ったが

「飛鳥、さっきのは効いたよ。私もこれを止められなかったら完全に負けてた。けど成績のいい術師は召喚獣や魔術が使えなくても何かでカバーするんだよ。」

鈴が横目で符養達のところをみていたので私も見る。

符養は琴葉に召喚させていなかったが、琴葉自身が符養と戦っている。

「琴葉も私もいざという時のために素手での戦闘訓練をつんできたの。まあ、琴葉がそれをしていたことは意外だったけどね。そのおかげで予想していた作戦よりいい作戦になったけど。」

私は剣を持った鈴を蹴って手を放させ、鈴から離れる。

まずい、このままじゃ負ける。

私は使いたくなかったが、魔術を使う。

「『自然に存在せしマナよ、我に恵みを、力を。我、その恵みを受けん　ムーンライト』」

自然のマナが私の魔力を回復させていくのがわかる。

よかった……、成功した。

「……な、何？その魔術？」

鈴が驚いた表情で私に聞いてきた。

「私が開発中だった魔力を回復させる魔術。回復魔術から応用してみただけでなかなかうまくいなくて……。さっきは一か八か賭けてみただけで予想以上の成功だったよ。魔力全快なんて。」

「賭けつて……。ふふふ、飛鳥つちらしいや。」
「言ったでしょ？私の応用力をなめないでっ。」

戦いが再開される。

魔力全快になつた私には策がある。

私は詠唱をし始めながら、そのまま鈴に突撃していく。

詠唱する、転送能力を失わせた私の最強の魔術を。

さらに詠唱しながら鈴に剣を振っていく。

「『世界を支える自然の力、火・水・地・風・雷・氷・光・闇、万物の力宿りしこの魔術仇なす者全てに制裁を加えて、その他の者に聖なる加護を与え癒やしの力をもたらせ！ エレメントエイト』」
「それって……」

「威力がケタ違いだから使いたくなかったけど、やっぱり全力でやらないとあとで怒られると思つたから。」

「……何かを制限してるらしいけどその時点で全力じゃないじゃん。」

各属性の光が訓練所全体に広がる。

そこで私の意識は途切れた。

多分大量の魔力を一気に消費したから一時的に魔力不足と同じ状態になつたのだろう。

私が目覚めた時私はベッドで寝ていた。

「あ、起きた？」

琴葉が私の視界に見えた。

「大丈夫だった？あんなすごい魔術使えるってやっぱり飛鳥はすごいよ。」

「……他の2人は？」

「……」

そう聞いた瞬間琴葉は俯いて何も返してくれなかった。

表情がみえない。

その反応から私は最悪の光景を想像してしまった。

「まさか……。」

「飛鳥、気をたしかにしててね。」

琴葉の口がゆっくり動く。

「符養なら、あなたの右隣にずっといるわよ。」

「ずっと」「らへんから笑いながら言った。

……ってええ！？

と、思い私の右隣をみると、符養が私に寄り添う感じで寝ていた。

「で、鈴ならあなたの左隣で寝てるわよ？……もしかして本当に気づいてなかった？」

左をみると鈴が寝ていた。

よく見たら怪我をしている。

「この傷……」

「魔法で弱まっていたとはいえ、あんな魔術をモロに受けたからね。けど軽傷だから心配ないって。」

「そう……。」

「さっきまで起きてたんだけどね、眠いって言って寝ちゃったの。」

安心した。

「一応そこまでひどい被害はないみたいだ。」

「……………そういえば」

「ん？」

「……………」

琴葉が呆れた顔をした。

「琴葉？」

「飛鳥、今更それを言う？」

「ちよつと動揺して……………」

「……………はあ……………」

琴葉が溜め息をする。

私そんなに天然？

「……………うん、天然。」

「……………フー、普通ならいつ起きたか聞きたいところだけどまずなんで私の心を読めたのかな？」

「……………」

黙った。

まあこのことについては深くは聞かないでおこう。

「ていうか琴葉、ここはどこなの？」

「ああごめん。2人の掛け合いが微笑ましくって言うタイミング失ってた。」

……今度は私が溜め息したくなる。

「で、ここがどこかって言うとな、……飛鳥の家。」
「……………え？」

……………自分の家だとわからなかった自分が恥ずかしい。

テスト準備2 (後書き)

なんかいつもより長くなりそうだったのでここらへんで区切らせました。

次回はとある理由で更新が遅れるかもです。

ネタにつまったわけではないことだけは言っておきます。

この話については大体は考えていますので話関連で遅れる場合はその内容に関してだと思えます。

あれ？それもネタに詰まったっていうんですかね？

まあ今回はこのへんにしておきます。

なるべく更新を遅らせないように頑張ってみます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7437m/>

クロスウェポン

2011年9月25日12時00分発行